
ブラックホワイト

Sagittarias

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックホワイ

【Nコード】

N86050

【作者名】

Sagittarias

【あらすじ】

ポケモン版「ロミオとジュリエット」！！（爆）『ポケットモンスター ブラック・ホワイ』が原作の恋愛冒険ファンタジー小説です。女主人公とNの人間関係がメイン。挿絵が多いのでパソコンで読むことを勧めます。基本トウコ受けです。恋の多角形（笑）。主人公モテモテvまだ第1章が終わっていませんが第2章にクライマックスが載っています。ネタバレ注意です。2章と3章はシリアスです。

プロローグ（前書き）

プラチナが原作の『長髪の美少女』もよろしくお願いします。

ブローグ

> i 1 3 8 1 3 — 6 9 9 <

カントー・ジョウトから遠く離れた特別な地方、イツシュ。

中心のハイリンクと呼ばれる場所には聖なる樹ハイルツリーが生えている。

ハイルツリーの放出する不思議な力デルパワーの加護を受けるためハイリンクを囲むように8つの町が建設された不思議な地方だった。この地方の端にある田舎町、カノコタウンから3人の少年少女が旅立った。

1人はチャンピオンを目指す黒髪の少年

1人は世界を知りたがる金髪の少女

最後の1人は自由を求める少女だった。

博士は3人にポケモンを与えた。

黒髪の少年は火の豚を

金髪の少女はラッコを

もう1人の少女は草蛇を選んだ。

3人はポケモンを連れ同じ日に旅立った。

違う目的を持った3人の幼馴染は

それぞれの目的を達成するため別れた。

だが行く先々に現れる悪の組織プラズマ団。

自由を楽しむ少女の前には謎の青年まで現れた。

ポケモンを解放したがる謎の青年。

ポケモンと自由を楽しみたい少女。

反発しながら2人は互いに惹かれあっていく。

2人はやがて英雄としての使命に目覚め

2頭の龍が眠るイツシュ地方を揺るがすものになっていた…！

> i 1 4 0 0 7 — 6 9 9 <

登場人物紹介（前書き）

今度の主人公は小悪魔！？三角関係はもちろんあり

登場人物紹介

「なに？新手のナンパ？……………悪いけどお断りよ！」

> i 1 4 3 7 5 — 6 9 9 <

ノエル・ピースメーカー No?l Peacemaker

・山羊座の12月生まれ。15歳。アメリカ人？

親も兄弟もない孤児。みなしこ4歳のときアラギ博士に引き取られた。

ベルとチェレンとは10年以上の付き合いがある。大胆かつ豪快で明るく積極的な性格。自分に自信たっぷりな小悪魔系の女の子。男女共に好かれ頼りにされているクラスのマドンナ的存在。美脚の持ち主だが貧乳で中世的な顔をしていることを気にしている。

体育会系らしく勉強は苦手遊ぶのが好き。成績は悪い。部活はラクロス。テレビゲームが得意。好きな音楽はロック。エレキギターを弾ける。学校ではかつこよく決めているが部屋は汚い。掃除も洗濯も料理も裁縫もできない。ジャンクフードが好きでカップヌードルを友と呼ぶ。どこかオヤジっぽい。

ジュニアスクール卒業と同時にアラギ博士からポケモンをもらい旅に出る。パートナーはツタージャ。力押しのダイナミックな戦い方を好む。怒るとなぜか怪力になる特異体質。

*ノエル(No?l)はフランス語で「クリスマス」。ピースメーカー(Peacemaker)は「調停者」。ようするに「争いを止める者」。

「付き合っー？ベル恋愛よくわからなーい！」

> i 1 4 3 7 6 — 6 9 9 <

ベル・ルブラン Belle Leblanc

・乙女座の9月生まれ。15歳。フランス系アメリカ人。

お金持ちの女の子。マイペース。そしてドジっ子。ルブランカンパニーの一人娘のせいか父親が過保護で困っている。ノエルとチェレンの幼馴染。もう一人のクラスのマドンナである。天使系で本人は無自覚だけどもんなに癒しを与えている。巨乳で童顔という反則技で男の子にモテる。

文化系で美術部に所属している。絵は幼稚園だったら上手いレベル。成績は平均。家事は全てメイドがやるので1人だとなにもできない。好きな音楽はポップ。チャに使われるような明るい音楽が好きらしい。フランス料理とイタリア料理が好き。

パートナーはミジユマル。防御を重視した戦い方をする。バトルは3人の中で一番弱い。

*ベル（ ）とはロシア語で「白」。ルブラン（Leblanc）もフランス語で「白」。ベル（bellé）はフランス語だったら「美しい」を意味する。

「ふ、不純異性交遊禁止！」

>i14377—699<

チエレン・シュヴァイツァー Cheren Schweitzer
・水瓶座の2月生まれ。16歳。ドイツ系アメリカ人。

設計士の息子。ノエルの色仕掛けとベルの天然に振り回されている。真面目な性格でジュニアスクールでは委員長を務めた。キツイ顔をしているが女の子たちに密かに人気がある。いつもノエルとベルと一緒にいるので男の子たちから妬まれている。

理科系で成績優秀。委員長の仕事がなかったらパソコン部に入っていた。部屋は綺麗に片付いている。ノエルやベルと違って家事全般できる「おかあさん」。苦勞人。どちらかというと和食派。好き

な音楽はクラシック。

パートナーはポカブ。テクニカルな戦法を得意とする。ポケモンチャンピオンを目指して旅立った。

*チエレン（ ）はブルガリア語で「黒」。ラストネームのシュヴァイツァー（Schweizer）もドイツ語で「黒」という意味。黒〓シュバーツ（das Schwarz）から。

「ポケモン以外の生き物で興味を持ったのは君が初めてだよ」

>i14378—699<

N^{エヌ}

・？月生まれ。？歳。アメリカ人？

ノエルに行く先々に現れるどこか影のある謎の青年。整った顔をしている。どの町に行っても会うのでノエルにストーカーと呼ばれている。その行動の目的は謎に包まれている。ポケモンを「トモダチ」と呼び、「ポケモンは人間から解放されるべき」というプラズマ団の思想に共感している。独特の雰囲気に変わった発言からノエルは電波だと思っている。

理数系。数式が好ましい。好きな音楽はジャズ。会ったびに違うポケモンを連れている。計算しつくされた戦法でノエルを追いつめる。

「ハニー！ヤングガールズ&ヤングボーイズ！青春してる？」

>i14379—699<

アララギ博士 Professor Araragi

・30代。日系アメリカ人。既婚者。

ノエルの保護者。ノリがいい女性。カノコタウンで「ポケモンの

始まり」について研究している。研究に忙しく家事は全てお手伝いさんに任せている。ノエルが料理も掃除もできないのは博士に似たからだ。ノエルと同じ家に暮らしているが研究所でほとんど寝起きしている。恋バナが好きで青春にこだわる。ノエル・ベル・チェレンが誰と結ばれるか楽しみにしている。

ノエル・ベル・チェレンの母親と話し合い、子どもたち3人に世界を知ってもらったためポケモンをたくした。博士の手持ちポケモンはチャーミー。

小悪魔ノエル

「知ってる？ノエル。女の人って実は男の人より賢いのよ。だからあなたも上手く男の人を利用して幸せになりなさい」

ノエルがアララギ博士に引き取られ、一番最初に教えられたことがそれだった。

『小悪魔ノエル』

「や〜ん！これかわいい〜？ねえねえ、この指輪買ってえ〜？」

店の前に2人の若い男女が立っていた。茶色いポニーテールの女の子が男の子の腕にからみついている。2人ともオシャレな服を着ているところからおそらくデート中だろう。

男の子は照れながらも指輪を買うことを迷った。空いている手で頭をかいている。

「う〜ん……でも30ドルもするよ」

「ねえ〜マイケル〜。お願い。一生大切にするから買ってえ〜？」

お尻をふりふりしながら猫なで声で話す女の子はおねだり上手だ。まだ15歳くらいなのに小悪魔ガールを究めている。

> i 1 4 7 8 3 — 6 9 9 <

「これ買ってくれたらマイケルの願い1つだけ叶えてあげるう〜？」
「本当っ！？」

素直なマイケルは反応した。彼は慎重に言葉を選びながら訊ねた。

「えっと……それって……どんな願いでもいいの？」

女の子はあごに人差し指をそえた。

「願いにもよるけど、なるべく叶えてあげたいなあ……って思うの？」

上目づかいでマイケルを見つめる女の子。並みの男の子なら悩殺できるレベルだ。そして女の子にとっては幸運なことにマイケルは顔も中身も並みだった。……もつとも、日本人にはかっこよく見えるかもしれないが。

「じゃ、じゃあ買っちゃおうかな……」

それを聞いて女の子の目が輝いた。

「や〜ん！マイケル大好き〜」

女の子はマイケルの首の後ろに腕を回した。彼の胸に頬ずりをする女の子は猫そのものだった。

ところが2人の交渉が設立したのを合図に笛がけたたましく鳴った。

「こら〜！そこにいる男女！そこまでだ〜！」

メガホンのせいで声が大きく広範囲に聞こえる。街角から狙ったように現れたのは黒髪の男の子だった。

場所はアクセサリーショップから公園へ移った。さきほどまで品物を見定めていた男女はベンチに座らされている。黒髪の男の子は黄色いメガホンをぽんぽんと叩いた。獲物をどう調理するか考えているのだろうか。眼鏡の奥で釣り目が光っている。

「ふじゅんいせいこうゆづぎんし
不純異性交遊禁止！」

マイケルの肩が震えた。だが女の子は少しもひるまず軽口をたたいた。

「いいじゃない。デートくらい。チェレンは固いわね」

「うるさい！ノエルが軽すぎるだけだ！」

黒髪の少年、チェレンは全く反省していないノエル 茶髪の小悪魔ガール を叱った。

「不純だ！不純すぎる！マイケルはノエルとHできるかもと不純な理由でデートに誘った！」

ギクツとマイケルの肩は上がった。どうやら凶星のようだ。

「そしてノエルはマイケルを財布代わりにしようという不純な理由でOKした。……絶望した！不純な男女に絶望した！」

「もう帰っていい？」

ノエルはあくびをした。反省する気^{ゼロ}だ。

「ああいいだろう。今日のところは見逃してあげよう。寄り道しな

いようにノエルは僕が送る。マイケルもさっさと帰りたまえ」
「えっ」

マイケルはあっけにとられた。勇気を出して誘ったファーストデート。だがその努力もむなしくチェレンによって強制終了させられてしまった。チェレンが歩き出すとノエルは彼についていった。マイケルは1人寂しく公園に残されてしまった。

チェレンとノエルは帰る途中に自動販売機に寄った。ノエルがデートのキャンセル料を要求したからだ。チェレンは文句を言いつつもカルピスをおごった。自分用を買ったコーヒーを飲みながらチェレンはため息をついた。

「全く……好きな人意外とデートしちや駄目じゃないか。もてあそばれる男たちがかわいそうだ」

「自業自得でしょ。騙されるほうが悪いって」

「襲われたらどうする？」

「アハハッ。それ本気で言ってるの？」

ノエルはケラケラと笑う。あの男をバカにする笑い声は間違えなく小悪魔だ。

「そんなことするやつはいないわよ。だって」

なにかがつぶれる音がした。ノエルの持っていたアルミ缶が前触れもなくつぶれた。未開封だった缶から白い液体が流れる。

「あたしに敵うはずないじゃない」

チエレンは頭を押さえた。どうやら彼は飲み物をもつ1本おごるはめになりそうだ。

小悪魔ノエル（後書き）

ノエルはゲームの主人公の外見のイメージからこうなりました。活発で遊び好きで勉強嫌い、エレキギターをかつこよく弾く小悪魔ガールです。面倒くさくてつまらないことは一切やりません。家事とか（笑）。

純天使ベル

「よくお聞き。ベル。世界は……いや、宇宙はおまえを中心に回っているんだ！だから無茶をしちゃ駄目だぞ」

中学生になったとき、ベルは理科の授業でお父さんが間違っていることに気がついた。

『純天使ベル』

とある晴れた土曜日の午後。3人のティーンエイジャーがアラブ宮殿みたいな屋敷に集まっていた。現在3人がいるのは寝室にしては広すぎる部屋。部屋はかわいいぬいぐるみで埋めつくされている。ところどころにお花グッズが置かれており、壁にはファンシーなポスターや手書きイラストなどが飾られてある。

仲良しトリオはクッションの上に座っていた。金髪のショートボブの女の子と茶髪のポニーテールの女の子は隣合わせで座っている。低いテーブルをはさんで向かい側に座っているのは黒髪で眼鏡をかけた男の子だ。

金髪の女の子は分厚い教科書をジャーンと言いながら出した。

「今日はお勉強会だよ！まずはチェレンの得意な数学からやろうね」

彼女は元気にニコニコ笑っていた。輝くような笑顔は天使そのもの。幼い顔つきとパツチりおめめは生まれたての天使を彷彿ほうふつさせた。

ところがチェレンと呼ばれた男の子は彼女の笑顔に見とれること

なく目を閉じた。

「……ベル。僕が1番得意としているのは情報処理だ。インフォメーション・テクノロジー2番目は理サイエンス・マスマティクス。数学は3番目だ」

そう言いつつもチェレンは数学の教科書とノートを取り出した。
金髪の天使はベルという名前らしい。

「……と言つても僕はもうほとんどの宿題を終わらせたからね。あとで答え合わせだけするよ」

「ええ。ヤダ」

茶髪の女の子が口をとがらせた。ゴージャスなポニーテール姿が示すように勉強は苦手らしい。

「数学嫌い。宿題全然やってない。チェレン、写させて」

> i 1 4 7 8 4 — 6 9 9 <

「断る！」

女の子の両手を組んだお願いポーズの効き目はなかった。彼女のお願いは一瞬で却下された。

「ベルはちゃんとやったよー」

ベルは自信満々でノートと教科書を開いた。茶髪の女の子はどれどれとノートを覗きこんだ。

「ホント？写させて？」

「うん！いいよー！」
「良くない！」

チエレンはベルからノートを奪い取った。しばらく目を右へ左へと動かしたあと彼は勢いよくまくしたてた。

「それ違うページ！しかも答え半分くらい間違ってる！」
「えー？」

ベルは小首をかしげた。自分が犯した過ちを理解できずにキョトンとしている。

「『えー？』じゃない！257ページからだ。わからないところがあつたら訊いてくれ。ほら、ノエルもやる！」

「はい！」
「はい！」

ベルは元気に、ノエルは面倒くさそうに答えた。2人はノートをめくりまだ使っていないページを開く。

「それじゃあ僕は国語の宿題をやるう。確かオリジナルのポエムを書くんだったけ？メンドーだな……」

彼の独り言にベルは顔を上げた。

「チエレンはそーゆーの苦手そうだもんね」
「全く……」。シェイクスピアはよくこんなメンドーなものをホイホイ書けたな」

そこへ先ほどから1問も解いていないノエルが思いがけない言葉

を発した。

「あ。あたし3時からジョニーとデートだから途中で抜けるね」

「「え？」」

ベルはのんびりと、チェレンはきつい口調で言った。チェレンは気に障ったようだった。

「まったく……。またデートか」

「まあね」

そう言うとなエルは黒ベースでピンクの模様がある手帳をバッグから取り出した。

「今日はジョニーで……。明日の放課後はアダムで、月曜日はニックで、火曜日はクリスで、水曜日は4限と5限サボってジェイコブとデートで……」

「勉強しろ！あと授業サボるな！」

チェレンは鋭いツツコミを入れた。先週の日曜日にマイケルとのデートをチェレンに中断されたばかりなのにノエルは懲りていないらしい。

「だいたい君は肌を見せすぎだ！今日だってノースリーブじゃないか。先週の日曜日はミニワンピースにガーターベルトを履くなんて何を考えているんだ？男がその気になったらどうする！ベルのようにもうちよつと露出を押さえて……」

「残念だなあ……。今日は宿題が半分終わったら3人でピクニックに行こうかと思っていたのに」

ベルの一言が空気を変えた。ノエルとチェレンは思わずハツとしてベルを見た。

「先約があるなら仕方ないよね。また今度にしようか」

ベルはいつものように笑った。だがその表情はどこか曇っており、寂しそうだった。

「ベル……」

特に意味もなくノエルはベルの名前を呼んだ。しばしの沈黙が流れた。ノエルは少し悩んだあと口を開いた。

「……………やゝめた」

「えっ？」

ベルの目が見開いた。チェレンもベルと同じ顔をしていた。

「ジョニーとのデートは取り消し。ベルとチェレンとピクニックに行ったほうが楽しそうだもん」

「ノエル……！」

チェレンは驚きと喜びが混じった声を出した。ベルは座ったままノエルに抱きついた。

「わーい！ありがとう！ノエルだーい好き！」

「きゃっ」

2人は勢いで床に倒れ込んだ。カーペットが敷かれているおかげであまり痛くない。

「あたしもベルのこと大好き？」

「両想いだね！」

床でじゃれあう女の子たちを見てチエレンはやれやれと笑った。
ノエルもチエレンもベルの無邪気さには敵わないようだ。そしたら
ベルはなにかを思い出したように急に起き上がった。

「あつ！チエレンのことも大好きだからね！」

「い、言われなくてもわかってるよ！！」

そのあとチエレンはベルとノエルに飛びつかれ、2人に押しつぶ
されたのは言うまでもない。

純天使ベル（後書き）

私のベルは金持ち設定です。ゲームをプレイする前、ベルの父親が過保護と妹から聞き「過保護」金持ち」と勘違いしたからです。家がアラブ宮殿みたいなのはベルのポリュームのある髪から連想しました（笑）。

苦勞人チエレン（前書き）

この小説では日本とアメリカの学校がごちゃまぜになっています。

苦勞人チエレン

「チエレンって料理も掃除もできるしお金の管理も上手ね。きっと将来いい主夫になると思うわ」

母親の冗談とも本気とも取れる発言に、チエレンは必至に弁明した。

『苦勞人チエレン』

ジュニアスクール
中学校の廊下は静かだった。授業中なのであちこちのドアから先生の声が漏れているくらいだ。その声も何を言っているかははっきり聞き取れない。どのクラスも先生の講義がグループ・ディスカッション中の生徒の声が聞こえる。だが1つだけそうではないクラスがあつた。

「ほら、これよ。表紙に載ってたHIKARI特集！」
「わあ！」

2人の女の子の会話が聞こえる。そのクラスでは生徒たちが思い思いの行動をしていた。グループで集まっておしゃべりする者たち、真面目に勉強する者たち、1人で本を読む者もいる。黒板にはチヨークで大きく『セルフ・スタディ自習』と書いてあつた。先生が病気で学校を休んだらしい。先生がいないことをいいことにそこにいる生徒たちは自由に時間を過ごしていた。1番騒がしいグループは4人の女の子たちの集まりで1つのファッション雑誌をみんなで読んでいた。さきほどから声の大きい2人の女の子は雑誌から目を離れた。

「HIKARIっていいよね。清純派って感じ？ イツシユにはいな

いタイプ！」

「男性モデルのKOUKIと付き合ってるって本当かな？」

「えっ？ポケモンチャンピオンのジュンと付き合ってるんじゃないか
つたっけ？」

「……まさか二股！？」

「「キヤーー？」」

別の2人は雑誌に載っている服を見ては「これかわいいね」、「この服あたしの好み？」と話していた。モデルの話をしていた女の子の1人は服の写真を見ている2人に話を振った。

「ベルとノエルはどのモデルが好き？」

質問に最初に答えたのは金髪のボブの女の子だった。

「ベルはアキラとー、カミツレさんが好きー！」

一人称に自分の名前を使う女の子　ベルは迷わず答えた。

茶色の巨大なポニーテールの女の子は雑誌をパラパラとめくった。
有名なモデルたちに通り目を通したあと彼女は答えた。

「あたしもカミツレかな。HIKARIは完璧パーフェクトすぎて嫌い。シロ
ナは胸デカすぎてムカつく」

質問をしなかったほうの女の子がしゃべった。

「でもノエル。HIKARIって方向音痴で運動音痴で歌も音痴な
んだって」

「マジで！？やったー！あたしの勝ちー」

4人の女の子たちはお腹をかかえて笑った。他のグループに盗み聞きされていることも知らずに。

女の子たちが座っている席から近すぎず遠すぎず。5、6人の男の子たちが絶妙な距離で彼女たちの会話を聞きながらうつとりしていた。

「あいかわらずノエルの奴いいケツしてるな」

見るからに遊び人といった感じの男が口笛を吹いた。

「美脚だよな」

彼に同意するようにもう1人の男の子は言った。

「たぶん栄養が全部お尻と脚に行っただんじやないのかな？」

「じゃあベルちゃんの場合栄養が胸に行っただんだね」

ぼつちやりした男の子が栄養説に乗った。最初の3人と違ってこちらはノエル派ではなくベル派だ。クラスにいる2人のマドンナ：ノエルとベル。お尻か胸か、小悪魔か天使か、運動部か文化部スポーツアーティスティックか。2人の人気は好みによって別れる。

「ベルちゃん胸おつきい」

また別の男子がつぶやいた。当の本人たちはそんな会話耳に入らず、ノエルはベルの胸をつかんだ。

「この巨乳め！あたしにも分けるー！」
「きゃー！ノエルー、くすぐりたいよー」

その様子を見て男子たちはおおーと鼻の下を伸ばした。まさかこんな夢のシヨットを教室で見られるとは誰一人思わなかった。海辺で水着姿ならともかく2人は制服姿である。白いブラウスにチエツクのネクタイとプリーツスカート。どこから見ても立派な女子中学生だ。

クラスがノエルとベルに注目しているなか、真面目な“彼”は教室へ戻ってきた。男子グループがマドンナたちに見とれている間“彼”は男子たちの後ろに回った。

「そんな性的な目で僕ノエルとベルの友人を見るのはやめてくれないかい。君たち」

男子たちはギョツとした。振り返ったらそこには学園一真面目な優等生、チエレンが立っていた。

「全く。僕がトイレに行っている間にこんなにクラスが荒れるとは……。君たちが何をするか勝手だがもう少し静かにしてくれたまえ。他のクラスの授業の邪魔をしないように」
「で、出たなー！“委員長”！」

遊び人の男子が興奮して立ち上がった。どうやらチエレンに恨みがあるらしい。

「てめっ！このまえはよくもノエルにデートの予約をキャンセルさせたな！」

「プレイボーイのジョニーか……。ノエルはキャンセルして正解だったな。もつとも、キャンセルした理由はベルにあるのだけれど」

ジョニーは齒ぎしりした。口ではチェレンに敵わない。……………成績でも敵わないが。ジョニーをきっかけに男子たちは今までの不満を次々とぶちまかした。

「チェレン！ずるいぞ！おまえばかりノエルとベルちゃんを独占して！」

「プレイボーイはおまえのほうだ！自分だけ棚に上げるとはヒキョーだな！真面目な顔しておまえもやるときはやるんだな！」

「マドンナ独占はんたーい！」

「ひどいよ！オレとノエルのデートを邪魔して！」

「このマジメガネー！」

「婚約者のベルちゃんと付き合うのはいざ知らず、ノエルちゃんまで愛人にして常に2人の女子に囲まれて過ごすだなんて言語道断……恥を知れ！」

男子たちは言いたい放題だった。デートをキャンセルされたジョニーとデートを中断されたマイケルの声まで混じっている。チェレンは特に傷ついた様子もなかったため息をついた。

「ずいぶんな言われ様だな。……………ベルは婚約者じゃないしノエル

とも付き合っていない。ただベルの父親に彼女に悪い虫がつかないよう守れと頼まれたただけだ」

「^{ナイト}騎士気どりかよ」

「かつこつけてるつもりか？」

「ダッセー」

納得しきれない男子が文句を言った。チェレンは目を細めた。こ

んなことになった以上ここにおいても彼は勉強できないだろう。自習時間は教室だけでなくカフェテリアや図書館で勉強することを許されている。チェレンが荷物をまとめて図書館へ行こうかと思ったとき。2人の生徒が彼の腕をつかんだ。

「ねえねえ、チェレン？あたしとベル、どっちが好き？」
「なっ……！？」

ノエルの不意打ちにチェレンは口を大きく開けた。もう片方の腕にしがみついていたのはベルだった。ノエルは余裕の笑顔で彼に訊ねた。

「もちろんあたしだよね？」
「えー？ベルだよー！」

ベルは困り顔でアピールした。チェレンのシャツを引っ張るというかわいい仕草つきで。

前触れもなく両手に花状態になったチェレン。彼は女子の冷やかしの視線と男子の嫉妬の視線に見守れながらこの状態の突破口を探した。

> i 1 5 2 2 4 — 6 9 9 <

「な、なんでいきなりそんなことを訊くんだ！？」

「さっきヘイリーとケイトリンと話してたらHIKARIの二股の話になって。でもHIKARIも最終的にKOUKIかジュンのどっちかを選ぶでしょ？……すでにもうどっちか選んでいて噂だけが泳いでるだけかもしれないけど。で、チェレンはあたしとベル、どっちを選ぶのかな？って気になって？」

「はあ？」

男と女の考え方は違う。チエレンはノエルたちの考えを理解できず呆然とした。

「チエレンはベルのこと好きだよねー？」

「やゝね。あたしに決まってるじゃない」

「ベルのほうがチエレンと先に会ったもん！！」

周りの生徒たちは2人がふざけているのか本気かわからない。ノエルは完全にふざけている。ベルはゲームに負けるのが嫌という感じただムキになっているだけだ。どちらもチエレンに恋していない……はず。少なくとも今のところ友達以上恋人未満だ。そしてそれはチエレンも同じだった。だがたとえチエレンがどちらか選んでも選ばなくても質問責めされることには変わらない。

「悪い！用事を思い出した！またな、諸君！」

チエレンは持ち物を強引にバッグに詰め込んで廊下を駆け出した。それをノエルとベルは手ぶらで追いかける。

「こらゝゝ！待てゝゝ！」

「逃げちゃダメなのー！」

「勘弁してくれー！」

走る、走る。3人の男女が廊下を走る。静かだった廊下はもう過去形だ。チエレンはなかなか捕まらなかった。ノエルが手加減をしていたからだ。わざと獲物を逃がして楽しんでいる。本気で走ればすぐ捕まえられるのにベルのペースに合わせて走っている。3人は程なくして通りすがりの先生に捕まり、ペナルティ罰として放課後居残りをさせられた。

苦勞人チエレン（後書き）

私のチエレンはハゲるくらい苦勞します（笑）。この小説の唯一の常識人ですから。番外編ではほぼ主人公です。公式絵で見たとき第一印象が「真面目で優等生。苦勞しそう」でした。

magazine talk

世の中には自分と同じ年なのにとんでもないくらい活躍している人たちがいる。

『magazine talk』

> i 1 5 2 2 5 — 6 9 9 <

午後5時13分。学校が終わってすでに1時間以上経っている。放課後になったばかりのときはまだ青かった空も茜色になりつつある。3人の生徒は人気ひとけのない廊下を歩きやがて学校を去っていった。

「あゝ。疲れたゝ。居残りディテンションってマジつまんない」

茶髪の少女はあくびをした。大きく開けた口を隠そうともせずみっともない。

「誰のせいで居残りするはめになったんだ？」

黒髪の少年が眼鏡をくいつと上げた。口が「へ」の字になっている。話し方といい表情といい見るからに不機嫌そうだ。

「うーんと……チェレンのせい？」

金髪の少女が自信なさげに答えた。幼い顔に困惑が見える。彼女自身答えがわかってないようだった。

「違う！どう考えてもノエルのせいだろう！！」

今日も平和なカノコタウンにチェレンのツッコミが入る。

カノコタウンの名物トリオ：小悪魔ノエル、純天使ベル、苦労人チェレン。3人は緑が生い茂る道を並んで歩いていった。

「だいたい学校にファッション雑誌なんで持ってくるな！」

チェレンの説教は続く。居残りの原因であるノエルは言い返した。

「いいじゃん。それにあたしのじゃないわよ。ケイトリンのよ。男子だつてたまにグラビア雑誌持つてくるじゃん」

「グラビアはもつと駄目だ！」

「あつそ。せいぜいがんばつて駆除すれば？」

2人の痴話喧嘩ちわげんかをよそにベルは例のファッション雑誌を読んでいった。

「ファッションって芸術だなー」

パリリとページをめくっているとやがてHIKARIの特集ページまで着いた。ノエルはベルの雑誌を覗き見た。ノエルはHIKARIのページを見ると話題を変えた。

「それより見てよ。チェレン。HIKARIってあんたの初恋の人に似てない？」

「はあ？」

ベルはチェレンにも見えるように雑誌を裏返した。最初は怪訝^{けげん}な顔にしていたがHIKARIの写真をじっと見ると顔色を変えた。

「ま、まあ……。確かに言われてみれば昔近所に住んでいたお姉さんに似ているような……」

チェレンは顔をほころばせた。初恋の甘酸っぱい思い出に浸っている。

「今どきめずらしい清楚な女性だな」

「ベルたちと同じ年なんだよー」

「ほう」

ノエルは心の中でしめしめとほくそ笑んだ。見事にチェレンの説教から逃れることに成功したからだ。

「HIKARI。高級ファッションブランドURAYAMAの専属モデル。来年高校生になるらしいわ。料理も掃除も裁縫もできるの。おまけに真面目。あんたにそっくりね」

「ほう……理想の女性だな。君と正反対だ」

ノエルはムツとしたが我慢をした。チェレンは皮肉を言いつつもHIKARIに見惚^{みと}れていた。そこでチェレンの驚く顔^{おどろ}が見たくて次のようなことを告げた。

「彼女シンオウ地方の元チャンピオンなの」

「ええっ!？」

チェレンは思わず身を引いた。見開いた目に大きく横に開けられた口はまぬけだった。

「この可憐な乙女が?!」

ポケモンチャンピオンを目指す彼にとってその事実は衝撃的だった。自分と同じ年の、それも彼の好みの、少女が昔ポケモンリーグを制覇したというのだ。写真に写る細い体からは想像できない。

クスクス笑うノエルの変わりにベルが答えた。

「うん。同じモデルのシロナさんもアキラもみんな元チャンピオンだよ!HIKARIは3年前シロナさんを倒してチャンピオンになったんだって!でもチャンピオンを継がなかったの。だからジユンがシロナさんを倒してチャンピオンになったの!.....あ!アキラはシロナさんの前にチャンピオンになったけどチャンピオンを継がなかったんだって!」

チャンピオン、チャンピオン、チャンピオン。チエレンの昔からの夢、チャンピオン。ベルが長い説明をしている間チエレンは震えていた。移り変わりの激しいシンオウ方のチャンピオンの話を聞いてチエレンは混乱した。

「一体全体どうなっているんだ!?シンオウ地方はチャンピオンの名産地かなにか?!」

「たまたま短期間でチャンピオンの座に興味ない人たちが団子になつて挑戦したんですよ」

ノエルはそっけなく答えた。だがチエレンの混乱は収まらない。

「チャンピオンになつたのにチャンピオンの座を継がないだなんてなにを考えているんだ??」

「一度頂点に立ったから気が済んだんじゃない?」

ベルが割って入ってきた。

「アキラはただ強くなりたかったただけなんだって！HIKARIは自分が誰だか知リたかつたからって聞いたけど……」

「自分が誰だか知リたかつたあ？」

ノエルはベルの言葉をオウム返しをした。ベルは困ったように言
った。

「ベルもよくわからないの。雑誌にそう書いてあつただけだから」

「……なにそれ？」

ノエルは乱暴に頭を振り腕を組んだ。巨大なポニーテールが揺れ
る。

……ノエルは孤児^{みなしこ}だ。彼女には両親の記憶がない。自分が何人^{なにじん}な
のか、どんな家系だったのか、両親がどんな人でどんな顔をしてい
たのかもわからない。なのに父母共に健在しているHIKARIは
「自分が誰だか知リたかつた」と言う。ノエルは鼻をフンと鳴らし
た。ノエルにはHIKARIの言い分がわからなかった。

「……僕にはわかる気がする」

風が強くなった。ノエルとベルはチェレンを見た。チェレンはた
め息をついた。だがそのため息も風に飛ばされてしまう。

「僕は自分が存在した証を残すためチャンピオンになる。……もち
ろんチャンピオンになったあとは責務を全うするよ。今まで僕が学
校でしてきたように」

チェレンは昔からやる気のない生徒を委員長としてまとめてきた。それが委員長としての責任だと。彼は頼まれもしないのに他人を心配して面倒を見る人間だった。ノエルとベルは彼と親しいため最も面倒を見てもらっている人間だった。ノエルは頭をかいた。

アイデンティティ
「自己の存在証明ねえ……。あいかわらず真面目ね」

「君が不真面目すぎるんだ！………ところでノエル。僕がチャンピオンになったらHIKARIと会えるように……なるかな？」

チェレンは照れながら訊いた。どうやらチェレンはHIKARIのファンになったようだ。

「さあ？チャンピオン同士交流あるかもしれないけど……。HIKARIは前チャンピオンよ」

「そうか……。よし！わかった。やはり僕はチャンピオンを目指す！強く美しく優しいHIKARIと会うためにも！」
「おい」

ノエルは目を細めた。もとはといえばノエルが振った話題だがチェレンがHIKARIにそこまで興味を持つとは思わなかったのだ。どうしようものかと考えていたらベルがチェレンの幻想を砕いた。

「でもHIKARIはジュンかKOUKIと付き合っているって聞いたよー」
「なっ！？」

チェレンのうぶな心が落雷を喰らった。甘い夢を見られそうだったのに一気に辛い現実に取り戻されてしまった。ノエルとベルはチェレンが立ち止まったことに気づかず彼の横を通り過ぎてしまった。

「だ、誰だ！？そのジュンとKOUKIという輩は?!」

ノエルは振り返った。チエレンは乱心寸前で顔が怖かった。

「はぁ……。聞いてなかったの？ジュンは現チャンピオンよ」

ベルも2人の幼馴染につられて立ち止まった。

「KOUKIは男性モデル!……と言ってもバイトでやってるみたいだけど。HIKARIは大学に行くお金を貯めるためモデルをやってるんだよ! KOUKIは飛び級したから今大学生。ポケモンの研究者を目指しているんだって」

「はぁ?」

チエレンは新たな情報に混乱した。ノエルは更なる説明を付け加えた。

「KOUKIはHIKARIと会いたいからモデルやってるんだって。ジュンもたまに雑誌でモデルとして出てるわよ。HIKARIもやってるしKOUKIに負けたくないからだって。ジュンはスポーツ雑誌に出ることが多いわ。チャンピオンだけど運動神経良いからプロ野球やJリーグ、あげくの果てにはオリンピックにまで勧誘されてるの。本人にその気はないみたいだけど」

チエレンは口をパクパクさせた。その口から6文字の言葉が出た。り・か・い・ふ・の・う。理解不能。本当にその通りだ。ノエルはチエレンの意見に同意した。

「ほっつんと理解不能よね!あたしたちと同じ年なのにとっくに旅

を経験してもう働いているんだもの。HIKARIなんて12歳で旅に出るために飛び級して通信制の中学を卒業したのよ。で、3年間旅したあと学校生活に戻ることにしたんだって。用意周到よね。」
「シンオウやカントーでは12歳から旅に出ることができるもんね。イツシュでは15歳からだもん」

「あたしたちもつと早く旅に出たかったよね」

「ねー！でももうすぐ中学校を卒業するから大丈夫だよ！」

チエレンは下を向いて震えていた。大人しくなつたように見えたがどうもそうではないらしい。

「ん？どうしたの？チエレン」

ノエルは先ほどから黙っているチエレンに話しかけた。そしたら案の定チエレンの怒りが爆発した。

「もとはといえば特例として12歳で旅に出るはずだったのに君の小学校の成績があまりにも悪すぎてアララギ博士が『せめて中卒じゃないと……』と気を変えて法律通り15歳から旅に出ることになったんだろうがああああああああつー！！」

アララギ博士の判断は正しかった。もし12歳で旅出つことを許したら遊び人のノエルのことだ。よっぽどのがない限りおそらく帰ってこなかっただろう。HIKARIのように旅を終えたあと高校に通うため戻るとは思えない。そのためベルとチエレンの旅も当然見送られ、ノエルとベルの暴走を止めるためチエレンは委員長に任命された。

ノエルは舌を出して笑った。

「テヘッ?」めんね

m a g a z i n e t a l k (後書き)

『^{ウキ}ブラックホワイ^{ヒカリ}ト』より3年前のH I K A R I ・ ジ ユ ン ・ K O U
K I の物語は『長髪^{ウキ}の美少女』にて好評連載中！

1話 初めてのポケモン

> i 1 5 2 2 6 — 6 9 9 <

ノエルとベルとチェレンが中学校を卒業してから1週間。アララギ博士からノエルの家にプレゼントボックスが届けられた。約束の5分前に来たチェレンと5分後に来たベル。ベルがリボンをほどこきチェレンがフタを開け、ノエルがボールを解放した。

3つのボールから現れたのはミジュマル、ツタージャ、ポカブ。その中でノエルは真ん中にいる緑色のポケモン釘付けになった。草蛇ポケモンのツタージャ。3匹のポケモンが目の前にいるのにノエルにはツタージャしか見えていなかった。

そしてツタージャもまたベルとチェレンなど目に入らずノエルしか見ていなかった。ノエルとツタージャの出会いとは必然だった。1人の少女と1匹の草ポケモンは互いを抱きしめた。ノエルのポケモントレーナーとしての旅は一目惚れから始まったのだ。

「キヤーー？かわいい！！あたしこの子にする！」
「ツタージャ？」

ベルはトレーナーとポケモンの縁結びを笑顔で迎えた。

「じゃー！ベルはこのポケモン！チェレンはこの子ね！」
「ミジュマル？」
「ポカブ？」

ベルはチェレンに炎ポケモンのポカブを手渡した。水ポケモンの

ミジュマルを自分の膝に置いてから。

チェレンは顔をしかめた。

「どうして君が僕のポケモンを決めるのさ……？まあ、別にポカブでもいいけど」

チェレンはノエルにじゃれつくツタージャを見た。ノエルと初めて会ったとは思えないほどのなつきぶりだ。

「……………」

チェレンはこのとき言えなかった。本当はポカブではなくツタージャをパートナーにしたかったことを。

ベルはよいしょ、と立ち上がるとある提案をした。

「みんな自分のポケモンを選んだよね。……ということで。ねえねえ！ポケモン勝負をしようよ！」

「……あのねベル。まだ弱いポケモンとはいえ家の中で勝負は……」
「へえ〜。いいじゃない！やりましょ」

「ツター！」

ノエルとツタージャは乗り気だった。彼女は面白いことはなんでも歓迎する人間だった。たとえそれが悪いことであとで後始末をする事になったとしてもだ。

こうして初めてのポケモンバトルは始まった。ノエルのツタージャはベルのミジュマルに勝ったがチェレンのポカブに負けてしまった。このあと3人はポケモンバトルで散らかった部屋を片付けることになり、アララギ博士の研究所に行くのが遅れてしまった。

1話 初めてのポケモン（後書き）

挿絵に短い文章。本編はこのような感じで進みます。

2話 仲間集め

> i 1 5 6 2 6 — 6 9 9 <

アララギ博士からポケモン図鑑をもらってベルは大はしゃぎ。ノエル、ベル、チェレンの3人は旅の最初の一步を同時に踏み出した。1番道路で博士からポケモンの捕まえ方を教わったベルはあることを思いつく。

「どれだけポケモンを捕まえられるかみんなで競争しようよ？アララギ博士からもらったポケモンも含めてたくさんポケモンを連れている人が勝ちね！」

「えゝ？なにそれゝ？やるやるゝ」

ノエルはベルの提案に喰いついた。ミジュマルとツタージャとポカブは顔を見合わせた。最初はベルを無視しようとしたチェレンも頷いた。

「なるほどね。そういうことなら面白いな。図鑑のページも埋まるから博士も喜ぶだろうし」

ベルはミジュマルを抱えて言った。

「ベルとミジュマルのコンビが1番に決まってるもん！」

「ミジュー!？」

「ヤダー。あたしとツタージャが1番に決まってるじゃない」

「タージャ！」

おろおろするミジュマルにやる気満々のツタージャ。ポカブはチ

エレンについていった。

「それではカラクサタウンに着くまでポケモンの回復は自宅ですく」

「ポカ」

こうして3人の仲間集めが始まった。ベルとチェレンの連れていたポケモンの数は2匹。競争に勝ったのはがんばって3匹捕まえたノエルだった。

「3匹！？すごい！すごい！それだけのポケモンがいてくれるとなんだかときめいちゃうよね！」

ベルはノエルを絶賛した。ノエルは得意げに2つのボールを指にはさんでいる。

「まあね」

「……タジャ！」

勝利に貢献したツタージャも誇らしげだ。

「ふん。たまたま運が良かっただけだろう。……おめでとう」

チェレンも辛口ながらノエルを褒めた。ノエルは笑顔とは裏腹に全く別のことを考えていた。

（捕まえたポケモンってどうやって逃がすんだろ？）

3話 ポケモン解放宣言

『ポケモン解放宣言』

> i 1 5 2 7 7 — 6 9 9 <

ポケモンをもらい、さつそく隣町に来たノエルとベルとチェレン。初めて訪れた町はカラクサタウン。高低差があるおかげで見晴らしが良いのが特徴の町だ。看板には「生い茂る町は繁栄の証」と書いてある。

チェレンはツタージャをボールに仕舞わないノエルを叱った。ノエルはポケモンをずっとボールに閉じ込めるのはかわいそうだと反論する。ベルはノエルの意見に賛成し、チェレンは2対1で負けてしまった。チェレンはあとから現れたアララギ博士に同意を求めるがどっちでもいいんじゃないと言われてしまう。

アララギ博士に施設を案内してもらったあと自由行動になった。フレンドリーショップで何を買おうか迷うベル。ノエルは一足先に出了たチェレンを追って外に出た。

広場に行ったらそこには人だかりが出来ていた。気になって近づいてみるとそこにはチェレンもいた。チェレンと待っているとやがて変わった服を着た人たちが広場に登場した。中世の騎士みたいな格好をした者たち……………彼らに守られるように歩いていたのは、ローブに身を包んだ男だった。彼は容姿からして変わっている男だった。黄色と紫の目玉の模様がついたローブ。2mを超える巨体。長く伸ばしたセラドングリーンの髪も印象的だ。なぜか右目に仮面みたいなものをつけている。

ノエルはローブを着た司祭のような男を見て悪態をついた。

「なにあれ？趣味わる」

「劇の宣伝かなにかじゃないか？」

冷静に分析するチエレン。2人の会話はそう長く続かなかった。
ローブの男が前へ出て演説を始めたからだ。

「皆さん初めまして。ワタクシはゲーチス。プラズマ団のゲーチスです。今日皆さんにお話しするのはポケモンを自由にしましょうということですよ」

ざわめく人々。ノエルとチエレンは眉をひそめた。ゲーチスと名乗る男は北に移動した。柔らかな物腰だが話すことは過激だ。彼の話は始まったばかりだった。

「我々人間はポケモンと一緒に暮らしてきました。お互いを求めあひ必要としあうパートナー。そう思っておられる人ばかりでしょう。ですが本当にそうなのでしょうか？我々人間がそう思い込んでいるだけ……。そんな風に考えたことはありませんか？」

ゲーチスは今度は南へ移動した。人々は彼を目で追う。

「トレーナーはポケモンに好き勝手命令している……。仕事のパートナーとしてもこき扱っている……。そんなことはない誰がはつきりと言いきれるのでしょうか？」

人々もなにか思い当たる節があるのかドキッとした。

チエレンは冷めた目で話を聞いていたがノエルはキョトンとしていた。彼女はポケモンをもらったばかりなのでゲーチスの言うことにイマイチ共感できない。

（そんなことポケモンの言葉がわかる人じゃないとわからないわよ）

ノエルはだんだんゲーチスの話を真剣に聞き始めていく人々を観察した。やがてノエルは1人の青年に気がついた。

（誰こいつ……？）

熱心にゲーチスの話を聞いていたのは長髪の青年だった。綺麗な髪の色はペールグリーンともレタスグリーンとも違う。顔は白黒のキャップを深く被っているからよく見えない。着ている服は白のワイシャツにベージュの長ズボンというなんともシンプルな格好だ。そのかわりネックレスやブレスレットなどのアクセサリーが凝っている。腰にはルービックキューブのようなものでつけていた。

ノエルは目をゲーチスのほうへ戻した。ゲーチスはさらに南へ進んでいるところだった。余裕の態度で人々の反応を楽しんでいる……ノエルにはそう見えた。

「いいですか皆さん。ポケモンは人間と異なり未知の可能性を秘めた生き物なのです。我々が学ぶべきところを数多く持つ存在なのです。そんなポケモンたちに対しワタクシたち人間がすべきことはなんでしょうか？」

人々の間からさまざまなキーワードが飛び交う。「尊敬」「理解」「協力」「解放」。ノエルは足元にいるツタージャを見た。ツタージャもノエルと同じくらいキョトンとしている。

ゲーチスは中央へ戻り、両手を挙げた。

「そうです！ポケモンを自由にすることです！そうしてこそ人間とポケモンは初めて対等になれるのです。皆さんポケモンと正しく付き合うためにどうすべきかよく考えてください。というところでワタクシ、ゲーチスの話を終わらせていただきます。ご清聴感謝いたします」

そう言ってプラズマ団は去ってしまった。戸惑う人々を残して。ノエルはしゃがんでツタージャを優しくなでた。

4話 ファーストコンタクト

> i 1 5 6 0 3 — 6 9 9 <

「タージャ」

ノエルになでられたツタージャは喜んだ。彼女の脚にピッタリくっついている。チェレンはそれを黙って見ていた。そこへ2人と1匹に近づく足音が聞こえてきた。2人は顔を上げた。

「キミのポケモン今話していたよね……」
「！」

立ち上がるノエル。早口で話しかけてきたのはゲーチスの話聞いていたあの青年だった。あまりにも早口だったのでノエルは彼が何を言ったか理解するのに数秒がかかった。

（こいつ……さっきの！……って背え高っ！）

長身だろうと予測はしていたが改めて近くで見ると圧倒される。青年はノエルとチェレンとツタージャを見下ろすように立っていた。ツタージャはノエルの脚にくっついたままだ。

チェレンはノエルをかばうように前へ出た。

「ずいぶん早口なんだな。それにポケモンが話した……だって？ おかしなことを言うね」

見ず知らずの青年におかしな発言。キャップの下から覗く無表情

の顔。チエレンは警戒していた。

「ああ。話しているよ」

チエレンの皮肉に青年は恥ずかしげもなく答えた。

「そうか。君たちにも聞こえないのか……。可愛いそうに……」

ノエルとチエレンは青年を睨んだ。バカにされた気がしたからだ。

（聞こえるわけないでしょ！……なによこいつ。電波？）

自称ポケモンの声が聞こえる青年でもノエルの心の声は聞こえない。ノエルはフンと鼻で笑った。

「なに？新手のナンパ？……悪いけどお断りよ！」

そう言つとノエルは意外なことにチエレンの胸に飛び込んだ。

「わあっ！？」

予想外の行動にチエレンは赤くなる。

「ノ、ノエル！いったいなにを……？」

「残念だけどあたしにはもうチエレンっていう彼氏がいるの。……」

……どう？けっこうイケてるでしょ？頭も良いのよ。それになんたってチエレンはチャンピオンになる男なんだから！あんななんかに勝ち目はないのよ」

自信満々に宣戦布告するノエル。チェレンはノエルに顔を触られあたふたしている。ツタージャはビクリしたかと思うと泣きそうな顔でチェレンの脚をポカポカ殴り始めた。

「……そう」

青年は表情を変えずに言った。

「ボクの名前はN。……君は？」

ノエルはチェレンから離れた。

「ノエル・ピースメーカー」

力強い目だった。さきほどふざけていた様子とはまるっきり違う。

「……僕はチェレン。ポケモン図鑑を完成させるための旅に出たところ。もっとも、僕の目標はチャンピオンだけど」

チェレンはポケモン図鑑を取りだしてNに見せた。

「ポケモン図鑑ね……。そのために数多くのポケモンをボールに閉じ込めるんだ。ボクもトレーナーだがいつも疑問に思う。ポケモンはそれで幸せなのかって」

「なにが言いたい？」

Nはチェレンを無視してノエルに歩み寄った。

「ツタージャ！」

ツタージヤはノエルを守ろうと前へ出た。Nは最初はツタージヤを、そのあとノエルを見てわずかに口元を緩めた。

「そうだね。ノエルだったか。誰に勝負を挑もうか迷ったけど君にしよう。……君のポケモンの声、もっと聞かせてもらおう！」

Nはボールを投げた。出てきたのは紫色の猫だった。

4話 ファーストコンタクト（後書き）

「チエレン！そこ代われ！」と思った人は手を挙げてください
（笑）

5話 自由主義

チヨロネコとツタージャの戦いが終わった。勝者はノエルのツタージャ。チヨロネコに勝ったツタージャはニコニコ笑いながらノエルに飛びついた。

「ツタタ〜！タージャタージャ」

「うふふ すごいわ。ツタージャ！えらいえらい！」

嬉しそうにノエルに戦果を報告するツタージャ。Nは目を丸くした。

「そんなことを言うポケモンがいるのか……！？」

「？」

「……？」

ノエルとチエレンは目を細めた。あいかわらずNがなにを言っているのかわからない。Nは嫌々チヨロネコをボールに戻した。

「ボールに閉じ込めているかぎり……ポケモンは完全な存在にならない。ボクはポケモンというトモダチのため世界を変えねばならない」

謎の言葉を残し去っていくN。ノエルとツタージャとチエレンは彼を見送った。

> i 1 5 6 2 7 — 6 9 9 <

Nが完全に見えなくなるとノエルは腕を組んで悪態をついた。

「なによあいつ！好き放題言って！」

チエレンも顔をしかめた。

「……おかしな奴。だけど気にしなくていいよ。トレーナーとポケモンはお互い助け合っている！」

「そうよ！だいたいあたしポケモンをボールに閉じ込めてなんかないわ！さっき捕まえたヨーテリーとミネズミだってちゃんと逃がしたし！」

「そうそう。ポケモンも魚釣りと同じ！キャッチ&リリースで……
……ってええっ！？」

チエレンは大きく口を開けた。1番道路で誰がポケモンを捕まえられるか競争したノエルとベルとチエレン。勝ったのはポケモンを3匹持っていたノエル。そのとき捕まえた子犬ポケモンと見張りポケモンをノエルは逃がしたというのだ。

「はあっ！？なんでそんなことを？？別に逃がさなくってもいいじゃないか！」

「そうもいかないわ。ヨーテリーとミネズミと約束したもの。『競争が終わったら逃がす』って。データさえ手に入ればいいでしょ？」
「はあ？そ、そりやそうだけど……」

ツタージャはうんうん頷いた。完全にノエルの味方だ。

「ま、あたし本当に仲間になりたいポケモンしか捕まえないことにしてるけど」

「結局図鑑のデータが埋まらないじゃないか！」

チェレンは興奮して声を上げた。さつきから身振り手振りの動作が激しい。

「君がそこまでしてポケモンを捕まえない理由はなんだ?!」

ノエルが目がキリツとなった。

「ポケモンの自由を邪魔したくないの」

「……なに?」

チェレンは眉をひそめた。

「あたしは自由が好き。せつかく学校から解放されたんだもん。自由を楽しみたい。きつとポケモンも同じ。あたしはポケモンの自由を奪いたくないの。だからあたしは自分からついていきたいっていうポケモンしか仲間にしないうもり」

チェレンは啞然^{あぜん}とした。かつて彼はありとあらゆるポケモントレーナーの雑誌を読んだ。だがノエルのようにそこまでポケモンの自由にこだわるトレーナーは初めてだった。

「……呆れた。好きにすれば?僕は先に行く。次の町……サンヨウシティのジムリーダーと戦いたいんだ」
「いつてらっしゃい」

ツタージャは手を振らないノエルの代わりに手を振った。バイバイ、と。

「君もどんどん戦いなよ。トレーナーが強くなるには各地にいるジ

ムリーダーと勝負するのが一番だからね」

チェレンは歩き出した。だが6歩進んだところで足を止めた。

「あ、そうそう。さっきの彼氏発言のことだけど………またやばい奴に絡まれたらさっきのように僕の名前を言えればいい。メンドーなことはごめんだけど君に被害が及ぶよりマシだからね」

それを聞いてノエルは口笛を吹いた。

「ヒュ〜 優し〜い？」

今度こそチェレンはいなくなった。ノエルはツタージャと1人と1匹きりになった。ノエルは少し考えた。自由を満喫するために旅に出たが何をすればいいかわからない。やることがないのでノエルはとりあえずチェレンの言う通りジムリーダーに挑むことにした。

7話 ホットな男（前書き）

まず最初に謝っておきます。3つ子ファンの方ごめんなさい。特にポッドファンの方は……。3つ子のイメージが崩れる可能性があるのでイメージを損ないたくない方は読まないでください。

7話 ホットな男

「うおおおおおっ！愛してるううううううううううう！
」

サンヨウジムに雄叫びおたけが響く。ジムリーダーの1人、ポッドは戦いもまだ始まっていないのに熱くなっていた。ツタージャも相手が気に入らないのかカツカツしている。試合コートの外側にいる他の2人のジムリーダーはニコニコ見守っている。ノエルは対戦相手を見てため息をついた。

「どうしてこんなことになったんだろ……」

> i 2 4 3 6 9 — 6 9 9 <

おいしい匂いに誘さそわれてたどり着いたのは高そうなレストラン。
ノエルとツタージャはなぜかウェーターとウェイトレスに戦いを挑まれ、勝ったあと奥の間でアフターヌーンティーセットを振る舞われた。デザートを食べ終わるころにカーテンから現れたのはノエルと同じ年頃の3人の美少年。髪の色が見事に赤、青、緑と三原色に分かれている。3人ともウェーターの格好をしていた。赤い髪の少年はノエルを見ると顔色を変えた。

「ようこそ！サンヨウジムへ！僕たちはサンヨウジムのジムリーダーを務める三つ子です。僕は水タイプを使いこなすコーンです」

最初に名乗ったのは青い髪の少年だった。丸みを帯おびた髪型で片

目が髪で隠れている。彼はエレガントに自信満々で話しかけてきた。

「ボクはですね、草タイプのポケモンが好きなデントと申します」

次に名乗り出たのは控えめな少年だった。おでこが見える黄緑色の髪型で大人しそうな顔をしている。

（ヒュ〜）

3人の美少年を前にノエルは心の中で口笛を吹いた。

（どれもいい男じゃない アイドルになれるくらいかっこいい！
食べちゃいたい？どれにしようかな……ん？）

「……………！」

赤く逆立った髪の少年は黙ったままだった。口をポカンと開けたままノエルを食い入るように見ている。コーンも違和感に気づき、黙っている兄弟に話しかけた。

「?どうしたのですポッド? お客様に名乗らないと失礼ですよ」

「……………れた」

「はい?」

ポッドと呼ばれた少年は口をパクパクしていたがようやくしゃべった。

「うおおおおおおおおおおお!! 惚れたーっ!」
「ええーっ!」

デントは叫んだ。さけ コーンはまばたきをした。

[illegible]

「は？」

ノエルは眉をひそめた。

「……はあ？なに？あんたナンパしてんの？なんで上から目線なわけ？それにあたしの名前はノ・エ・ル！ノエル・ピースメーカーよ。失礼な奴ね」

「うおおおおおおお！強気なところも好みだあああああああ
あああ！」

ノエルの中傷ちゅうしょうをもつともしないポッド。蚊帳かやの外にいるコーンとデントはのんきにおしゃべりをした。

「これってポッドの初恋だよね？一目惚れひとめぼしたみたい」

「そうですね。つまり目の前にいる女性は僕たちの未来の義理ぎりの妹……ということになりますね」

「いや、ならないから！」

「タージャ！」

ノエルとツイッターはツッコミを入れた。ツイッターにいたっては頬をふくらませている。

（げつ。 かつこいいと思っ たけど前言撤回。ぜんげんてつかい やっぱ3人ともないわ。
特に赤毛の男）

赤毛の男は兄弟の声もノエルとツタージャの声も聞こえずそのまま叫び続けた。

「……その顔！……髪型！……服！胸！脚！うなじ！全部好みだあああああああ！特にiiiiiiiiiiiiiiiiそのケツがあああああ素晴らしいiiiiiiiiiiii！」

「ええーっ！？」

ノエルは思わず両手でお尻を押さえた。ツタージャはノエルを守ろうと盾になつた。

「ナイスおケツーーーーー！！！」

コーンはポッドの発言にうんうんと頷いた。

「たしかにいいお尻だね」

デントは少し唸った。

「でも胸はタッチを加えないと……」
「うっさい！この草食系男子！貧乳で悪かったわね！あとそのスイーツ男子もお黙り！」

ノエルはコーンをビシッと指差した。スイーツ男子はコーンを指していたようだ。

「……スイーツ男子？」

「モンブランみたいな頭してスイーツじゃない！」

「タージャ！」

ントは苦笑していた。

「うおおおのおおお！貧乳萌えええええええええええ！」
だま
「お黙りこのトウガラシ男！」

ひんにゅうも

ポッドは黙れと言われて黙るような男ではない。愛で暴走した男は止まらない。

「大丈夫だあああああ！オレが大きくしてやるからああああ！」

ノエルの顔が赤くなる。彼女にとってこんな屈辱は初めてだった。カノコタウンで数々の男子を虜いとにして好き放題やっていたのにサンヨウシテイに来てから自分の思い通りにならない男と出会ってしまった。それも2人目だ。おまけにポッドという熱血漢なつげつかんは自分のことが好きなのに上手く操れない。小悪魔こあくまの彼女にとってそれは屈辱的だ。

「うおおおおお！10年に1度の尻——！お・ま・え・の・プ・リ・ケ・ツ・萌・エ・ル・ワ——！」

$$\begin{array}{r} > i \\ 2 \\ 4 \\ 3 \\ 7 \\ 0 \\ \hline 6 \\ 9 \\ 9 \\ < \end{array}$$

「いやあああああああああああああ！」

ノエルは恥ずかしさと恐怖で泣きそうだった。バツジなんてどうでもいいからジムを出よう……………そう考え始めた矢先にかがポ

ツドに向かって飛んだ。

「タジャツ！」

ペシッ。

ポッドの顔面^{がんめん}にツタージャのしつばがたたきつけられた。自分の
ご主人さまが辱^{はずか}しめられたことに我慢^{がまん}ならなかったのだ。

「ツ、ツタージャ……」

ツタージャはすぐさまポッドから離^{はな}れるとしつばを手で払った。
まるで汚いものに触^さわってしまったかのように。

「ツタタ〜」

ツタージャはピトツとノエルの脚にくつつく。

3つ子はおっけにとられていたがポッドはすぐ復活した。

「……そうだったな。ノエルはポケモンバトルをしにきたんだった
な……」

顔を押さえながらポッドは少し冷静^{れいせい}になった。

「イヤッホー！兄弟で1番強いオレ様と遊ぼうぜ！！そのかわり勝
つたら………勝つたらケータイの電話番号を教えてくれええええ
ええええええええ！！」

少しはクールダウンしたが根っから熱血なのかまた熱くなっ
てしまった。

「ケータイなんて持ってないし！」

「じゃあライブキャスターの番号を教えてください！」

「うっ……」

ライブキャスターは腕時計型の通信機だ。時間も教えてくれるしテレビ電話もできる。近くにいるトレーナーと簡単なコンタクトを取ることもできる。ノエルはアラギ博士からポケモン図鑑とセツトでもらったのだ。

「い……いいわよ！そのかわりあたしが勝ったら食事代タダにしてよね！」

「それくらいお安い御用だああああああああつ！」

ポッドはボールを投げた。現れたのは火を噴くサルだった。顔の上半分と体の下半分はポッドと同じ髪の色だ。頭にはふさがあり、耳からはオレンジ色の毛が生えている。挑発的なニヒルな笑みに腹が立つ。

「タージャ……！」

「バオ〜ップ……」

ノエルの顔に汗が浮かぶ。タージャは歯を剥き出しにして怒っている。

（この勝負……負けられない……！）

昼食を食べにきたつもりが、ノエルのほづが食べられそうになっ
ていた。

7話 ホットな男（後書き）

なぜポッドはこんなキャラになってしまったのでしょうか……？うす
うす感じていましたが私にはエロい絵は描けません（笑）。

8話 誤解（前書き）

今回もポッドくん暴走します。この小説は15禁にするべきでしょうか？

8話 誤解

「くっ……！」

「タジャ……！」

ツタージャは辛そうに息をあげている。ノエルのポケモン図鑑は鳴りっぱなしだ。ツタージャのHPが3分の1をきったため緊急信号を発しているからだ。

「イヤッホー……！番号ゲットまで目前だあああああああ
……！」

勝利に近いポッドは喜んでいる。バオップのHPはまだ半分以上も残っている。バオップの『焼き尽くす』によりツタージャは木の実を焼かれ大ダメージを受けてしまった。おいしい水も傷薬も使い切ってしまったので回復する手立てもない。特性『新緑^{しんりょく}』により草タイプの攻撃力は上がっているがもともバオップには草タイプの技はあまり効かない。

「バオ……」

バオップはニヤニヤ笑っている。距離を取り『蔓^{つる}の鞭^{むち}』で攻撃を仕掛けたが大したダメージは与えられなかった。バオップの攻撃を避^よけるのに精一杯であり反撃できなかった。直撃は避^さけていたもののツタージャの体力に限界が迫りつつある。ノエルは深呼吸をした。

（こうなったらイチかバチか……！）

「『蔓^{つる}の鞭^{むち}』！」

ツタージャの体がほのかに光る。

「オレのポケモンにそんなの効くかよ！」

ところがツタージャが繰り出したのは蔓^{つる}ではなく葉^はだった。しつぽの鱗^{うろこ}が何枚か剥がれ葉へと変化した。何枚もの葉は回転を加えられバオツプに襲いかかる。

「なにいつ!?!」

「えっ!?!」

ノエルも3つ子もバオツプも驚く。最初にこの技の正体を見抜いたのはデントだった。

「この技は……『グラスミキサー』だ！」
「ええっ!?!」

1人驚いたままのコーンを無視しポッドはバオツプに指示を出す。

「こんなの焼き尽くすまでもないぜ！」
「バオツ！」

バオツプは『乱^{みだ}れ引^ひつ掻^かき』で葉を撃ち落とした。視界が開けたときツタージャはいなくなっていた。

「なにiiiiiiii!?!どこだ——?!」
「教えない！」

ヒュルルルルル。

岩陰から蔓が伸びる。『蔓の鞭』で拘束されたバオップにツタージャは思いつき『体当たり』をした。

> i 2 4 7 8 5 — 6 9 9 <

「タジャーー!!」

「バオツ……!？」

不意打ちを受けたバオップは地面に転がった。立ち上がろうとしたが3秒後には力尽きた。奇跡的に『体当たり』が急所に当たったのだ。ツタージャはフラフラしながらもノエルにウインクした。

「タージャ」

その場にいたトレーナーたちは啞然としていた。コーンはあわてて判定をした。

「……バオップ、戦闘不能。よって勝者はツタージャとノエル・ピースメーカーとします!」

「なあにいいいいいいいい!!」

「ツタージャ!」

ノエルは倒れそうになるツタージャを受け止めた。

「ツタ……タ……」

「ツタージャ、ありがとう……!」

ノエルはツタージャをぎゅっと抱きしめる。ジム戦に勝ったこと

よりも、ポッドに番号を教えずにすんだことよりも、ツタージャが自分のためにがんばってくれたことが嬉しかったのだ。

「いや〜ごめんね。こんなことになって」

デントは空の^{から}コップに水をそそぐ。奥の間にはデントとノエルとツタージャしかない。バトルで負けノエルの番号をもらいそこねたポッドは落ち込んでしまったのだ。最後のセリフは「燃え尽きた！」だった。コーンは別室でポッドをなくさめるため付き添っている。デントはノエルと接しているうちに打ち解けたのかいつのまにかタメ口になっ^{ぐち}ていた。

「別にいいけど……」

ノエルとツタージャはサービスでもらったショートケーキを^{ほおば}頼張る。1人と1匹は早めのデザートにありついていた。ツタージャはデントが持ってきたおいしい水で回復済みだ。

「いつもはそんなに興奮してないんだけど……。初めて恋したからどう接すればいいかわからなかったみたい」

「へえ〜」

ノエルは興味なさそうにイチゴを食べた。

「タジャ！」

ツタージャはそっぽをむいた。どんな理由であれノエルに迫ったポッドが許せないのだろう。デントは頭を下げた。

「プリケツのプリってプリティのプリかな？」

「いえ、ぷりぷりのプリでしょう」

「セクハラで訴えるわよ！！」

ノエルは顔を赤くして怒鳴るが効果はない。ツタージャは『蔓の鞭』で2人を攻撃するがあっさり避けられてしまった。

（あゝんもういや！恥ずかしい！）

サンヨウジムの階段を下りながらノエルはうつむいていた。せめて知り合いがいないのが救いだった。だがそんな考えは5秒と経たないうちに消えてしまう。

（げっ……！）

通りすがりの中に見覚えのある人物を見つけてしまった。灰緑色の長髪に白黒キャップ。ゲーチスという男の演説のあとにバトルをふっかけてきた青年だ。

（ジム戦前に戦った電波じゃん！名前は………Sだっけ？それともM？………Lだったけなあ………）

「……………」

キャップでよく見えないが青年はおそらく無表情でノエルを見ている。ノエルは気味が悪いと思ったが熱血漢と電波を天秤にかけた。

（うるさい奴より静かな奴のほうがマシ！）

8話 誤解（後書き）

挿絵では間違つて『宿り木の種』を描いてしまいました。『蔓の鞭』
ということにしてください。そしてノエルのバッグを見事に描き忘
れましたね。><

9話 スリル（前書き）

今日プロットを立てていたら第6話（2番道路での出来事）を描き忘れたことに気がつきました。来月更新します><

9話 スリル

ここはサンヨウシティ。サンヨウとは3つ並ぶ星のこと。トレナーズスクール・サンヨウシティジム・マコモの研究所の3つの施設があるちよつとした都会だ。そんな賑わう町を駆ける2人のカッブルがいた。そしてそれを追いかける少年も。

「待てーーーーー!!」

少年の叫びに通りすがりの人たちは足を止める。叫んだのは3つ星レストランのシェフのポッドだった。この町の有名人がなぜレストランを放ってカッブルを追いかけている。無銭飲食だろうか？

「オレの女を返せええええええええ!!」

それを聞いて通りすがりの人たちはホツとした。ただの色恋沙汰か、と。人々は安心すると同時に興味がわく。ジムリーダーでもあり一流ソムリエである彼が恋した相手とは？

「おゝ。ついにあのポッドも恋をしたのか」

サンヨウジムの得意先の青果店のおじさんはぼつりとつぶやいた。

「んまあ！青春ね。わたしたちの出会いを思い出すわ」

青果店の奥さんも感心していた。この流れだと夫婦の会話はのろけ話になりそうだ。

「イヤーーーー！ポッドさまーーーー!!」

「デントさまはまだ空^あいてるわよね？」

「コーンさまのほうが好みだけどシヨック！」

3つ子のファンたちは心中^{しんちゆう}おだやかではない。ポッドの恋は町の人にとって驚^{おどろ}きか戸惑^{とまど}いのどちらかだった。

「ノエルー！好きだああああああつー！」

ノエルと青年はさつきから走っては隠れている。ツタージャはポイルにしまった。ジム戦後に休んだとはいえ彼女はツタージャを再び疲れさせたくなかったのだ。走って、隠れて、休んで、また走るその繰り返しだ。あるときは建物の後ろに。あるときは人が座るベンチの下に。あるときは像の後ろに。あるときは茂^{しげ}みの中に。あるときは花壇^{かたん}の影に。いずれもせまい場所で密着することになる。初めての経験にノエルはドギマギしっぱなしだ。

「ノエルー！どこだあああああああつー！」

土地の利^りはポッドのほうがあ。見慣れぬ街での追いかけては不利だ。ノエルはずっとNに引っぱられていた。彼女が本気を出せばポッドを振り切ることは可能だがNを置いていくわけにはいかない。それに道がわからない。Nに引っぱられるまま走っているがそもそも道をわかつているのだろうか？後先^{あとさき}考えずに走り回ってすでに迷子になっているかもしれない。知らない町を1人でさまようのは彼女も避^さけたいところだった。

「こつちだ」

Nに引き寄せられノエルは建物と建物の隙間すきまに入り込んだ。Nはノエルを固く抱きしめ鬼おにを警戒した。青年の胸板に顔を押し付けられノエルは真っ赤になる。

（ちよっ……！あつたかい……じゃなくて！なんでこんなことになつてんの?!）

ポッドに追いかけているせいか。それともNに抱きしめられているせいか。あるいは両方か。ノエルは呼吸ができないくらい心臓がドキドキしていた。

> i 2 5 6 0 8 — 6 9 9 <

2人は見つからないように息を殺している。鬼は足を止めてキョロキョロした。

「くっそ……また見失った……。オレは諦めあきらないからな————
————」

そう言っポッドは走り去っていった……。……はずだが悲劇が彼を襲おそおうとしていた。

「なんだ!?このチヨロネコは?!」

「ニャ〜」

どこからともなく紫色むらなむらなの猫が現れポッドの行く手を阻んだ。性悪しやうあくポケモンのチヨロネコだ。チヨロネコは愛くるしい目でポッドを見つめている。

「あー……わりい。今食べものはなにも持ってないんだ。レストラ

ンに戻ればうまいもん食わせてやれるんだけど……」
「ニヤ〜？」

チヨロネコは首をかしげて目をパチパチした。エメラルドの目とアイシャドーのようなピンクの模様でかわいさ倍増だ。ポッドは頭をかいだ。せめてなでであげようとチヨロネコに手を伸ばすがギョツとした。いつのまにかチヨロネコが3匹いる。最初は1匹だったがその数はどんどん増えていく。

「ニヤ〜」

「ニヤ〜」

「ニヤ〜」

路地裏ろじりから、脇道わきみちから、屋根やねから、花壇かたんの隙間すきまから。チヨロネコの数は膨れふくやがて30匹になった。猫好きにはたまらない光景かもしれないが同じ色の猫がこんなにいたら不気味だ。ポッドは狼狽ろうはいしつつコミュニケーションを図ろうとした。

「え？なんでおまえらこんなにいんの？いくらなんでもこの数じゃレストランの食糧が……ってうおおおおおおおおおおっ?!」

ポッドが言い終えるまえにチヨロネコたちが一斉に飛びかかった。ほどなくして燃え盛るような赤毛は見えなくなり人型の紫色のかたまりができあがる。

（なに？なにが起きてるの？）

ノエルは隙間すきまから顔を出そうとするがNに頭を押さえつけられる。彼は彼女の耳に早口でささやいた。

「まだだ。もうちょっと待って」
「……？」

紫色のかたまりがもぞもぞ動く。ポッドは紫色になった元凶を何匹かつかんで投げた。まだチヨロネコが数匹くつついたままポッドは走り出した。

「オレがなにをしたっていうんだあああああああああ
あっ！！」

「ニヤ」

「ニヤ」

「「「「ニヤ」」」」

チヨロネコたちをくつつけたまま別のチヨロネコたちに追いかける少年。意味不明の光景に事情を知らない人たちはクスクス笑っていた。

「……行つたみたいだ」

Nは腕を離れた。ノエルはようやくNから解放された。せまい隙間から出て通りで息を吸う。今までずっと熱かったせいか空気が涼しく感じる。

「さっきのチヨロネコってあんたの……？」

今朝カラクサタウンでNとバトルをしたときチヨロネコが相手だった。あの大勢のチヨロネコのうち1匹はNのだろうか。

「……うん。チヨロネコはトモダチだから……。仲間を連れて助けにきてくれた」

Nは早口だから気をつけないと聞き逃してしまう。うるさい心臓を無視して神経を耳に集中したのでなんとか聞き取れた。ポッドから逃げ切れたのに心臓が静まらない。ドキドキする理由がわからずノエルはイライラしていた。

「べ、別に助けってくれなんて頼んでないんだからね！」
「……………」

Nはわずかに口を開ける。ノエルはずっと彼を見ていたい気持ちに駆られたが顔をそむけた。

「お礼なんて言わないわよ！」
「別にボクが勝手に助けただけだから言わなくてもいいけど……………」
「……………」

ノエルは下を向いた。ドキドキはまだ止まらない。自分1人だけあせっていると思うとNが憎たらしく感じる。

「どさくさにまぎれて手を握ったり上に覆い被さったり抱きしめたり……馴れ馴れしいのよ！あんた、自分がイケメンだからなにされても許されると思ってるんでしょ?!」
「イケメン……………」

そう。ノエルは気づいてしまったのだ。今までは帽子を深く被っていたのでわからなかったが、その帽子の下の顔が思いのほか整っていることを。サンヨウジムの3つ子よりイケメンだ。ノエルは認めたくないがNはかっこいいのだ。

（どうせナルシストなんでしょ。じゃなきゃあんなふうには遠慮なく抱きしめるわけないって！）

ところがNの反応はノエルの予想を裏切った。

「……イケメンってなに？」

「はあ??」

小悪魔は電波の質問に面食らった。今時の若者が「イケメン」という言葉を知らないなんて普通ありえない。ノエルはNがふざけていると思ったが嘘をついているようには見えなかった。……たぶんNはあまり感情を出さない。人の表情を読むのが得意なノエルでもわからない。ノエルはなぜこんなことしなければならぬかと思いつつ説明した。

「イ、イケメンっていうのは「イケてるメンズ」の略よ！つまり……かっこいいってこと！」

「……そう。ボクのことがかっこいいと思ってくれたんだ……。ありがとう」

「ど……どいたしまして？」

さつきからずっとNのペースだ。しかも彼は自分がノエルのペースを乱していることにすら気づいていない。ノエルは髪をクシャクシャにしたい気分だった。

「あゝんもう！あんだといるとわけわかんない！行きましょツタージャ！」

Nに背を向けてノエルはぽーんとボールを投げる。ツタージャは

今までなにが起こっていたかわからず首をかしげた。

「……タジャ？」

「どこでもいいからあいつがいない場所に行くわよ」

「タージャ」

ツタージャは敬礼^{けいれい}をしてノエルについていった。Nは立ったままだ。ノエルを追う気配はない。安心したようなムカつくような気持ちにノエルは悩んだ。10歩くらい進んだところでノエルは立ち止まった。

「……………ありがとう」

「タジャッ!？」

小さくお礼を言うとノエルは全速力で走った。ツタージャは両手をバタバタさせながらついていった。

「……………?」

Nはしばらく同じ場所にぽつんと立っていた。

9話 スリル（後書き）

……しまった！？長くなってる！手加減、手加減……><

10話 親切（前書き）

しばらく第1章の話を割り込み更新するので検索の新着に表示されません。直接小説ページに行くか活動報告を見て更新されてるか確認してください。すみません；

10話 親切

（はぁ……はぁ……はぁ……）

少女はがむしゃらに走っていた。まるで胸に爆弾を抱えているかのように。どこに向かっていているのかもわからず、直感だけで動いていた。ツタージャは黙ってついてきている。ノエルは走りながら考えた。

（どうして……どうしてこんなにドキドキするの？）

ノエル・ピースメーカーは緊張したことがない。野生のポケモンに襲われても、学校でテストがあるときも、スポーツの試合があるときも緊張しない恐いもの知らずだ。ワクワクすることはあってもドキドキすることはない。彼女が怪力に目覚めるきっかけとなった事件のときも一切恐怖を感じなかった。常に平常心を保っているが故に彼女はいつも退屈していた。数多くの男子とデートしたことはあるが恋したことは一度もない。そんな彼女が突然ドキドキすることになったらどうなるか？

（あたし………病気なのかも……！）

運動したら心拍数が上がるのは当然だ。だが今の彼女の心拍数は尋常じゃない。そこで彼女は自分の感じる異常なドキドキは病気と結論付けた。どこかに病院はないかと辺りを見回したらある人物が目に入った。髪の毛を膝まで伸ばした白衣の女性だ。医者だろうか？

「すみませ〜ん！お医者さんですか〜？」

「えっ？」

白衣の女性は振り返った。長い髪は揺れ顔が見えた。メガネをかけて花のヘアピンをつけている。

> i 2 7 5 5 0 — 6 9 9 <

「あの……あたし……さっきから胸がドキドキして……！」
「あら？あなたもしかしてノエルちゃん？」

ノエルの言葉はさえぎられた。なぜ初対面の女性が彼女の名前を知っているのだろうか？ノエルがなにか言う前に白衣の女性はノエルの両手を握った。

「アナタ、アララギ博士の娘でしょう？はじめまして！アタシはマコモ。残念ながら医者じゃなくて研究家よ」
「へ、へえ」

両手は解放された。ノエルは自分の考えを恥じた。あせるあまりマコモを医者と間違えてしまったからだ。

「ちなみに研究しているのはトレーナーについてなの！で、アララギ博士とは大学時代からの友達でね、アナタたちの手助けを頼まれたんだ」

「そ、そうですか……」

ノエルは苦笑した。マコモが助けてくれるとはアララギ博士から聞いてない。多忙な養母のことだから言い忘れたのだろう。

「写真を見たから一目であなただとわかったわ！……アララギ博士

言ってたわよ。『わたしには自慢の娘がいる』って！」

「ホ、ホントですか!？」

「ええ!『若いころの自分に似てモテる』って笑ってたわ」

マコモの言葉を聞いてノエルは嬉しくなった。血が繋がってないとはいえノエルとアララギ博士は親子だ。アララギ博士は昔まだなんの取り得もないノエルを引き取り育ててくれた。仕事で忙しくほとんどこまってももらえなかったが博士には養ってもらった恩がある。スポーツとオシャレにしか能がない自分を誇りに思っていると知り、ノエルは安心した。

「ということで!アタシからのバックアップよ」

マコモはポケットからケース入りのディスクを取り出しノエルに渡した。

「これは秘伝マシン01『居合い切り』ね。邪魔な木があったらとりあえずこれで切ってちょうだい。……で、手助けじゃなくてお願いしてもいいかな?」

「あ……はい!もちろんです!」

世の中はギブ&テイク。ノエルが昔アララギ博士に教わったことだ。男性が女性に貢ぐのは当たり前だけど女性同士だと等価交換が必要だと言っていた。友達なら無償になることもあるが大人になるとそうもいかないらしい。マコモはもじもじしながら言った。

「あのね、実はアタシのムンナが散歩に行つて戻ってこないの。たぶん夢の跡地にいると思うんだけど……。何時間か前にベルって子を行かせただけでまだ帰ってこないの。心配だから迎えに行つてくれない?」

「えっ……！ベルが！？」

予想外の名前を聞いてノエルは瞬きした。幼馴染のベルはトラブルに巻き込まれやすい。迷子になったり誘拐されかけたりと1人だと危ない。ベルの旅に反対した父親の気持ちもわかる。ポケモンがいるから大事には至らないはずだが……。

「わかりました！ベルとムンナを迎えに行ってきます」

「ああっ……ありがとう！アタシポケモンはムンナしかいなくて……。ゲームシンクという機械を動かすためにムンナの出す夢の煙がほしいんだ。いろんなトレーナーのレポートを集められるようになるためお願いね！」

あたしは走り出した。胸はいつのまにかドキドキしなくなっていた。

「行くわよ、ツタージャ！」

「タジャ！」

ツタージャはガッツポーズをした。後ろからマコモの声が聞こえてきた。

「夢の跡地はサンヨウシティの外れにあるからね……！右に曲がったあと左に出ると町の外れが見えるはずだから……！」

11話 過剰防衛

「やめたげてよお！」

「ミジュ〜〜！」

ベルとムンナを迎えに夢の跡地へ行つたノエル。ベルの叫び声を聞きノエルは工場の中を目指した。邪魔な木はツタージャが『居合切り』をし、壊れた壁を潜り抜けるとそこには3人のトレーナーと2匹のポケモンがいた。ベルとミジュマルは水色の装束の者たちと対峙していた。でも水色の装束の者たちはベルを無視しピンク色の丸いポケモンを蹴っていた。

「ほらほら！夢の煙を出せ！」

「……ムウ！」

「早くしなよ！」

ノエルは水色の装束の者たちに見覚えがあつた。中世の騎士のような格好をした者たちはプラズマ団と言うはずだ。ゲーチスという男を囲むように立っていたから印象的だった。サンヨウシティでチエレンと見かけたから間違いない。

「ちょっと！あんたたちなにしてるの！？」

「タジャ！」

「ノエル！！」

ノエルはプラズマ団とベルの間に割って入った。ベルはノエルを見て安堵の表情を浮かべた。ノエルの後ろに隠れるように立ちことの成行きを見守っている。ミジュマルはツタージャになにが起こったのか説明していた。プラズマ団の男はムンナを蹴るのをやめノエ

ルを見た。

「わたしたちのことか？わたしたちプラズマ団は愚かな人々からポケモンを解放するため日夜戦っているのだ」

すると今度は女のプラズマ団が手を前に出した。

「なにをしているのか？ムンナやムシャーナというポケモン。夢の煙という不思議なガスを出して色んな夢を見せるそうじゃない。それを使い人々がポケモンを手放したくなる……そんな夢を見せて人の心を操るのよ」

「わかつたら邪魔をするな！」

そう言うつと男は再びムンナを蹴り始めた。蹴られているムンナもそれを見ているベルも泣きそうだった。カチンときたノエルはツター ज्याに目配せをした。

「ター ज्या」

ツター ज्याは『蔓の鞭』でムンナをひよいと取った。ムンナをプラズマ団の足元から引き離しベルの胸元にそっとおいた。ベルはムンナを抱きしめた。

「ムンナ！大丈夫う？」

「ミジュ。ミジュ！」

ベルはムンナを回復させるためしゃがんだ。ミジュマルはベルのバッグから傷薬を取り出しベルに渡した。

「貴様！なにをする！」

男が吠えた。ノエルは齒を剥き出しにしているプラズマ団を冷ややかに見た。

「決まってるじゃない。あんたたちにケンカ売ってるのよ」
「なんですって!」

女が挑発に乗った。ノエルはベルがムンナを回復し終わったのを確認すると微笑を浮かべた。

「タッグバトルやらない? あんたたちが勝ったらあたしたちは去る。あたしたちが勝ったらあんたたちが去る。超シンプルでしょ?」
「えっ」

ベルは口を大きく開けたがすぐ閉じた。ノエルを信頼している証だ。ノエルと一緒に負けなれないと思ったのだろう。プラズマ団の男はふんと笑った。

「……面白い。その勝負、受けて立とう!」
「ポケモンを自由にするためワタシたちは負けな! ワタシたちが勝ったらオマエたちのポケモンも解放しろ!」

女のほうは興奮気味だった。ノエルはあくびをしながら返事をした。

「別にいいけど? あたしたちが負けるわけないし。あたしたちが勝ったらムンナに二度と手を出さないでよね」
「無論だ!」

ベルは右腕を上げた。

「ノエルと一緒になら負けないもん！それじゃあー位置について！」

プラズマ団はボールを開けた。男はミネズミを、女はチヨロネコを出した。ツタージャとミジユマルは構えた。ベルは4匹のポケモンが位置につくと腕を勢いよく振り下ろした。

「よいい……どん！」

ベルの運動会のような掛け声でバトルは火蓋を切った。

「やめたげてよお！」

先刻と同じ叫び声が再び夢の跡地に響きわたる。バトルはノエル&ベルチームの圧勝だった。ツタージャとミジユマルの見事なチームワークでミネズミとチヨロネコを倒した。だがプラズマ団はそれでも懲りずにムンナに襲いかかってきたのでノエルに制裁を受けたのだ。今までプラズマ団がムンナにやったこと　すなわち殴る蹴るを　そのままそっくりノエルによって返されてしまった。……それも10倍の威力で。

> i 3 0 1 7 1 — 6 9 9 <

「す、すいませんでした……もう2度とポケモンを殴ったりしませ
ん……」

「あ……悪夢……」

プラズマ団は×の字で重なって横たわっていた。ノエルはプラズ

又団の上に乗る不機嫌そうに立っていた。

「もういいよ！もういいってあー！離してあげようよお……」

「ポケモンを殴る奴は……ベルを泣かせる奴は許さない……」

「今は君が泣かせてるじゃないか！」

男のツツコミでノエルは我に返った。それもそうね、と頷くとプ
ラズマ団から降りた。

「おら。さっさと行きなさい」

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひい！」

プラズマ団の男女は逃げていった。途中でキャツと悲鳴が聞こえたが夢の跡地は何事もなかったように静かになった。

「わっ！」

「なにっ!？」

ノエルはベルの声に反応した。草むらから野生のムンナが顔を出していた。草むらから、木の中から、空の上からムンナが次々と現れノエルたちをじーっと見ていた。ツタージャとミジユマルはどうすればいいかわからずおろおろしていた。

「ちよっちよっちよっちよっちよつと待つて！あたしたちなんも悪いことしてないから！」

大量のムンナにさすがにノエルも圧倒されたのか手足をバタつかせた。ムンナは見ているだけでなにもしてこない。やがてムンナたちは前方から道を開けた。そこから浮いて進んだのはムンナより一回り大きいポケモンだった。顔はピンクでそれ以外は薄紫色の体毛

で包まれている。額から濃いピンクの煙を出している。図鑑を向けたらムシャーナと表示された。

「ムニャア！」

「え？なにになに？」

「タージャ！」

ツタージャはなにかを受け取るように両手を前に出した。『蔓の鞭』でノエルをちょんちょんと催促する。

「なに？手を出せばいいの？」

言われる通りノエルは両手を出した。ムシャーナはノエルの手元で勢いよく煙を出した。それにノエルとベルは咳き込むが目を開けたら綿あめみたいなものがノエルの手の上で浮いていた。

「ムニャーア！」

最後に鳴くとムシャーナはムンナたちと去っていった。

「あ！待って！誰かベルのポケモンになって！」

ムンナたちを追いかけようとするベルをノエルは止めた。

「ストゥップ！ベル。ムンナを仲間にするのはいいけどポケモンを捕まえるときに注意することは？」

ベルはまばたきした。だがすぐノエルの質問の意図を理解すると元氣よく答えた。

「そのポケモンの意思を尊重すること！家族や友達と引き離すとかわいそうだもんね！」

ノエルはにこりと笑った。

「よろしい！なるべく仲間になりたそうなポケモンを仲間にするのよ。無理やり捕まえるのはNG！」

「はーい！」

ベルは内股で走っていた。ミジュマルはノエルに敬礼してからベルを追った。ベルとノエルが救出したムンナだけ残っていたがおそらくマコモ博士のポケモンなのだろう。ノエルはふうとため息をつく。ムンナとツタージャに話しかけた。

「それじゃああたしたちはマコモ博士の家に行きますか！」

「ム」

「タージャ！」

こうして1人と2匹は仲良く歩いて行った。

2人の英雄 (1) (前書き)

まだ第1章が終わっていませんがいきなりクライマックスに入ります！

ネタバレが嫌な方は読まないでください。

エンディングにかなりアレンジが加えられています。

「戻る」を押すなら今のうちです！漫画＋小説で進行します。

絵が多いのでパソコンで読んでください。

ケータイだともちやくちや読み辛いです><

2人の英雄（1）

> i 1 6 0 8 0 — 6 9 9 <

Nはプラズマ団の王だった。突如ポケモンリーグに現れたNの城。プラズマ団との戦いのなかノエルは真の黒幕がゲーチスだと知る。ゲーチスに操られているNを止めるべくノエルは城の中を駆ける。途中でゲーチスに道をはばかれるもアデクとチェレンが助っ人として参戦。ゲーチスを2人に任せ、ノエルは王の部屋へ向かうが……。

> i 1 5 7 7 5 — 6 9 9 <

「N!!」

ついにNの城の最上階までたどりついたノエル。王の部屋ではNが待ちかまえていた……！

> i 1 5 7 7 6 — 6 9 9 <

「N！聞いて！ゲーチスはあなたをつ……!!」

「ノエル……待っていたよ。キミならボクのもとまでたどりつけると信じていた……」

ノエルの言葉はさえぎられた。Nはこれから始まるであろう舞台に陶醉していた。

「ボクが望むのはポケモンだけの世界……。ポケモンは人から解放され本来の力をとりもどす。自由を愛するキミならわかるだろう？ そのためにはノエル……キミの力を貸してほしい」

「別にキミがいなくてもボクの望みはかなえられる。人間とポケモンが別々に分かれて暮らす世界……。だけどキミがいたほうがもっと確実に、もっと早く新しい世界を作れる。そしてできればノエル……その新しい世界でキミにはボクのとなりにいてほしい」

「N……」

ノエルは胸が熱くなつた。嘘偽りのない言葉。Nはやはり純粹だった。そしてゲーチスはその純粹な思いを利用しようとしている。Nを止められる可能性が少しでもあるとすればそれはノエルしかない。

Nは優しく笑った。恋人をなぐさめる男性のように。

「キミもいずれわかるよ。まだポケモンだけの世界が実現してないから賛成できないだけ」

そう言い終えた直後、Nの顔が少し歪んだ。

「N!？」

「ああ……見える！見えるよ！そう遠くない未来で……人間だけの世界でキミとボクがいる。周りにはボクたちによく似た子どもたちが走り回っている。なんて素敵な世界なんだ！」

「N……?」

予知か妄想か。Nの頭に未来のビジョンが流れた。ノエルは彼の身を案じることしかできない。

「ノエル……ボクと一緒に……行こう?」

>
i
1
5
7
7
8
—
6
9
9
<

2人の英雄 (1) (後書き)

今はここまです。少しづつUPします。

J o y e u x N o ? l B o n A n n i v e r s a i r e !
N o ? l

メリークリスマス 誕生日おめでとう！ノエル

2人の英雄（2）

> i 1 5 7 7 8 — 6 9 9 <

「ノエル……ボクと一緒に……行こう？」

「N……」

最大級のポーズ。ノエルはNの気持ちがうれしかった。だが彼の望みに応えるわけにはいかない。

（行きたいよ……。Nと同じ道を歩きたい。でもNが望んでいる道は私が望んでいる道じゃない……！）

> i 1 6 0 8 1 — 6 9 9 <

ノエルは大切な人たちのことを思い浮かべた。幼いときからずっと一緒にだったチェレン、ベル、アララギ博士。ノエルはN1人のために他の3人を裏切るわけにはいかなかった。

「できないよ……そんなことできないよ！ポケモンと人間は互いに必要な存在よ！何百年も何千年も一緒にいたのよ！？今さら離れ離れになれるわけないわ！」

「そうか……わかった。なら力づくでもキミを連れていく！！さあ……決着をつけよう」

ノエルは身構えた。どんなに抗おうと2人は戦わなければならぬ運命なのだ。互いに一步も譲らないのなら戦って決着をつけるしかない。

「ボクには覚悟がある！トモダチのポケモンたちを傷つけても信念を貫く！……ここまで来たからにはキミにもあるんだろう？あるならボクの元に来てみせてほしい！キミの覚悟を！！」

> i 1 6 1 0 0 — 6 9 9 <

ノエルはジャローダが入っているボールを強く握った。

（ダメよ……今の手持ちじゃNに勝てない。ゼクロム以外のポケモンなら互角に戦えるけどゼクロム相手じゃ歯が立たない……。どうすればいいの……？）

時は彼女を待つてくれない。ノエルが迷っている間にNは戦闘態勢に入っていた。

「おいでゼクロム！」

> i 1 6 1 0 1 — 6 9 9 <

2人の英雄（3）

Nの合図でノエルは大きなプレッシャーの塊が動くのを感じた。
以前リユウセンの塔で感じたのと同じものだ。王座がある場所が
爆発した。壁を壊して現れたのはゼクロムだった。

> i 1 6 1 5 9 — 6 9 9 <

「グルアアアアアアアアアッ！！」

ゼクロムは激しく吠えた。電撃を放ち、周りの壁が崩壊する。

「きゃあっ！！」

ノエルはとつさに頭をカバーした。砂とともに天井の破片があち
こちに落ちた。幸いノエルは砂と埃を被っただけで怪我はなかった。
ゼクロムもNもノエルを傷つけるつもりはなかったのだらう。

> i 1 6 1 6 0 — 6 9 9 <

ノエルは両腕を下げた。空気がビリビリする。ゼクロムはNを守るように仁王立ちをしていた。

「グルルルル……」

ゼクロムが呼吸するだけで威圧感を感じる。黒い巨体は立っているだけで存在感があった。あまりにも強烈すぎてノエルの存在が消失せそうなくらいに。

> i 1 6 1 6 2 — 6 9 9 <

(……力がほしい)

ノエルは生まれて初めて力を懇願した。自由を愛し、自由を求めていた彼女は今まで力など求めたことはなかった。チェレンのように強くなってチャンピオンになりたいと思ったこともない。そのノエルが今力を欲している。アクセサリーショップで見かけたネックレスよりも、学校から逃れる旅よりも、傷薬を買うお金よりも、強く願った。

(力がほしい)

緊張きんちやうによって乾燥かんそうした喉のどを潤うるす水みづよりも、吸血鬼が生きるため血を求めるようにノエルは力を渴望かつぼうした。

(力がほしい……！Nを救いたい……。Nを止めるための……。この世界を守るための力がほしい！！)

> i 1 6 1 6 3 — 6 9 9 <

そのときノエルは揺れを感じた。一瞬地震だと思った。ゼクロムが地震を起こしたのだろうか？……いや、違う。ゼクロムとNも戸惑っている。波動はノエルの腰から出ていた。彼女のバッグの中になにかが動いている。

(バッグの中……ライトストーンがうごめいている！？)

「キミのライトストーンが……！いや、レシラムが！」

> i 1 6 1 6 4 — 6 9 9 <

ノエルはライトストーンをかがげた。ライトストーンが浮かび上がった。妙な渦を描きながら光っている。周囲のオーラを取りこんだライトストーンがそれを強烈な力に変換し、今……解き放つ……！！

> i 1 6 1 6 5 — 6 9 9 <

ライトストーンから光の輪が現れた。まるで土星のようだ。輪はどんどん増え広がっていく。やがてライトストーンは虹色の輝きを放ち、丸くなった生き物 否 ポケモンが現れた。

「ホワアアアアアアアアアッ！！」

白陽^{しろや}ポケモン、レシラムだ。白い竜は体を広げ目を開けた。青空のような綺麗な瞳……偶然にもレシラムの瞳はノエルの瞳と同じ色をしていた。

レシラムの尻尾が赤くなり、体全体から高熱エネルギーが放出される。レシラムはゼクロムとノエルの間を飛んでいた。

> i 1 6 1 6 6 — 6 9 9 <

2人の英雄（4）

そのポケモンは白かった。どのポケモンよりも白かった。銀色の爪。銀色の輪。青い瞳。眼の周りを覆う黒い毛。それ以外は全て真っ白だった。白銀の龍と言ってもいい。青い瞳は果てしなく続く空のようで……………全てを見透かすようだった。

『我が名はレシラム。真実を見届けるもの。汝の声を聞き駆けつけた』

> i 1 6 5 9 1 — 6 9 9 <

『我は問う。汝の名はなんだ？』

「っ！？」

ノエルは周りを見渡した。Nとゼクロムがいない。不思議なことに彼女が着ている服も変わっている。タイルの廊下も石の柱もレンガの壁もなくなっていた。そこにはなにもない。……………レシラムとノエルを除いては。伝説のポケモンと英雄の少女はいつのまにか真っ白な空間にいた。

（これはレシラムの声…………？ポケモンがしゃべっている…………！？）

レシラムと目が合った。瞬きすることも生唾を飲むこともできない。伝説のポケモンの前でそんな恐れ多いことはできるはずがない。

『……………』

よく考えたら相手は伝説のポケモンだ。テレパシーで話しかける
ことができたとしてもおかしくはない。緊張きんちやうしているもののノエル
は凜りんとした態度で名乗った。いつものように誇りほこを持って。

「あたしの名前はノエル。ノエル・ピースメーカー！」

少女の名前を聞くとレシラムは感心したようだった。

『ピースメーカー……………その名を聞くのは久しい。…………ノエル！
再び汝に問おう。汝の求める真実とはなんだ？』

「真実…………？」

ノエルは力を求めた。それに応えるように現れたのがレシラムだ。
だがレシラムは彼女にどんな真実を求めているか訊いてきた。ノエ
ルの顔に困惑の表情が浮かぶ。

（守る力をほしがることと真実を求めることが関係あるの…………？）

レシラムは立ったままだ。その真つすぐな目をノエルに向けてい
る。空色の目の持ち主たちは互いを見つめ合う。…………静寂せいじゃく。2人の
空間は静かだった。無音で空の中を動く雲のように。レシラムは黙
って答えを待っていた。言い伝えではレシラムは真実を追い求める
者に力を貸すと言われている。また、真実を追い求める者でも善の
心を持たない人間だと焼かれてしまうという。

ノエルはどちらかというと善だ。だからといってNが悪というこ
とではない。ただ互いの求めるものが違うため対立しているだけだ。
Nは真実以上に理想を強く求めた。ならノエルは無意識に理想より
真実を求めていたのだろうか？ノエルは今まで考えたことがなかつ

た。彼女が求める真実とは……？

（人間とポケモン……。自由。平等。博愛。）

> i 1 6 5 9 2 — 6 9 9 <

ノエルは今まで会ったトレーナーとポケモンたちのことを思い出した。

（人間もポケモンも……。自由を楽しむ権利があつて、差別されることなく平等に扱われ、博愛の精神を持つているよね？みんな互いの存在をちゃんと尊重してるよね？お互い助け合ってるよね？）

少女は思い出の世界から帰ってきた。レシラムはまだ待っている。はたしてノエルはレシラムが納得できるような答えを言えるのだろうか？

「あたしはNを救いたい……。Nに教えたいの。世界は数式のように答えは一つじゃないって。答えは……。人によって違うこともあるの。世界には色々な考えがあつてそれらの全てが間違っているとは限らないということをわかつてほしいの！」

『答えは一つではない……。？ならば真実は？』

レシラムは無表情のままだった。ノエルの声が自然と大きくなった。

「答えはたくさんあるけどそのたくさんの答えの中心に変わらない真実があるの！人間と人間。ポケモンとポケモン。そして人間とポケモン……。人間とポケモンはわかりあえる！それが真実よ！

私はそれを証明したい！！」

レシラムは凜々しく笑った。

『それが汝の求める真実か……。よかるう。汝とともに闘おう！！』

「！！」

気がつけばそこはもといた場所。決着をつけるため定められた聖地。宿命の相手は目の前。もう1人の英雄はさきほどと変わらぬ様子でゼクロムの横に立っていた。

> i 1 6 5 9 3 — 6 9 9 <

> i 1 6 5 9 4 — 6 9 9 <

「ゼクロムとレシラムはもとはひとつの命……。一匹のポケモンだった。正反対にしてまったく同じ存在。ゼクロムとレシラムも英雄と認めた人物のもとにあらわれるポケモン。……そうか。やはりキミも」

Nは目を閉じた。口元には笑みを浮かべている。相手を倒せる余裕から来る笑みではない。好きな人の新たな面を見つけたときに浮かべる笑みに似ている。

「真実を追い求める英雄にその力を貸すといわれているレシラムがキミの力を認めともに歩むことを決めたか……。ノエル……。やはりキミはボクの理想通りの女性だ！ますますキミを仲間にしたくなかった！」

Nは両腕を上げるとゆっくり目を開けた。

「ボクには未来がみえる！絶対に勝つ！！」

2人の英雄 (4) (後書き)

次の更新は1月31日か2月2日です。試験があるので……。

2人の英雄（5）

Nのゼクロムがノエルたちに向かって飛んできた。それをノエルはレシラムで迎え撃つ。

> i 1 7 6 9 2 — 6 9 9 <

ゼクロムとレシラムは飛び立った。2人の英雄を置いて。2頭は競い合うように一直線に空を飛び、宙で止まった。

> i 1 7 6 9 3 — 6 9 9 <

睨み合う白黒の龍。ゼクロムは弾けるオーラを放っている。対してレシラムは燃え盛るオーラを放っている。2頭はしばらく互いを睨み合っていたがやがて吠えた。戦闘開始の合図だ。ゼクロムが『龍の息吹』を吐けばレシラムも『龍の息吹』を吐く。レシラムが爪で切り裂けばお返しにゼクロムの爪で切り裂かれる。ゼクロムの『思念の頭突き』を喰らったレシラムは『神通力』をお見舞いした……… かと思えば2匹は取っ組み合いかみついたりひつかいたりした。戦闘機の戦いをドッグファイトと呼ぶがそんな生ぬるいものではない。犬や戦闘機どころか伝説の龍の戦いだ。なんびとたりとも2頭の邪魔をすることは許されない。それがたとえそれぞれが味方した英雄でもだ。

> i 1 7 6 9 4 — 6 9 9 <

ノエルとNは2頭がいる空を見上げていた。レシラムの独断に戸惑うノエル。Nはさほど驚かずノエルに説明した。

「彼らは伝説と呼ばれるくらい賢いポケモンだ。ボクたちの指示なしで戦える」

「えっ」

ノエルは視線をレシラムとゼクロムから外した。ノエルとNの目が合う。

「……空中戦は2頭に任せてボクたちは地上の戦いを始めようか」

Nはボールを投げた。Nがどんなポケモンを出すかもわからずノエルは最初のポケモンを選んだ。

時は少しさかのぼる。それはホワイトストーンからレシラムが現れたときだった。プラズマ団の七賢人の1人、ゲーチスは驚嘆きょうたんした様子でレシラムを見ていた。

「ありえません……！ここでレシラムが現れるだなんて……。トウコ・アララギ………まさか！？あの娘、ピースメーカー家の生き残りか？！」

狼狽ろうたいするゲーチスの横でなにかが床に叩きつけられた。ゲーチスのポケモンのデスカーンだ。チェレンのレパルダスがトレーナーと同じ得意げな顔をしていた。アデクも自分のポケモン、アギルダーと同じように腕を組んでいる。

「よそ見とは余裕があるね」

「貴様の好きにはさせんぞ！」

「くっ………！」

>
i
1
7
6
9
9
5
—
6
9
9
<

2人の英雄 (5) (後書き)

次の更新は..... 2月12日にしましょうか？

2人の英雄（6）

「アギルダー！『スピードスター』だ！」

「レパルダス、『不意打ち』！」

> i 1 8 1 0 4 — 6 9 9 <

アデクとチエレンは隙を見逃さなかった。紫色の豹と覆面のファイターは容赦なく棺の霊を攻撃した。ゲーチスがノエルとレシラムに気を取られている間にデスカーンはやられてしまった。

> i 1 7 6 9 5 — 6 9 9 <

「よそ見とは余裕があるね」

「貴様の好きにはさせんぞ！」

「くっ………！」

Nが出したポケモンは古代亀ポケモンのアバゴーラだった。タイプは水・岩。虫・電気タイプの電気蜘蛛ポケモンのデンチュラを選んだノエルはしめたと思った。

「デンチュラ！『放電』！」

素早さはデンチュラのほうがはるかに勝っていた。ゼクロムほど

ではないがあちこちに電気の閃光が放たれる。弱点をついたし特攻にも自信がある。アバゴーラは一発でやられるかと思われた。だがアバゴーラは『放電』を耐え反撃してきた。

「なっ!？」

ノエルのポケモン図鑑が反応した。『特性：頑丈』。特性が頑丈なポケモンは決して一撃ではやられない。それがどんなに強力で致命的な技でもだ。

「アバゴーラ。『岩なだれ』」

「アバー!」

> i 1 8 1 0 5 — 6 9 9 <

「デンチュラっ!？」

無数の岩がデンチュラを襲う。虫タイプのデンチュラには岩タイプの攻撃はきつい。デンチュラは痛そうに鳴いた。

「チュ〜……」

「それでボクたちを止められるのかい……!」

「止められるわよ!『エレキネット』!」

デンチュラは電気を帯びた網状の糸を吐き出した。体を拘束されたアバゴーラは糸に感電して倒れた。

「おいで。バイバニラ」

Nはアイスクリームみたいなポケモンを出した。デンチュラは弱っている。だけど交代するわけにはいかない。この戦闘はどちらかのポケモンが倒れるまで続くのだ。最後まで立つことを許されているのはノエルかNのポケモン1匹だけだ。ノエルは心の中でデンチュラに謝りながら指示をした。

「『放電』！」

熱を帯びた電気が氷を溶かそうと襲いかかる。だが氷タイプの弱点は電気ではない。バイバニラは痺れたもののまだ浮いていた。

「さつきと同じじゃないか……。『吹雪』」

「バイバニイ」

バイバニラは深呼吸をすると大量の雪を吹き出した。デンチュラはみるみる凍っていき戦闘不能になった。

「ああっ！……戻って、デンチュラ。行くわよ、ドリュウズ！」

「『氷の息吹』」

これは真剣勝負だ。ボードゲームのように「待った」は使えない。バイバニラの冷たい息がドリュウズ目掛けて飛んでくる。ドリュウズは鋼の爪を盾替わりにした。

「威力は40でも必ず急所に当たるから実質2倍のダメージだよ」

「うつさいわね！『メタルクロー』！」

「ドリュウウウウウッ！」

> i 1 8 1 0 6 — 6 9 9 <

『放電』でHPが減っていたバイバニラは弱点の鋼攻撃を受けて地面に落ちた。

> i 1 8 1 0 7 — 6 9 9 <

「世界中のトレーナーのためにチェレンとアデクさんも戦っているのよ。あたしのポケモンたちもがんばってる。負けられないわ！」

ノエルの言葉にNも答える。

> i 1 8 1 0 8 — 6 9 9 <

「ボクだって世界中のポケモンのために戦っているんだ！仲間のプラズマ団のためにも、今戦っているゲーチスのためにもボクはやられるわけにはいかない！」

Nはギギアルを出した。大きな歯車が土竜を襲う。鋼VS地面・鋼。同じ鋼でも地面タイプでもあるドリュウズのほうが有利だ。

「『地震』！」

「『電磁浮遊』」

ギギアルは電気の力で浮遊した。もともと浮いていたがさらに

高く浮遊することで地面タイプの攻撃を無力化した。ノエルは舌打ちした。

「『岩なだれ』！」

「『金属音』」

「『アイアンクロー』！」

「『金属音』」

ドリュウズは地面タイプ以外の技を放つが効果は薄い。鋼タイプに岩タイプの技で攻撃したところ効果は薄い。鋼タイプで攻撃してもあまり変わらない。金属のぶつかり合い。ギギギアルの『金属音』も相まって2人の耳が痛む。

「『切り裂く』！」

「ムダだよ。『金属音』」

今度はノーマルタイプの技で攻撃したがダメージは低い。鋼タイプは鋼・岩・ノーマル・悪タイプの技に強い。毒タイプの攻撃にいたってはダメージ0だ。

「地面タイプの技が使えれば……！」

「手遅れだよ。『ラスターカノン』」

「ギギギ」

銀色の光線がドリユウズを直撃した。今まで散々『金属音』で特防を下げられたドリユウズは瀕死になった。

「くっ……。お願い！ブルンゲル！」

瀕死になったドリユウズを労う時間もない。

「ぶっ飛ばして！」

「ブル〜」

2mもあるピンク色のクラゲは『ハイドロポンプ』を放出しようと膨らんだ。だが怒涛の勢いで水を発射する前に非情な歯車に攻撃された。

「『放電』」

> i 1 8 1 0 9 — 6 9 9 <

全体攻撃の放電から逃れる術はない。ブルンゲルは一撃も放てずにやられてしまった。

「ブルンゲル！」

ノエルはブルンゲルに駆け寄った。びしょびしょでふにやふにやになったブルンゲルに触れようとしたが手を止めた。まだ電気を帯びている。触ったら危険だ。

「ブル〜……」

ブルンゲルはすまなそうに鳴いた。ノエルは泣きなくなった。

「これがさっきキミのデンチュラがボクのアバゴーラにやったことだよ」

Nの言う通りだった。これはバトルだ。やらなければこつちがやられる。やられる前にやる。やられたらやり返す。当然のことだ。だけどノエルは悲しくて悲しくてしかたがなかった。

「どうして……どうして戦わなきゃいけないの？もうこんな戦いやめて！あんたもあたしもポケモンのこと好きでしょ？こんなことしなくてわかってわかってあえるでしょ？！」

上空ではまだレシラムがゼクロムと戦っている。後ろではアデクとチェレンがゲーチスと戦闘中だ。ノエルの目から涙がぼろぼろ流れる。

「あたしNと戦いたくないよ……。あたしのポケモンもNのポケモンも傷つくのはいや……」

ポケモントレーナーの挨拶はポケモンバトルだ。バトルを通じて互いを知ろうとする。いわばスポーツだ。トレーナー同士のバトル、とりわけジム戦は楽しかった。お互い同意の上で最高のバトルをできるのだから。だがNとのバトルは全く楽しくなかった。初めてバトルしたときからそうだ。なぜ戦わなければいけないのかわからず、全然楽しくなくて、ただひたすら悲しい。Nとのバトルはスポーツではない。ただのケンカだ。

「ノエル……」

ギギギアルの『電磁浮遊』の効果が切れた。Nと同じ目線で浮くギギギアル。ノエルが次のポケモンを出さないので攻撃する素振りはない。

「ボクだつてキミと戦いたくない。でも……………キミがボクの仲間になるのなら……………世界中のポケモンを解放したあとポケモンを逃がすと約束してくれたら、この戦いをやめてもいい」

「ダメ!!」

「なら戦うんだ!キミはそんな弱い人間じゃないはずだ!」

ノエルはぐつと涙をこらえた。歯を食いしばると迷いを断ち切るように叫んだ。

「ウォーグル……………!!」

真上に投げたボールから雄々しい赤茶色の鳥ポケモンが飛びだした。

2人の英雄 (6) (後書き)

しまった。ゴーストタイプにノーマル技は効かない……。アギルダーが『心の眼』を使ったことにしてください。戦闘描写難しいです。午後にまた更新するかもしれません。

2人の英雄（7）

真上に投げたボールから雄々しい赤茶色の鳥ポケモンが飛びだした。勇猛ポケモン、ウォーグルだ。ノエルの体が赤く光り、ウォーグルも赤く輝き始めた。

「ここで強化か……。本気を出したんだね」

「ウウウウウォオオオオオッ！」

ネイティブの戦士を連想させる鷹は雄叫びをあげると歯車に爪を向けた。

「『馬鹿力』！」

「ウォオオオオオオオオオッ！」

ウォーグルはギギギアルを爪でねじ伏せた。鷹が鉄の歯車を握りつぶす。ポケモンならば可能なことだ。信じられないくらいの力で鋼鉄の体は歪められていく。

「ギッ……ギギギッ……！」

鋼の弱点は3つある。炎、格闘、地面。炎技が使えるレシラムはゼクロムと対戦中。地面タイプのドリュウズはギギギアルにやられて戦闘不能。ノエルは残った格闘タイプの技を使えるウォーグルに賭けたのだ。

「ノーマル・飛行タイプなのに強いね……。『放電』を使う暇すら

なかった」

Nは動かなくなった齒車をボールに戻した。次の相手はカラフルな鳥ポケモンだった。

「アーケオス」

「ケーーーーッ！」

ノエルは身構えた。

(鳥……いや、爬虫類?)

奇妙なポケモンだった。トカゲのような顔にクチバシはない。頭と尻尾は鱗に覆われていたがそれ以外の箇所は羽毛に包まれていた。飛ぶのはあまり上手じゃないのか地面に足がつくたびに蹴っている。

「最古鳥ポケモンだよ。全ての鳥ポケモンの祖先と言われている。キミのウォーグルもアーケオスが祖先かもしれないね」

最古ということはアバゴーラのように化石から復元されたポケモンだろう。岩・飛行タイプの可能性が高い。同じ飛行タイプでもウォーグルが不利だった。『岩なだれ』や『ストーンエッジ』を喰らったら即死だ。

「『アクロバット』」

「早いっ！」

軽やかな動きで先手を取られた。ジムリーダーのフウロも使って

いた技だ。幸い飛行タイプの技なので致命傷ではない。

「『ブレイブバード』！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

> i 1 8 1 1 0 — 6 9 9 <

「ケッ……！？」

ウオーグルは捨て身でアーケオスの腹部に直撃した。飛行タイプ最強の物理技、『ブレイブバード』。高い威力のかわりに反動を受けるがウオーグルは反動を恐れなかった。アーケオスはそのまま地面に叩きつけた。

「『馬鹿力』！」

「『ストーンエッジ』だ」

地面に叩きつけられた衝撃でできたコンクリートの固まりがウオーグルに投げつけられた。2匹はそのまま翼をばたつかせ片や握力、方やコンクリートで攻撃し合った。2匹の攻防はしばらく続いたが2匹は同時に力尽きてしまった。

「引き分けか……。それでこそキミだ。ボクのパートナーにふさわしい……！」

ノエルはバッグの中に入っているボールを見た。体力が満タンなポケモンは1匹しか残っていない。

「あと1匹……！」

「最後のトモダチ……ボクに勇気をわけてくれ！」

最後の陸戦が始まった。最後に戦うポケモンはお互いが最も信頼するポケモンだ。

「ジャローダ！」

「ゾロアーク！」

> i 1 8 1 1 1 — 6 9 9 <

「シャーーーーッ！」

「キシシシシ！」

狐VS蛇。2匹は睨み合った。2足歩行の黒い狐は不敵に笑った。緑の蛇は怒りを剥き出しにした。普段はロイヤルポケモンと言われるくらい優雅なのに。

「『辻斬り』！」

「『リーフブレード』！」

ゾロアークの爪がジャローダの尻尾に生えている葉っぱとぶつかった。攻撃のタイミングは同じだった。素早さは互角ということだ。

「『高速移動』！」

「『とぐろを巻く』!」

ゾロアークは準備運動代わりに走り回り素早さを上げた。それに
対しノエルは攻撃・防御・命中率を上げた。お互いゼクロムとレシ
ラムを除いた最後のポケモンだけあって慎重だ。

「『ギガドレイン』!」

「『イカサマ』!」

ジャローダはゾロアークの体力を吸い取った……………かに見えた
がそれはゾロアークが見せた幻だった。ジャローダはまんまとゾロ
アークに騙されひつかかれてしまう。

「幻影!?!」

「キミは戦闘に特化した人間だね。だからこんな幻に騙されるんだ
よ」

ゾロアークは火炎放射を吐き出した。ノエルは慌てて防御に回っ
た。

「『光の壁』!」

避ける暇がなかったので受け身になってしまった。攻撃を半減し
たものの弱点であるのともと威力が高めの技なのでHPはかな
り削られた。

「あちつ! いったいわね! 『巻きつく』!」

「シャーッ！」

ジャローダは地面を這いゾロアークに巻き付いた。

「『毒毒』！『搾り取る』のよ！」

牙から猛毒が注ぎ込まれゾロアークは毒を受けた。おまけに巻きつけられたまま体を搾り取るようにしめつけられたので苦しくて身動きができない。

「『火炎放射』だ！」

「ムダよ！」

ゾロアークはデタラメに火炎放射を放つが当たらない。

「『怖い顔』！」

「グアアアアッ！」

「ジャッ!？」

ゾロアークの『怖い顔』に怯みジャローダはゾロアークを離してしまった。おまけに素早さまで下げられてしまう。

「これで最後だ！『気合い玉』!!！」

「グアアアアアアルッ！」

「『リーフストーム』!!！」

ゾロアークの両手からエネルギー体が現れジャローダ目掛けて飛ばされた。一足先に遅れたジャローダはそれを大量の葉っぱで迎え撃つ。ピンチに草タイプの攻撃が上がる特性『深緑』。そしてノエルの持つ不思議な力。ポケモンとトレーナー、2つの力が相まって『気合い玉』を打ち消し、ゾロアークを飲み込んでいく。

「バカなっ!？」

ゾロアークはNの足元まで吹き飛ばされた。動く気配はない。戦闘不能だ。

「あたしの勝ちよ!ポケモンだけの理想郷は諦めて!」

Nは震える手でゾロアークを撫でた。

「まだまだ……まだ終わってない……!」

2人は空を見上げた。ゼクロムとレシラムの戦闘は継続中だ。地上でノエルとNのポケモン5匹が戦っている間も2匹の戦闘は続いていたがそろそろ限界だ。最初るときより動きが鈍っている。おそらくあと一撃で決まる。

> i 1 8 1 1 2 — 6 9 9 <

「うおおおおおおおおおおおっ!」

「……………来い!」

叫ぶノエル。待つN。2人は同時に命令した。

「クロスサンダー!!」

「クロスフレイム!!」

> i 1 8 1 1 3 — 6 9 9 <

ゼクロムとレシラムの口に雷と焰のエネルギーが集束する。全身から電気が走り、青いエネルギー体はゼクロムを包み大きくなった。ゼクロムは『クロスサンダー』ごとレシラムにぶつかった。先に攻撃してきたのはゼクロムのほうだった。

2人の英雄（8）

> i 1 8 5 8 0 — 6 9 9 <

「ブルアアアアアアアアアッ！！」

先に攻撃してきたのはゼクロムのほうだった。絶望がノエルとチエレンとアデクを襲った。電気エネルギーごとぶつかってきたゼクロムは攻撃の手を緩め^{ゆる}ない。抵抗するレシラムに噛みつきそのまま放電を続ける。

「レシラム！！」

少女は己の守護神の名を呼ぶが声が届いたかどうか定かではない。Nは黙って2頭を見守っていた。一方興奮したゲーチスはゼクロムに声援を送った。

「いいですゼクロム！その調子です！」

その場にいる全ての人間は空に注目していた。アデクとチエレンもそうだ。チエレンは大きく口を開けていたがアデクは険しい顔をしていた。

「間に合わなかったか……………いや、待て！」

最初に異変に気づいたのはアデクだった。レシラムはゼクロムに攻撃されているが炎の固まりは消えていない。それどころか今も巨大化し続けている。炎のエネルギーはついにゼクロムの『クロスサnder』と同じ大きさになった。

> i 1 8 5 8 1 — 6 9 9 <

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

それはまるで太陽だった。時は満ちた。レシラムは首に噛みついて
いるゼクロムを引っ掻き蹴り飛ばした。離れたゼクロムが異変に
気づいたときにはもう遅い。灼熱の炎の玉がゼクロムに襲いかかっ
てきた。

「ホワアアアアアアアアアアッ!?!」

> i 1 8 5 8 2 — 6 9 9 <

『クロスサンダー』と『クロスフレイム』が衝突した。雷は抵抗
するがどんどん吞まれて行き……………爆発した。

> i 1 8 5 8 3 — 6 9 9 <

「うわあっ!?!」

「むうっ!」

爆発の衝撃が地上にも及ぶ。アデクとチェレンは両腕でガードし
た。

「ぐぬぬぬ……………」

ゲーチスはケープの下で拳を握る。

> i 1 8 5 8 4 — 6 9 9 <

「きゃあっ!?!」

「ジャーア!」

ジャローダは主人を守ろうと彼女に巻き付き衝撃波から庇った。

「ああ……」

Nはガードすらせず空を見上げていた。まぶしい光りでレシラムとゼクロムの姿を視認できない。爆発の衝撃でNの帽子が飛んだ。そしてノエルの帽子も……………。

(N…………。Nはポケモンの声が聞こえるんだよね。ポケモンの心を読めるんだよね?)

シュシュごと飛ばされた帽子。ノエルの髪はほどけていった。

> i 1 8 5 8 5 — 6 9 9 <

(あたしの心も読んでよ……。こんなに……こんなにあなたのこと好きなのに……!)

Nの足がふらついた。Nは後ろから転び、地面をすり抜け、闇に落ちていった。

> i 1 8 5 8 6 — 6 9 9 <

「これでボクの……理想。ポケモンの……夢は霧散する」

翼を持たない青年は沈んでいった。運命に抗い、もがく力すらない。

「ボクはポケモンを救えなかった……。英雄失格だ……」

Nは上が光った気がした。落下するNを受け取るように抱きしめたのはノエルだった。

> i 1 8 5 8 7 — 6 9 9 <

「N……。Nのポケモンに対する思いは間違っていないかったよ……。ただ考えが極端だっただけ。Nは優しすぎたんだよ。ゲーチスに騙されちゃったの……」

「ノエル……」

「人間もポケモンも今の世界のままで幸せなの。Nはもうポケモンのために戦わなくていいの。Nはもう自由だよ……。！自分のために生きていいんだよ……。！」

「ボクは……」

Nは目を開けた。彼は少女の膝の上にいた。

> i 1 8 5 8 8 — 6 9 9 <

2人の英雄 (9) (前書き)

地震で更新が遅れる + 更新量が少なくなりました。すみません > <
散らかった部屋を片付けるのに時間がかかったんです ;

2人の英雄（9）

鐘が鳴っている。目を覚ましたら天使がいた。それとも女神だろうか。白い翼が生えていることは確かだ。柔らかい膝の上で朦朧とした意識の中でNはそう錯覚した。心配そうにNの顔を覗き込む女神。

ぼんやりした視覚が回復するとNは女神がノエルだということに気付いた。翼はレシラムのものだった。よく見たらジャローダもいる。ゾロアークとの戦いでボロボロになったままだ。レシラムも息が絶え絶えだった。レシラムとジャローダが瀕死直前だったのでノエルのポケモン図鑑は鳴りっぱなしだった。

> i 1 9 6 2 7 — 6 9 9 <

「ノエル……？」

ノエルは泣いていた。Nの顔にノエルの涙が落ちる。観覧車に乗っていたときのよう。

「よかった……目を覚まさなかったらどうしようかと思った……」

ノエルはジャローダをボールに戻した。そしてバッグからもう一つボールを取り出すとレシラムに差し出した。レシラムは黙って頷きノエルのボールに口付けた。眩い光に包まれレシラムはボールに吸い込まれた。その一連の行動はまるで騎士が姫に忠誠を誓う儀式のようだった。Nも彼女に続いてゾロアークとゼクロムをボールに戻した。

「……………ボクとゼクロムが敗れた。キミの
思い……………真実……………それがボクたちを上回ったか……………」

「もういいの！Nは十分がんばったよ……………。もう休んでいいの……………。
Nはもう自由だよ。一つの考えに囚われないで……………！」

> i 1 9 6 2 8 — 6 9 9 <

「レシラムとゼクロム……………2匹がそれぞれ異なる英雄を選んだ……………
こんなこともあるのか。同じ時代に2人の英雄。真実を求めるもの。
理想を求めるもの。ともに正しいというのか？……………わからない。異
なる考えを否定するのではなく異なる考えを受け入れることで世界
は科学反応をおこす。これこそが……………世界を変えるための数式……………」

「やっとわかったの……………？バツカじゃないの！」

ノエルは泣きじやくりながらも強気で答えた。声は震えていたが。

「ああ……………。ボクはバカかもしれない……………」

崩壊した王の部屋は静かだった。まるで2人が時空の流れから切り
離されたように。永遠と思われる静寂……………。だが残念ながら2人
だけの空間に第3者が入ってきた。ゲーチスだ。

「それでもワタクシと同じハルモニアの名前をもつ人間なのか？ふ
がない息子め」

「！」

ゲーチスの言葉にノエルは反応した。

(Nがゲーチスの息子……？)

「もともとワタクシがNに理想を追い求めさせ伝説のポケモンを現代によりがえらせたのは「ワタクシの」プラズマ団に権威をつけるため！恐れおののいた民衆を操るため！その点はよくやってくれました」

ゲーチスは西へ歩いた。太陽は沈んでいた。

> i 1 9 6 2 9 — 6 9 9 <

「だが伝説のポケモンを従えたもの同士が信念を懸けて闘い自分が本物の英雄なのか確かめたいとのたまわったあげく、女に敗れるとは愚かにもほどがある！詰まるところポケモンと育った歪な不完全なトレーナーか……」

「Nをバカにしないで！！」

ノエルはゲーチスに抗議した。だがノエル膝枕されているNはあまりにも頼りない。

「トウコ・アララギ！………いえ、ノエル・ピースメーカー！まさか滅んだはずのピースメーカーに生き残りがいたとは……。トウジ・ピースメーカーの忘れ形見ですか？役所ではトウコ・アララギの名前で登録されていたので気づきませんでした」

(ピースメーカー……？生き残り……？なにを言っているの……？)

ノエルは目の前にいる大男がなにを言っているかわからなかった。

ただ嫌な予感がした。

「アナタが伝説のポケモンに選ばれるとは完全に計算外でしたよ。ですがワタクシの目的はなにも変わらない！揺るがない！ワタクシが全世界を完全に支配するため！なにも知らない人間の心を操るため！Nにはプラズマ団の王様でいてもらいます。だがそのために事実を知るアナタ……邪魔なものは排除しましょう」

ゲーチスは懷から黒くて細長いものを取り出した。細長いものから刃が現れた。折り畳み式のナイフだ。悪の親玉はナイフを握るとその刃をノエルに向けた。

「ノエル！！」

チェレンとアデクが走ってきた。チェレンは目の前の光景と自分の耳を疑った。

「……支配だって？プラズマ団の目的はポケモンを解放することじゃ……」

「あれはプラズマ団を作り上げるための方便。ポケモンなんて便利なモノを解き放ってどうするのでしょうか？確かにポケモンを操ることで人間の可能性は広がる。それは認めましょう。だからこそ！ワタクシだけがポケモンを使えばいいんです！」

アデクの眉間に皺がよせられる。

「……きさま。そんなくだらぬ考えで！」

「なんとでも。さて。神と呼ばれようと所詮はポケモン。そいつが

認めたところでノエル！アナタなど恐るるにたらん。ポケモンもさきほどの戦いで弱っている。ピースメーカーといってもしよせんただの小娘。そのボロボロの体では自慢の怪力も使えまい。さあ。命乞いをしなさい！ワタクシはアナタの絶望する瞬間の顔が見たいのだ！」

「ノエル！！」

Nはノエルを庇おうと2人の間に入った。

「そこをどきなさい！」

> i 1 9 6 3 0 — 6 9 9 <

だが痩せているNが大きい体格のゲーチスに敵うはずがない。ゲーチスは実の息子に容赦もせずNを押しつけた。

「N！」

「誰がなにをしようと！ワタクシを止めることはできない！！」

大男を止めようとチャンピオンと少年が立ちふさがった。

「そうはせん！」

> i 1 9 6 3 1 — 6 9 9 <

アデクはナイフを奪おうと、ゲーチスはナイフを奪われまいと組み合いになった。両者ともがたいが大きいがここは経験がものを言う。1秒と経たないうちに闘いに慣れているアデクがゲーチスのナ

イフを弾く音が聞こえた。

チェレンはアデクが勝ったのを見届けると弾かれたナイフを捨てた。

「女の子相手に刃物なんて大げさじゃないか？」

> i 1 9 6 3 3 — 6 9 9 <

「ノエルには指一本触れさせないよ」

2人の英雄（10）（前書き）

すみません。ポーズの参考のために『CLAYMORE』と『NA
RUTO』の総集編を読んでいたら夢中になり更新が遅れてしま
いました。><

2人の英雄（10）

アデクの活躍により難を逃れたノエル。奥の手も失敗したゲーチスは醜い本音をさらけだした。

「ワタクシの目論みが！世界の完全支配がつ！……どういうことだ？このワタクシはプラズマ団を作り上げた完全な男なんだぞ！世界を変える完全な支配者だぞッ！？」

興奮したゲーチスを見捨ててアデクはNに問いかける。

「さてNよ……いまでもポケモンと人は別れるべきだと考えるか？」

Nは顔をそむけた。ポケモンは人と別れるべき………長年信じていた理想だが今はそんなこと微塵も思っていない。Nが黙っていることをいいことにゲーチスはあざ笑う。

「……ふはは！英雄になれぬワタクシが伝説のポケモンを手にする………そのただけに用意したのがそのN！！言ってみれば人の心を持たぬバケモノです。そんな歪で不完全な人間に話を通じるとでも思うのですか？……ポケモンの声がわかる予知能力者にポケモンの力を強化する怪力女！バケモノ同士お似合いですな！！」

> i 2 2 9 2 3 — 6 9 9 <

「くっ………！」

悔しさでノエルの顔が歪む。自分とはかく好きな人をバカにされたのが許せなかったのだ。

アデクは前へ出た。チェレンもそれに続く。

「アデクさん。こいつの話を聞いてもメンドーなだけです。こいつにこそ心がないよ!」

「そうだな……。本当に哀れなものよ」

アデクはNの顔を見た。

「Nよ……。いろいろ思うことがあるだろう。だがおまえさんは決してゲーチスに操られ理想を追い求めたのではなく、自分の考えで動いたのだ! だからこそ伝説のポケモンと出会うことができたではないか!」

> i 2 2 9 2 4 — 6 9 9 <

Nは首を横に振った。

「……だがボクに英雄の資格はない!」

ノエルはそんなことないと言いたかった。ただそれと同時になにを言ってもNを落ち込ませるだけだと感じていた。ノエルは彼の名前を呼ぶことしかできなかった。

「N……」

真面目な2人を前にアデクは頭をボリボリかいた。

「そうかあ? 伝説のポケモンとともにこれからどうするか……それ

が大事だろうよ！」

Nは再び首を横に振る。

「わかったようなことを。いままでお互い信じるもののため争っていた。だのに！なぜ！」

アデクは苦笑した。

「Nよ……お互い理解しあえなくとも否定する理由にはならん！そもそも争った人間のどちらかだけが正しいのではない。それを考えてくれ」

アデクとチェレンはゲーチスを囲んだ。ゲーチスは触るなと騒いだが格闘技を心得ているアデクには歯が立たない。チェレンもゲーチスの腕をつかむと先生のように仕切った。

「はいはい。邪魔者は退散！……ノエル！あとで迎えに来るからね」
こうして悪の親玉は2人に連行されて行った。

> i 2 2 9 2 5 — 6 9 9 <

「……キミに話したいことがある」

Nはノエルの手を取った。手を取るのは初めてじゃないのだがノエルの胸は高まった。いきなり2人きりになったこともノエルのときめきに関係していた。

> i 2 2 9 2 7 — 6 9 9 <

ノエルは王座まで連れていかれると思った。だが途中でNは足を止めた。

「まずはポケモンたちを回復させよう」

2人の英雄はレシラムとゼクロムを含むポケモンを手分けして回復させた。全てのポケモンを回復させたあとはジャローダ以外ボールに戻された。ノエルはジャローダもボールに戻すつもりだったがジャローダは残ることを選んだ。まるで2人の行き先を見守りたいかのように。Nもジャローダを拒否したりはしなかった。

ノエルの髪をブラッシングしながらNは語り始めた。

「キミと初めて出会ったカラクサタウンのことだ。キミのポケモン あときはツタージャだったね。ツタージャから聞こえてきた声がボクには衝撃だった……。なぜならツタージャはキミのことをスキといていた……」

「えっ!？」

> i 2 2 9 2 6 — 6 9 9 <

ノエルはジャローダを見た。ジャローダは目をつるわせている。蛇だけとても優しい目だ。

「一緒にいたいといっていたから」

「ジャローダ……！」

ノエルのまぶたに今までの思い出が蘇る。初めてジム戦で勝ったとき、初めて進化したとき、新しい技を覚えたとき、新しい仲間ができたとき、最終進化形態になったとき。ジャローダはいつたいなにを言っていたのだろう。言葉は通じなくてもわかりあえる。ノエルとジャローダはいつだって喜びをわかちあっていた。だが改めて人間の言葉で伝えられると感動を覚えた。

Nはノエルの髪をゴムで結びシュシュで仕上げをした。髪結いは終了した。

「これでよし」

Nは先に立ち上がり、ノエルが立つのを手伝った。そして手を取ったまま歩き始めた。7歩ほど進むとNは振り返った。

「……ボクには理解できなかった。世界に人のことを好きなポケモンがいるだなんて。それまでそんなポケモンをボクは知らなかったからね……」

「N……」

Nは生まれたときからずっとプラズマ団の城で過ごしてきた。外の世界に出たのは数か月前。ノエルが旅に出た時期と同じだった。

Nはノエルを見た。

「それから旅を続けるほどに気持ちは揺らいでいった……。心を

通い合わせ助け合うポケモンと人ばかりだったから。だからこそ自分が信じていたものがなにか確かめるためキミと闘いたい……同じ英雄として向き合いたい。そう願ったが……」

Nは足を動かした。王座はなくなっていた。ゼクロムが現れたときに吹き飛ばされたのかもしれない。

「ポケモンのことしか……いや。そのポケモンのことすら理解していなかったボクが……多くのポケモンと出会い仲間に囲まれていたキミにかなうはずがなかった……」

ノエルは聞き手に回っていた。どう反論すればいいのかわからないのだ。Nは王座が置いてあったところに立った。

「……さて。チャンピオンはこんなボクを許してくれたが……ボクがどうすべきかはボク自身が決めることさ……」

その言葉を最後にNはゼクロムをボールから出した。

（なにをするつもりなの……？）

「ノエル……」

Nはノエルを呼んだ。急に大きな声を出したのでノエルはビクツとした。

「キミは夢があるといった……。その夢……かなえろ！素晴らしい夢を実現しそれをキミの真実とするんだ！ノエル！キミならできる！それじゃ……」

ノエルの胸に横から鋭い痛みが走る。今生の別れみたいな言葉を告げられてノエルは戸惑った。

（待つて……！どこに行くの……？行かないで……！あたしを置いていかないで……！）

「サヨナラ……！」

「ダメエエエエエツッ！！」

ノエルは後ろからNを抱きしめた。最初はぎゅっと抱きしめていたが徐々に力が弱まっていく。ノエルの腕が震えているせいだ。

> i 2 2 9 2 8 — 6 9 9 <

「いや！N！死なないで！」

「ノエル……？」

ノエルの頬^{ほお}を涙がつたう。ノエルはさすがのように懇願^{こんがん}した。

> i 2 2 9 2 9 — 6 9 9 <

「ゼクロムを野生に返してどうするつもりなの？！……たしかにNはいろいろ間違えたけど……だからって自殺なんかしないで！」

「ノエル……」

「N……！あたし……あたしNのこと……！！」

Nが人指し指でノエルの唇を押さえた。

「困ったな……告白はボクからさせてよ」

> i 2 2 9 3 0 — 6 9 9 <

Nは帽子を取った。帽子を片手で握ったままノエルの顔に触れ、もう片方の手でノエルの前髪をはらった。

「ノエル……」

Nの唇がノエルに触れた。それだけでノエルの頭は真っ白になった。

「N……?」

> i 2 2 9 3 1 — 6 9 9 <

Nの唇がノエルの顔から離れた。口付けされた額^{ひたい}が熱い。

「ごめん……。言いたいことがあるけど……色んなことがおこつて……頭がこんがらがって……どう伝えればいいかわからないんだ……」

「N……」

至近距離で見つめ合う2人。口づけをするとき唇をあと10cm下にずらせば唇にキスできたのにNはあえてそれをしなかった。

「ボクは死なない。ただ世界を知るため旅に出たいんだ。きっとどの地方でも人間とポケモンは仲よくしている。それをこの目で確かめたいんだ」

$$\begin{matrix} \lceil \\ N \\ \vdots \\ ! \\ \rfloor \end{matrix}$$

自分の勘違いにノエルは安心すると同時に恥ずかしくなった。早まっていたのはノエルのほうだったようだ。だがしばらくNと会えなくなるといことがわかりノエルは落胆した。Nはノエルを元気づけるため思いがけない言葉を告げた。

「ボクはしばらく旅に出る。いつ帰ってこれるかわからない。……
ノエル！旅から帰ったら……結婚しよう」

「え？」

ノエルの顔が真っ赤になった。顔だけでなく体全体が熱い。

「えええええええええええええええええつ!？」

ノエルの頭の中で『結婚』という言葉がぐるぐる回る。15歳の少女が対面するには早すぎる問題だ。NもNで不安なように自信なさげに訊ねた。

「今度は受け入れてくれるよね……？」

ノエルの脳裏に今まで断つた数々のプロポーズが浮かぶ。

「い、い、いいいいいいわよ！結婚してあげる！そのかわり浮気しないでよね！」

「ありがとう」

Nは笑った。ノエルは婚約者の顔を直視できなかった。彼の微笑みはまるで大天使ミカエルだったから。

「それじゃあ行ってくる」

Nはゼクロムの背中に乗った。首にかけていたペンダントはない。そのかわり右腕にはノエルがつけていたシュシュがある。Nのペンダントはノエルの胸の上で踊っていた。

> i 2 2 9 3 2 — 6 9 9 <

「それじゃあ行くね」

「うん……気をつけて」

ノエルはNがくれたペンダントに触れる。まだNは目の前にいるのに早くもペンダントに頼ることになってしまった。

「なるべく早く帰ってくるから」

「うん」

「ノエルになにかあったらすぐ駆けつけるから」

「うん」

「浮気はしないから」

「当ったり前でしょ!!」

「またね」

こうしてNはゼクロムとともに旅立った。最愛の人を残して。Nの姿が見えなくなると涙が込み上げてきた。ハンカチを取る暇がないのでノエルは手で乱暴に拭いた。ジャローダは主人の涙をぬぐいたかったか短い腕では叶わぬ願いだった。ジャローダは生まれて初めて自分の短い腕を呪った。しかたなくジャローダは代わりにノエルの顔を舐めた。

> i 2 2 9 3 3 — 6 9 9 <

足音が近づいてきた。チエレンだ。ノエルは涙をこらえた。

「チエレン……」

チエレンは黙ってノエルにハンカチとティッシュを渡した。ノエルは素直に受け取り涙を拭いたり鼻をかなだりした。

「ゲーチスはハンサムっていう国際警察がパトカーで連れて行ったよ。アデクさんは2人に同行した。……………Nは？」

「旅に出ちゃった」

涙と鼻水が治まるとノエルはNが飛んで行った方向を見た。太陽はほとんど沈んでいる。空に思いをはせるノエルは恋する乙女その

もの。チェレンは幼馴染の変わりように苦笑いした。

「……………その顔、全然小悪魔らしくないぞ」

ノエルは振り返った。飾らず、気取らず、ありのままの彼女で。

> i 2 2 9 3 4 — 6 9 9 <

「あたし、天使になっちゃった」

2人の英雄（10）（後書き）

次回はエピソードです。覚悟してください。

エピソード

> i 2 3 3 1 5 — 6 9 9 <

2人の英雄の決着がついた。

黒の理想を打ち破ったのは白い真実。

ポケモンと人間の世界は守られた。

青年は黒き英雄とともに去った。

必ずイッシュに戻ってくることを少女に誓って。

それまで少女は白き英雄が守ってくれるだろう。

敵対しながらも惹かれ合った2人

ハルモニアの青年とピースメーカーの少女は

まるでロミオとジュリエットのように。

2人は争ったものの最終的には分かりあえた。

真実と理想を求め仲違いした双子の英雄の子孫だが
再び1つになる日はそう遠くないのかもしれない。

「ノエルとチェレン……大丈夫かな……？」

> i 2 3 3 1 6 — 6 9 9 <

カノコタウンでは3人の女性がノエルとチェレンの帰りを待って

いた。1人は2人の幼馴染であるベル。もう1人はベルと仲が良い夢の研究者、マコモ博士。残りの1人……マコモの先輩でありノエルの保護者でもあるアララギ博士は研究所の中にいた。

アララギ博士はベルに中で待つように言ったが彼女は頑なに断った。研究所の中にも落ち着かないのだ。ベルはノエルとチエレンを待ち切れなかった。少しでも早く幼馴染に会いたくて外で待つことにしたのだ。マコモはそんな彼女に付き合っている。アララギ博士も無理に2人を引き止めなかった。

「まだかなあ……」

ベルはしゃがんで地面を見つめていた。己の無力さにもどかしさを感じながら。ベルは悩んだ。本当は自分もノエルとチエレンとともに戦うべきだっただろうか。自分の考えにベルは首を横にふった。彼女がいても足手まといになるだけだ。それに彼女自身気付いていないが彼女は戦うには優しすぎる。マコモはそんなベルを理解し静かに見守った。

「ベLLLLLLLLマコモ博士LLLL」

> i 2 3 3 5 0 — 6 9 9 <

ベルは大好きな2人の声が聞こえた気がした。彼女は顔を上げた。

> i 2 3 3 1 8 — 6 9 9 <

ベルとマコモに向かって歩いてきたのは2人のトレーナーだった。委員長みたいな少年に活動的な少女。ベルが何時間も待ち望んだ光景だ。

「ただいま〜〜！待たせてごめんね〜〜！ちよつと手こずっちゃつて〜〜」

何事もなかったように振る舞う2人にベルとマコモは驚いた。無事に帰ってきた幼馴染を見てベルは泣きそうになった。

「ノエル……チエレーン……！」

子どもでもいい。みつともなくてもいい。泣き虫と言われた方がいい。ベルは泣きながらノエルに飛びついた。

> i 2 3 3 5 1 — 6 9 9 <

「うわああああああん！！無事でよかったよ……！」

「アハハハ。ごめん。また遅刻しちゃった」

「まったく……。君が遅いのはいつものことだろう？メンドーなやつだなあ……」

3人で談笑していると研究所の扉が開いた。アララギ博士だ。

「お茶入れたんだけど飲む？」

マコモはアララギ博士の横で笑っていた。普段家事をしないアララギ博士がお茶を入れたのだ。めずらしく気の利いたアララギ博士にマコモはクスツと笑う。ノエルは口をにんまりさせた。

「え〜〜？博士がお茶入れたんですか？地震が起こりそうです」

「ベルはまだお茶入れてないから大丈夫だよ！」

ベルはフォローになってないフォローを入れた。チエレンは苦笑しながらノエルに言った。

「……というか君は地震よりすごいものを食い止めたばかりじゃないか、ノエル」

「デヘッ」

博士と図鑑所有者たちは久しぶりの再会に喜んでいた。アララギ博士も嬉しかった。ようやく図鑑所有者たちはポケモンリーグが占領されるまえの3人に戻ったのだ。

> i 2 3 3 5 2 — 6 9 9 <

「おかえりなさい」

アララギ博士は優しく笑う。

「ベルとチエレンの両親に連絡しなくちゃ。今夜はパーティよ！ピザでも頼む？」

「「さんせい！」」

迷わず手を上げたノエルとベルにチエレンは呆れてしまった。

「おいおい……。さっきまでプラズマ団と戦ってたんだぞ？ベルはともかくノエルは疲れてないのかい？」

「パーティって聞いたら疲れなんて吹っ飛んじゃった」

「新陳代謝が活発な君がうらやましいよ……。……シーフードがいいな」

パーティに乗り気じゃないのにちゃっかり食べたいピザの味を言うところがチェレンらしい。

「じゃああたしペペローニ！」

「ベルはハワイアーン！」

「はいはい……。わかったわ。マコモ……。注文してくれる？わたしは両親に電話するから」

「はい！先輩！」

こうして大人たちはノリで決まったパーティの準備にさっそくかった。アララギ博士とマコモは研究所に入って行った。アララギ博士はテレビ電話でベルとチェレンの両親に話すため、マコモはピザのチラシと受話器を探しに。イッシュの平和は守られたのだ。ポケモンたちもトレーナーとピザを食べるのを楽しみにしているに違いない。

時は遡る。これはチェレンがアデクとゲーチスがパトカーで移動

するのを見届けたあとのことだ。Nがイツシュ地方を去り、チェレンがノエルを迎えに来る直前に起こった出来事だ。ところどころ崩壊したNの城で、ある男がライブキャスターで何者かに連絡をしようとしていた。

RRRRRRRR · RRRRRR ·

ライブキャスターから着信音がなる。男は影にいるから顔は見えない。音が止み、相手と通じたのかわかると男は報告を始めた。

「もしもし。こちらシュバーツ。………はい。エラーは去ったようです。途中で邪魔が入りましたが第1段階はなんとかクリアしました」

男の声はまだ若い。声変わりしたばかりのようだ。背もまだ伸びる余地がある。男は周り人がいないか気をつけながら王の部屋を覗いた。そこにはノエル１人しかいなかった。

「想定外のことでしたが問題ありません。修正可能の範囲です」

会話の相手が話しているのだろうか。男はしばらく黙ったままだった。だがまた男がしゃべる番となり男の顔がどんどん歪んでいった。

「……はい。……はい。そのとおりです。全て計画通りです」

男は歩きだした。影から男の顔が浮かび上がる。

ライブキャスターで話していたのは邪悪な顔をしたチェレンだった……。

一方、チェレンの話し相手もどこかの建物でほくそ笑んでいた。……女だ。薄暗い部屋で唯一光っているのは彼女のライブキャスターだけだった。

「……そう。それはよかったわ」

頬杖ほおづえしながら机の前に座る女はため息をついた。

「もう……。エラーが現れたときはどうしようかと思ったわよ。予測不可能でちよっぴりスリリングだったけど」

女は頬杖をやめて手で顎を支えた。

「それじゃあオペレーション・ブラックホワイト、第2段階へ移りましょうか」

> i 2 3 3 5 4 — 6 9 9 <

アララギ博士は自室で笑った。そばにいたチラーミイはぐふぐふ笑っていた。

とある地方。とある草むら。とある少年は草むらの上で寝っ転が

っていた。上にはどの地方のポケモン図鑑にも登録されていない見たことのないポケモンが浮いている。

> i 2 3 3 5 5 — 6 9 9 <

「お姉ちゃん……」

すがるような声は風によってかき消されてしまう。それでも少年は姉を呼ぶのをやめなかった。

> i 2 3 3 5 6 — 6 9 9 <

「お姉ちゃん……どこにいるの……?」

少年は虚ろな目で空を見た。ポケモンは飛ぶのをやめて少年の顔を覗き込む。野球帽を被り、青いトレーナーと灰色の長ズボンに身を包んだ少年の顔はノエルと瓜二つだった。

第2章「白き翼」〈完〉

エピローグ（後書き）

みなさんの愉快な反応をお待ちしています^^

プロローグ 2

1つだったものが2つになる

自然界ではよくあることだ

樹が枝分かれするように

さくらんぼが実を2つつけるように

「調和」から「平和」が生まれた

> i 2 3 8 8 3 — 6 9 9 <

そして平和の申し子もまた

2つに分かれるときがきた

「誕生」と「復活」

「創造」と「再生」

間にあるのは「破壊」

> i 2 3 9 6 4 — 6 9 9 <

2人はもともと1つだった

2人は同じ場所で生まれ

同じ場所で育つはずだった

その完璧な対称の存在に

目をつけられなければ

> i 2 3 9 6 5 — 6 9 9 <

半身を失った少年は

片割れを求めさまよった

ようやく白の少女を見つけたとき

彼は真つ黒に染まっていた

> i 2 3 9 6 6 — 6 9 9 <

彼は彼女に近づいた

再び1つになるために

白が黒に飲み込まれる

2人が1つになる日は近い

全てを超えて、全てと繋がる

unfortunate gentleman

イッシュ地方を揺るがした戦いから半年が経った。マスコミはゼクロムとレシラムの戦いを報道したものの戦いの中心にいた2人の英雄の素性は明かさなかった。………否、明かせなかったのだ。2人の未来を案じた大人たちにより英雄の秘密は守られた。2人の素性を知っているのは戦いに参加した者たちだけだった。だが人の口に戸は建てられない。限られた情報から真実を推測した者たちはささやく。英雄の1人は新チャンピオンではないのか。もう1人の英雄とはプラズマ団の王だったのではないのかと。

ノエル・ピースメーカーは四天王とアデクを倒しチャンピオンになった。Nは依然行方不明のままだ。チェレンはチャンピオンになる夢を諦めずに修行中。アデクはノエルがチェレンにチャンピオンを継がせ、引退を考えている。ゲーチスは他の七賢者とともに投獄中。マコモ博士はポケモンの夢の研究に夢中だ。ベルはアララギ博士の手伝いをしている。そしてアララギ博士は………。

イッシュから飛行機で10時間以上かかる地、シンオウ。そのなかでも都会と言われているトバリシティにある1人の若者が歩いていた。連れのポケモンは宙に浮いている。癖のある髪に中世的な顔立ち。青いジャンパーに長ズボンを履いている。スタイリッシュな少年にもボーイッシュな少女にも見える。男か女かわからない若者は無表情であてもなく彷徨っていた。カスタードクリームと同じ色をしたポケモンは若者についていった。

「こんなところにいたら危ないですよ」

ふいに若者は呼び止められる。人気のない裏通りに入ってきたのは見知らぬ少年だった。歳は若者と同じくらいだ。黒髪短髪の少年は雑誌に載っているような服を着ていた。少年は若者の顔を見て驚愕した。

「あ、あなたはもしかやノエル・ピースメーカーさんですか!？」

「……え？」

無表情だった若者の顔に変化があった。少年は興奮してしゃべり始めた。

「やっぱりそうなんですネ! 髪型変えましたか? ポニーテールもいいですがショートもお似合いですネ! めずらしいポケモンをお連れしてますね。イツシュ地方のポケモンですか?」

若者は楽しそうにしゃべるコウキをじつと見つめる。場所が暗いこともあって若者の表情は読み取りにくい。

「ぼくはナナカマド博士の助手をしているコウキ・テンジョウインと申します。いや、シンオウといいイツシュといい女性が社会進出できる時代になってよかったですね。シロナさんはシンオウ初の女性チャンピオンですし、その次のチャンピオンもアキラ姉さんでしたし、次の次のヒカリさんも女性でしたし。……あ。ヒカリさんはチャンピオンの座を辞退して今はジュンがチャンピオンですが」

「……」

若者は黙っている。無表情で話を聞いているのか聞いてないのか

もわからない。

「イッシュでもあなたが女性初のチャンピオンなんですよ？ポケモン研究でもアララギ博士とマコモ博士が期待の新人として注目されてますよね！世の中も男女平等主義にだんだん近づいて……」
「アララギはかせ！？」

低い声だった。若者は血相を変えて片手でコウキを壁に押し付けた。ものすごい力だ。レンガの壁にヒビが入っている。若者は男だった。V字型の頭をしたポケモンはチチチと笑っている。

「あのおんはどこにいる……？」
「だ、誰のことですか……」

コウキは男子の怪力と話の内容を即座に理解できず質問した。頭から血が流れている。

「とぼけるな……。アララギはかせのことだ。あのおんが……あのおんがノエルお姉ちゃんを……！」

コウキの手に力が入る。コウキは胸が^{あっぱく}圧迫され^{せき}咳をした。

「あなたはノエルさんの弟なのですか……？」
「いいからしつもんにこたえろ。アララギはかせとお姉ちゃんはどこにいる？」

2人の居場所を教えるか否か。コウキは迷った。答えなかったら死ぬかもしれない。答えたら逃がしてくれるのだろうか？反抗してもいいがモンスターボールに手を伸ばすまえに殺されそうだ。そもそもアララギ博士とノエル・ピースメーカーがどこに住んでいるか

常識ではないか。なぜ目の前の男子はそんなことを訊くのだろう。
ノエル・ピースメーカーの弟ならなぜこんな場所にいるのか。なに
よりなぜこの男子の眼はこんなに深く悲しく憎しみが渦巻いている
のだろう？

「……イツシュ地方のカノコタウンです」

苦しみから逃れたかったのか、それとも同情したのか。気づけば
コウキは答えていた。男子は手の力を緩め質問を続けた。

「……どうすればそこへいける？」

拘束こうそくされていたコウキの呼吸こきゅうは荒い。

「ここからだと言います。飛行機に乗らないと……」

「ひこうき……そのひこうきはどこにある？」

「どっつて空港ですよ……。この町にもあるじゃないですか。イツ
シュ行きの飛行機が」

「くうこうはどこだ？」

「ギンガトバリビルの跡地にあります」

そう答えながらコウキはこれからどうするか迷った。男子を空港
まで案内するべきだろうか？それとも逃げて警察に連絡するべきだ
ろうか？

「そう……。ありがとう……」

男子はコウキの決断を待たずその場から去ろうとしていた。コウ
キは男が離れるにつれプレッシャーが薄れていく。そこでようやく
コウキは男子が危険人物だと断定した。

「待ってください！」

コウキはボールを投げた。現れたのはカマキリのポケモンだ。

「どなたか知りませんがあなたは危険です。イッシュに行ったら災^{わざわ}いをもたらしそうです」

「わざわざい……？」

男子はキョトンとする。光が宿る目だったらかわいく見えたかもしれない。

「あなたをイッシュへ行かせません。力^{ちから}ある者の責任としてあなたを見逃すわけにはいかない！」

「ストライクッ！」

カマキリは死神の鎌^{かま}のような両手を構える。

「ぼくのじゃまをするの……？」

大人しく振^ふる舞^まいながら男子はさりげなくポケモンを出した。角^{つの}のあるクモのポケモンだ。

「行きますよ、アレス！」

「ストーッ！」

カマキリとクモの戦いが始まった。同じ虫でも切る者と拘束する者だ。クモの吐く糸はことごとくカマキリに切り裂かれていく。男子にとって不利な勝負なのに男子は顔色一つ変えない。戦う気のないV字頭のポケモンは面白そうに笑っていた。

ピーポーピーポー。

けたたましく鳴るサイレン。救急車から病院の手術室へ。コウキが倒れたと聞いた親しい人たちはトバリシティの病院へ集まっていた。

「コウキくん……！どうして……どうして……！？」

長髪の美少女が担架たんかに乗った少年を追いかける。担架を運ぶ男性はただ事実を述べる。

「話しかけても無駄むだです！現在意識不明の状態です。手術室に向かっているので邪魔じやましないでください」

そう言われなくても足の遅い少女はすでに担架から引き離されていた。少年が担架ごと手術室に入った。手術中と書かれたランプが点灯するのを見て少女は座り込んでしまった。

「コウキくん……」

廊下ろうかに少女以外の人はいない。彼女が1番最初に来た関係者のようだ。彼女が泣き始めたとき2人目の関係者が到着とうちゃくした。

「ヒカリ！」

「アキラ……」

男装の麗人れいじんという表現がふさわしい女性だった。彼女を見てヒカ

りは迷わず彼女の胸に飛び込んだ。

「ヒカリ……」

呼吸と涙を両立できないヒカリ。アキラから手を離れたら恐怖に負けてしまいそうだった。自分の顔を拭くこともできない。彼女のかわりにアキラはハンカチを取り出し彼女の顔を拭く。

「コウキくん……血だらけでっ……！息しているかどうかもわからなくて……！顔も見えなくて腕も両方とも折れててっ……！」

涙と呼吸と戦いながらもヒカリは説明した。その姿はまるで自分の涙に溺れるアリスだ。

「そうか……」

アキラはヒカリの背中に腕を回した。びしょびしょになったハンカチはこれ以上使い物にならない。

「先にポケモンセンターに行ってきた。コウキのポケモンたちもみんなボロボロだった」

それを聞いてヒカリはますます激しく泣いてしまう。アキラは自分の言った言葉を少し後悔した。

「なぐに。安心しろ。コウキと比べたらポケモンたちは軽傷だ。それにゴキブリなみの生命力を持つコウキがそう簡単に死ぬはずないだろう」

「……………うん」

「ヒカリが泣いているのを見たら『そんなに泣くと人魚姫のように

泡あわになつてしましますよ。ぼくは鈍感どんかんな王子と違つてあなたを幸せにしてみせます！」とか言つぞ

「うん……そうだね……」

アキラの励はげましでヒカリの涙は少しずつ納おさまつた。2人が離はなれたときにはコウキの家族が駆けつけていた。

「ちきしょう……！」

ドン。

静かであるべき病室に鈍にぶい音が響ひびく。日本人離れした金髪きんぱつの少年は壁を殴り続けた。

「ちきしょう……！ちきしょう……！なんだってんだよー！……なんでコウキがこんな目に合うんだよ？あいつがなにをしたっていうんだよー！」

「ジュン……」

ジュンは挑戦者ちやうせんしやと戦つていたため病院に來たのは翌日あしただった。コウキの知らせに気づけなかったこと。自分が駆けつけるのが遅れたこと。コウキが重傷を負ったこと。犯人が誰かいまだにわからないこと。ジュンには怒る理由がたくさんあつた。だからといって犯人と世界を攻められなかった。かわりに自分を攻めるため拳こぶしを壁かべに打ち続ける。コウキに個室が与えられたことが幸いだった。もし他の患者と共同の部屋にいたら迷惑をかけていたところだ。ジュンが拳を止めるタイミングを見計らつてヒカリは口を開けた。

「ジュンが来るまえに一瞬^{いつしゅん}目を覚ましたんだけど……すぐ眠^ねっちゃったの……」
「くっ……」

その場にいなかったのが残念なのか、それとも自分の怒りを押さえようと必死なのか。ジュンは勢^{いきお}いよくイスに座った。

「ヒカリの能力でなにがあったかわからねーのか？」

「ううん。まだはつきりとわからない」

「コウキが起きるのを待つしかないのか……」

静かな部屋にコウキの規則正しい寝息^{ねいき}が響く。ジュンは深いため息をつく^{つく}と立ち上がった。

「オレ、ポケモンたちと庭を散歩^{さんぽ}しに行^いってくる！ ついでに飲み物も買^かうけどほしいものあるか？」

「ううん。特^{とく}にないわ」

「ヒカリの好きなミックスオレ買^かってくるな！」

幼馴染^{おさなじみ}の言ったことも聞かずジュンは飛び出していった。3年前より成長したものの変わらないところは変わらない。人の話を聞かないことがまだ少しある。

「ジュン……ありがとう」

少女はいなくなった幼馴染に届かぬ言葉を送った。

「……………ごめんね。本当はコウキくん^{おそ}に触^ふれたとき全てわかったの。コウキくんを襲^{おそ}った人の顔も、行方^{ゆくえ}も」

ヒカリはコウキの潰れていない左手をそつと握った。

「どんなポケモンを持っていて、どんなふうにコウキくんと戦ったのかも知ってる」

ヒカリは手を離れた。眠っているコウキの顔に近づき頬に口付けをする。

「敵は必ず取るから……！」

ヒカリはコウキがいる部屋を後にした。ジュンと鉢合わせにならないように気をつけながら屋上へ出た。誰もいないことを確かめるとカラスのポケモンにつかまって飛んでいってしまった。

1話 飛べない小鳥

シンオウでコウキが襲撃しゅうげきされて十数時間じゅうすうじかん後……。舞台はシンオウから異国情緒いこくじょうちゆうが漂ただようイッシュヘ移った。英雄の少女と顔が瓜うり二つの男子を乗せた飛行機はフキヨセシティに着いた。これで役者は揃そろった。あとは演劇を始めるだけだ。次の犠牲者ぎせいしやは誰だろうか？

脚本家きゃくほんかは2人。主役は3人。道化は1人。脇役は3人。ゲスト出演は何人か不明。脚本家たちは登場人物に扮ふんしながら自分好みの演劇に仕立てようと企たくらむ。主役のうち1人は脚本に翻弄ほんろうされ悲劇を遂とげる。もう1人は脚本家たちを気にせず自分のシナリオを作る。最後の1人は脚本を作ったもう1人の主人公に翻弄ほんろうされる。

3つのシナリオがぐちゃぐちゃに混ざる。シナリオを書いた3人の望む結末は全く異まなる。役者たちが踊るのは舞台の上か？それとも脚本家の手の上か？踊って踊って踊りまくる。狂ったように踊る役者たち。これではまるでマリオネット。踊っているのか、踊らせているのか、踊らされているのか。最後まで立っていられるのは何人だろうか？最後に笑うのは誰だ？

> i 2 5 6 2 1 — 6 9 9 <

一機の貨物機がフキヨセシティに到着した。貨物機は夜の滑走路を進みやがてゆっくり止まった。エンジンよし。ブレーキよし。パイロットは貨物機が止まったことを確認するとふうと息をついた。

「やったー！これで今日の仕事は終わりー」

パイロットはシートベルトを外して体を伸ばした。上半身を動かすたびに胸が揺れる。プロペラみたいな飾りがついたオレンジ色のお団子。水色のびったりフィットした際どい操縦服。このパイロットらしかぬ少女こそ貨物機のパイロットでありフキヨセジムジムリーダーでもあるフウロだった。

「明日は久しぶりの休み！カミツレちゃんと一緒にヒウンシティに遊びに行くんだー。どんな服着てこっかなー？まずアイス食べてー、買い物してー、ランチ食べてー、それでカラオケ行ってー、そのあとブリクラ撮ってー」

フウロは誰もいないことをいいことに大きな独り言をつぶやいていた。歌ってスキップして自分がどこへ向かっているかわからず廊下を歩いていった。完全に浮かれている。明日のことを妄想してたらふと電気が消えた。

「あれ？停電？」

非常灯がついた。周りはぼんやりとしか見えない。とりあえず出口へ行こうとしたら物音がした。後ろからだ。フウロは人影が見えた気がした。

「誰っ！？」

ここはさすがジムリーダー。気持ちを切り替えすぐに戦闘態勢に入った。ケンホロウをボールから出し警戒する。だが冬の夜は暗い。鳥ポケモンのエキスパートである彼女に闇の中での戦いは不利だった。鳥は夜目が見えなくなるからだ。それをカバーするために暗視スコープを常に携帯しているのだが……。

「ホローツ!？」

「ケンホロウ!」

先手を取られた。暗視スコープをつける前にケンホロウが攻撃された。フウロは敵を見つけようとあせった。

(いない……どこ行っただ……?)

ケンホロウが倒れた場所を見渡すが敵はもういない。

(右……前……左……)

そのときフウロの背中に衝撃が走った。

(後……ろっ……!?)

バランスを失い足がふらつく。床に手をつこうとするが両腕を何者かにつかまれてしまう。

(人……? いや……ポケモン……?)

自分を掴んだ相手の感触からフウロは敵を人型のポケモンと特定した。だがその刹那フウロは意識を失うことになる。両腕を引っ張られ脱臼したからだ。

「いやあああああああああああああああ……!」

少女の叫びが滑走路に響く。あまりの激痛にフウロは気絶した。

2話 円卓会議（前書き）

挿絵なしで失礼します。

2話 円卓会議

(……やっと仕事が終わった)

午後8時。娯楽の町ライモンシティにて一人のモデルが仕事を終えた。金髪でショートなのに一目で女性とわかる美貌の持ち主だ。すらりとした体型でどんな服も着こなしてしまう。トップモデルでジムリーダーでもあるカミツレは待機室にいた。待機室にはカミツレ以外のモデルもいて騒がしい。

「おつかれー」

「お疲れ様」

カミツレは他のモデルとの会話に参加せずいそいそと帰る支度をしていた。お疲れ様と言うときは微笑を浮かべるので悪い印象は与えていない。カミツレには明日友達のフウロと約束がある。早く帰って寝ようと思っていた。化粧道具をポーチに戻していたらカミツレのケータイが鳴った。約束の前の晩にフウロから電話がくるのはよくあることだ。どうせ明日着る服を決められないと相談したいのだろう。そう決めつけたカミツレは着信名も見ずに電話に出た。

「もしもし」

「もしもし。カミツレくん。こちらポケモン協会だ」

カミツレは眉を潜めた。

(一体なんのようかしら？明日はフウロと遊びに行く予定なのに……)

カミツレは目を細めつつ大した用でないことを願った。

「単刀直入に言おう。フウロがやられた」

「っ……!？」

化粧ポーチが落ちた。マスカラ、口紅、アイライナーなど女の子に必須な道具が転がっていく。折りたたみ式ミラーにはフウロとカミツレが仲良く写っているプリクラが貼られていた。

午後8時半。ソウリュウシティのある建物に10人の実力者が集まった。かつこいいい3人のウェイター。褐色の研究者。オシャレな芸術家。金髪の美女。中年のカウボーイ。着物の老人。強面の老人に愛くるしい女の子と実に面白い顔ぶれがそろっていた。みな長方形のテーブルに座っていたがもし円卓に座っていたらアーサー王の円卓の騎士に見えていただろう。誰しも真剣な顔をしている。最年少の女の子でさえも唇をきゅっと固く結んでいる。強面でがっしりした体型の老人がホワイトボードを背に立っていた。ソウリュウシティの市長兼ジムリーダーのシャガだ。隣には孫のアイリスがちょこんと座っている。シャガは咳をしてから話し始めた。

「皆の者忙しい中よく来てくれた。ポケモン協会から聞いたと思うがフウロが何者かに襲われた。重症だが意識は回復した。現在フキヨセジムの病院にいる」

ジムリーダーたちの顔がますます険しくなった。だが1人だけ空気を読まずにいつと笑った。

「ジムリーダーにケンカを売るとは度胸のある奴だな。で、犯人は

特定できたのか？」

「ポッド！」

不敵な笑みを浮かべたのは熱血少年のポッドだった。サンヨウシテイのジムリーダーの一人だ。その彼を戒めたのはもう1人のジムリーダーのコーンだった。3人目のジムリーダーのデントは呆気に取りられて注意する余裕がなかった。コーンは頭を下げた。

「失礼。続けてください」

「うむ。フウロとケンホロウはものすごい力で殴られた。襲った相手はおそらく格闘タイプのポケモン。トレーナーのポケモンの可能性もある」

「なぜ格闘タイプのポケモンとわかったのだ？ただの人間の格闘家の可能性もあるじゃないか」

カウボーイの中年が鼻で笑った。ヤーコンだ。馬鹿にしているとより呆れている。

「フウロによると敵は人間のように細い手を持っていたらしい。だが力はケタ違いだ。一蹴りで背中の骨が簡単に折れた。普通の人間がトレーナーとポケモン相手に力で勝てるはずがないというのがポケモン協会の考えだ」

「普通の人間なら……ね」

カミツレはうつむいた。部屋が静まり返る。普通の人間が素手でポケモンと渡り合うことは不可能。それを聞いてその場にいる全員が同じ人物を思い浮かべた。シャガはそれを察して続けた。

「それこそ……ノエル・ピースメーカーのような特別な人間でないと不可能だ」

ポッドはため息をついた。ノエルに振られ、彼女に彼氏ができたと知ったあとも彼女を諦めきれずにいたのだ。デントはポッドの肩に手を置いた。

「ポッド……」

アイリスはジムリーダーたちを慰めるように話した。

「でも！でも！ノエルおねーちゃんはじけんがあつたとき4ばんどうろのみんなにいたよ！きょうはリゾートデザートにいつてきたんだって！」

「ノエル・ピースメーカーは容疑者リストには入ってない。安心してくれたまえ」

アイリスとシャガのフォローを聞いて全員安堵の息を漏らした。だが事件はなにも解決していない。研究者にしてはたくましい女性が無難した。4番道路から近いシッポウシティ担当のアロエだ。

「人型の格闘ポケモンって言うてもわからないよ！トレーナーのポケモンだったら他にポケモン持つてるだろうしあまりアテにならないじゃないか。他に手がかりはないのかい？」

「フウロは人影を見た。操縦していた貨物機はシンオウ地方から飛んでいった。シンオウ地方のポケモンかもしれない。」

シャガはリモコンのスイッチを押した。ホワイトボードがひつこみ奥からスクリーンが現れた。パソコンを操作するとスクリーンにシンオウ地方のポケモンが何匹か映った。

「シンオウの人型の格闘ポケモンといえばモウカザル、ゴウカザル、ワンリキー、ゴリキー、カイリキー、エルレイド、グレッグル、ドクロッグ……」

「本当にポケモンなのだろうか？」

ハチクはテーブルの上で腕を組んでいた。着物で悩む姿は戦国武将のようだ。ハチクはシャガと目を合わせた。

「なぜ協会はポケモンと断定したのだ？」

「貨物機の荷物は何一つ盗まれていなかった。フウロの所持品も荒らされた様子がない。人間だったらなにか盗んだり、フウロのボールを破壊していたはずだと結論づけた」

「密入国するのが目的だったらなにも盗まなくてもおかしくないわ」

カミツレは反論した。親友がやられたのだ。冷静を装っているが心の中では怒りのマグマが煮えたぎっている。もっとも、敵もわからずイライラしているのは全員同じだった。シャガはため息をついた。

「……私もポケモン協会の推測は信用できない。あくまでも参考になっているだけだ」

若いジムリーダーたちはため息をついた。部屋は静かだが重苦しい空気が漂っている。するとヒウンシティの芸術家であるアーティは立ち上がった。

「やめやめ！辛気臭い会議はこれで終わり！」

全員アーティを見た。アーティはニコニコ笑っている。

「時間がある人はフウロのお見舞いに行きなよ！きつと喜ぶよー
ボク行くよ！カミツレも一緒にどう？」

「そうね……そうさせてもらっわ」

めずらしくカミツレがアーティの誘いに乗った。アーティのノリについていけないので普段は断っているのに。

「他のみんなもどう？」

「コーンたちには仕事があります」

「わたしもだ」

「わたしも」

「あたしも」

「すまないが私も無理だ……」

三つ子とヤーコンとハチクとアロエとシャガは断った。アイリスの顔が明るくなった。

「アイリスはいく！！」

「じゃあ決まりー。それじゃあみんな気をつけてねー！」

カミツレとアイリスはアーティについていった。残りのジムリーダーたちは3人を見守っていたがシャガはハツと我に返った。

「各自、見えない敵に注意するように。敵は単体かもしれないし複数かもしれない。ポケモンかもしれないし人間かもしれない。以上、解散！」

こうして残りのジムリーダーたちは帰路についた。いつも以上に警戒しながら。

3話 悪夢（前書き）

後半エロいシーンあるから注意です。ばかしてありますけど。作者はエロいの大嫌いです。

3話 悪夢

風が吹く。砂が舞う。外はいつだって視界が悪くてうるさい。こ
こは砂嵐が絶えない4番道路。その中にある仮設住宅の1つでノエ
ル・ピースメーカーはうなされていた。

「うう……あぐっ……」

夢の中で誰かが彼女を呼んでいる。姿はおぼろげで見えない。声
は聞こえないが唇を動かしているのがわかる。ノエルは嫌な汗が止
まらなかった。ベッドの上で苦しそうにもだえている。

「ジャロ〜?」

彼女の手持ちであるジャロードは心配そうに泣いた。美しい緑の
蛇はベッドの下で寝ていたが主人の異変に気づき寄り添っていた。
ジャロードはどうすべきか迷った。頭を左右へチラツチラツと振つ
たあげくため息をついた。頼れるのは自分しかいないと悟ったのだ。
ジャロードは主人を起こそうと顔を近づけたそのときだった。ノエ
ルが突然起き上がった。

「ロダッ!？」

「……っ。はあ……」

ノエルの顔は真っ青だった。水面から上がったように息が荒い。

「なに……?今の……」

ノエルは壁を見た。フキヨセシティがある方向だ。ジャロードは

主人の行動を理解できず瞬きした。

「ジャローダ……」

ノエルは引き続き息を吐きながらつぶやいた。

「なにか恐ろしいものがイッシュに来たみたい……」

それはポケモンだろうか？自分に問いかけてノエル・ピースメーカーはすぐ首を振る。

（うつん……たぶん人間……）

夢の中で会った恐ろしいものを思い出してノエルは肩を震わせた。

（あんなに世界を憎めるのは人間だけよ……）

ノエルはジャローダをなでた。横目で枕元を見る。想い人のペンダントは寝る前と変わらずそこにあった。それをすぐるように手に取ると彼女はそっと彼の名を呼んだ。

「N……」

連日テレビもラジオも新聞も同じものを取り上げていた。

『昨夜フキヨセシティの貨物機でパイロットが何者かに襲われ病院に運ばれました。襲われたのはぶっ飛びガールで有名なフキヨセシティジムリーダーのフウロさん。彼女の証言によると「暗闇の中何

者かに襲われた」「ものすごい力で蹴られた」「手持ちのケンホロウの翼が折れた」そうです。犯人が怪力であること、なにも盗まれなかったこと、フウロさんの操縦していた貨物機がシンオウ地方から来たことからポケモン協会と警察は犯人をシンオウの人型の格闘ポケモンと断定。視聴者のみなさんもしイッシュで見かけないポケモンを見つけたら格闘ポケモンでなくても注意してください。怪しいポケモンを見かけたらポケモン協会が警察まで連絡をお願いします」

ノエルはぼーっとしながらテレビを見つめていた。フウロが襲われた。現在フキヨセシティの病院に入院している。ノエルは見舞いに行くべきか迷った。彼女はフウロとカミツレと仲がいい。だがフキヨセシティの方角に禍々しい気配がする。今は近寄りたくない。

「ジャ〜〜」

ジャローダは頭をノエルの肩に押し付けた。ノエルのソーセージはフォークに刺さったままだった。食べると催促しているのだ。それでもノエルは食わずにテレビを見つめている。ノエルを泊めてくれた民家のおばちゃんもノエルの手が止まっていることに気がついた。

「恐いわね。フウロちゃんかわいそうに。ジムリーダーがやられるなんてよっぽど凶暴なポケモンなんでしょうね。でもフキヨセシティなら遠いし、格闘ポケモンなら空を飛べないからここは安全ね」

「……はい」

その朝ノエルは朝食をほとんど食べなかった。その日は4番道路をあとにしカゴメタウンへ向かった。ヤミカラスと出会いその日はなぜかポケモンのレベルが上がりやすかった。ノエルは自分のポケ

モンが強くなり喜んだ。

『フウロさんを襲った格闘ポケモンはまだ見つかっていません。本日セツカシティとカゴメタウンでジョウトとシンオウ地方に生息する鳥ポケモンが目撃されましたが無関係のようです。それでも引き続き他の地方のポケモンに注意してください』

翌日ノエルはサザナミタウンで休んだ。シンオウ地方のチャンピオンのシロナと会った。その日はペルシアンと出会いいつもよりもらえる賞金が多かった。ノエルは喜んだ。

『本日ソウリユウシティとサザナミタウンでカントー地方のポケモンが目撃されましたがフキヨセシティの事件とは無関係のようです。フキヨセシティで起こった事件の新しい手がかりはありません』

次の日ノエルはホワイトパレスに行った。フシギダネと出会いその日はやけにタマゴの孵化が早かった。バチュルがたくさん生まれノエルは喜んだ。

『本日カゴメタウンとホワイトパレスでカントー地方のポケモンが目撃されました。フキヨセシティの事件とは無関係のようです。研究者たちの会見によると最近他の地方のポケモンをよく見かけるのはハイリンクが原因ということです。この時期にトレーナーがポケモンの姿を借りるのは紛らわしいですが人助けはいいことです。ですがみなさんフキヨセシティの犯人を見つけるまでハイリンクの使用はどうか控えてください』

その次の日ノエルはライモンシティの遊園地で男友達のフユオと遊んだ。その日は傷薬が切れていて困っていたところラルトスと出会いポケモンを回復してもらった。ノエルは喜んだ。

『本日サザナミタウンとライモンシティでホウエン地方とイツシュ地方に生息するポケモンが目撃されました。最近よく他の地方のポケモンの目撃情報がありますがフキヨセシティの事件とは無関係の模様です。フウロさんを襲った格闘ポケモンはまだ捕まってません。数日前にシンオウでもモデルのKOUKIが似たような手口でやられたため犯人は同一犯の可能性あります。引き続きニュースをお伝えします』

この町は朝も昼も薄暗い。住人は恐いほど欲望に忠実。狂ってしまっただけでハッピーでスリリング。ギャンブルが好きな人にはピッタリ。金さえあればなんでも手に入る。ここは欲望渦巻くブラックスティ。赤い目をした少年は無表情で町を歩いていた。

「ここにもいない……」

フキヨセシティ、セツカシティ、ソウリュウシティ、カゴメタウン、サザナミタウン……。少年は大好きな人を追って移動したが追いつかない。なぜか遠ざけられている。あんなに夢の中で呼んでいるのに。

「でももうすぐ……もうすぐなんだ……」

日に日に夢の中で彼女に近づけるようになっていく。彼の声も伝わるようになってきた。起きていても彼女の存在を感じ取れる。少年の唇の端が微かに上がった。連れのポケモンは久しぶりに見る彼の表情に喜びを感じた。少年とポケモンは大通りを歩いていた。車のエンジンに混じって少年は妙な声を聞いた。

……あん。

少年は立ち止まる。声がしたのは脇道からだった。暗くてほとんど目立たない脇道に車が1台止まっている。少年は気まぐれで道を曲がった。車の中では男と女が裸で抱き合っていた。少年はぞっとした。車の席にはスーツとセーラー服が無造作に脱ぎ捨てられている。嫌悪感を抱いた。なんて醜い光景なんだろう。この2人はいつたいなにをしているのだろうか。少年は思わず目を逸らした。そこへもう1人人間が脇道に入ってきた。

「ういゝ。ヒック！……酒だ。仕事に失敗したときは酒だゝゝ」

ただの酔っ払いだ。頭が剥げかけた中年の男は少年に絡んできた。

「どうしたんだゝ？坊主ゝ？」

「……………」

少年は黙って立ち去ろうとした。中年の男は車の中を見るなり酒臭い息をはいた。

「……ったく。これだから最近の若者はよおゝ。こんなところで援交とはいい身分だなあゝ」

少年は立ち止まって考えた。中年の男の言ったことがわからない。車の中にいる男女の行為も理解できなかった。

「……あのひとたちはなにをやっているの？」

中年の男は下品に笑った。豚みたいに鼻声でブヒヤヒヤと笑って

いる。

「なにつて　してんだよ〜」

「？」

「そ。それ以外になにがあるってんだよ〜」

「おとこのひととおんなのひとはおおきくなったらみんな　　す
るの？」

「んんん、まあほとんどはそうするだろ」

少年の瞳孔が広がった。真っ先に大好きな人を思い浮かべたのだ。

「お姉ちゃんも……お姉ちゃんもいつかこんなことするの……？」

少年は中年の男が否定することを願った。酒が回った男は少年の
気持ちに気づかず肯定した。

「彼氏ができたらするんじゃないやあねえの？もしくは援交。んんん坊
主の姉ちゃんならきれえだろうな。けっこ稼げるんじゃないやねえか？」

無神経な言葉に少年は絶望した。大好きな姉が汚れる。知らない
男によって。美しく清らかな姉が汚れるところを想像し少年は狼
狽した。

「いやだ……そんなのいやだあああああああああああああ
あああ！！」

中年の男はなにが起きたかわからなかった。少年に押され道路に
飛び出し車に轢かれたのだ。数秒と経たないうちにうちに今度は金
属が壊れる音に混じって男女の悲鳴が聞こえた。男女が乗った車も
同じ道路に投げ出された。その夜ブラックシティは車の警音器とサ

イレンの音で賑わった。

『たった今速報が入りました。先ほどブラックシティで交通事故により3人の男女が負傷しました。中年のサラリーマンと20代の男と10代後半の少女が襲われたようです。中年のサラリーマンは突然脇道から道路に現れ車に轢かれました。サラリーマンに続いてぐしゃぐしゃになった車が道路に投げられ、車に乗っていた20代の男と10代後半の少女が負傷しました。なお、2人は車ごと攻撃された模様で道路に投げ出される以前から負傷していた模様。負傷した3人は意識不明の重体であり脇道でなにかあったかわかりません。警察はフキヨセジムジムリーダーのフウロさんを襲った格闘ポケモンと関連があると見ています。もしそれが本当なら格闘ポケモンはフキヨセシティから時計回りにブラックシティまで移動したことになります。シンオウの事件もフキヨセシティの事件も今回起こったブラックシティの事件も夜に起こっています。安全が確認されるまでみなさん夜の外出は控えてください』

ピッ。

テレビが消えた。白衣を着た20代後半の女性がにやにやしている。

「やっと来たわね……」

暗い研究室で彼女はチラーミイの首をくすぐった。カノコタウンの研究所でアララギ博士は1人ご機嫌だった。

3話 悪夢（後書き）

人間の肉体も精神もあまり好きじゃないです。美しくない。自分の裸を見るのも嫌いなんですよ？女性の肉体だからまだマシですが。保健体育の授業のときは嫌悪感を抱いてあまり勉強しませんでした。おかげで帰国するまで性行為に関する知識が何点か欠けてました（苦笑）。

4話 運命（前書き）

今回は上手く書けたと思います。

4話 運命

『……ちゃん。……ちゃん』

誰かが呼んでいる。とても親しい誰かが。彼女は目をうつすら開ける。彼女は上も下もわからない、明るいうで暗い空間に1人浮いていた。

（またこの夢だ）

数日前から繰り返し見ている、誰かが自分と呼ぶ夢。日増しに声が強くなっている。彼女はこのあとどうなるか知っていた。何回も見ているのだから。夢を見るたび内容が少しずつ付け足されていく。

『……ちゃん』

どこからともなく鏡が現れる。彼女は鏡に近づいた。両手で触れると鏡に誰かが写る。こげ茶の髪。ポニーテール。ベースボールキヤップ。ピンク色のトレーナー。フリルのスカート。オーバーニーのブーツ。鏡に写るのは彼女そのもの。最初は誰が写っているかもわからなかったのに今でははっきり見える。鏡の中の彼女は笑っていた。でも鏡を覗いている彼女は笑ってない。彼女は戸惑っていた。なぜ鏡に写る自分が自分と異なる表情を浮かべているかわからなかったからだ。鏡の彼女は唇を動かす。

『……ちゃん』

（えっ！？）

そこから先は前の夢では起こらなかったことが起きた。鏡に写る彼女の瞳の色が変わったのだ。赤い。血よりも赤い。赤くなると同時に光も消えた。本物の彼女はとっさに鏡から離れようとした。鏡からもう1人の彼女が飛び出した。口元は笑っているのに目は少しも笑っていない。赤い目の彼女は青い目の彼女の首を絞めた。

「いやあああああああああああああああああああああ
っ！！」

彼女は悪夢から解放された。誰もいない古代の遺跡で彼女の悲鳴が反響する。目を覚ますと彼女が最も信頼する5匹のポケモンが彼女を守るように取り囲んでいた。ポケモンたちを見てホッとするものの息切れしていた。彼女は震える手で自分の首を触った。

「生きてるよね……？あたし生きてるよね……？」

蛇と蜘蛛と海月と鷺と土竜は口々に答えた。彼女にはなにを言っているかは理解できなかったが。

砂が空中で踊り狂う。視界が悪い。息苦しい。油断したら砂が目や口に入る。ここは古代の城。4番道路からリゾートデザートを経由して行ける遺跡だ。砂漠のど真ん中にある。城へ行っても建物は9割以上砂に埋もれておりとても城には見えない。地上に残っているのは5体のポケモン像、2本の折れた柱、そして中へと続く階段のみ。だがひとたび中に入るとそこは別世界。城と呼ぶのにふさわしい内装になっている。複雑な設計とその広さ、そして年月の経った壁はかつての永華を思い起こさせる。そんな城の入り口にノエル・ピースメーカーは物思いにふけていた。そばには美しい大蛇が護

衛のように立っている。

（おかしいわ……。あの夢を見始めてからなにもかもおかしい……！）

フキヨセシティで襲われたフウロ。どこから感じる禍々しい気配。ブラックシティでの交通事故。特定のポケモンと会ったあと起こる不思議な現象。手持ちのポケモンのレベルが上がりまくったり、いつもよりもらえる賞金が多かったり、ポケモンのタマゴが孵るが早かったり、手持ちのポケモンが急に回復したり……。イッシュは物騒なことになっているのに自分の周りではいいことばかり起っている。かえって不気味だ。ポケモンと会ったあとに起こる現象についてマコモに相談したらあっさり答えが返ってきた。

『それはきつとハイリンクの力よ。そのままの姿で手助けできないどこかの恥ずかしがりやさんがポケモンの姿を借りて手助けするの。一説では平行世界にも繋がっているとも言われているの。本当かどうかわからないけどね』

ハイリンクはイッシュ地方の真ん中にある島だ。マコモも開発に貢献したCギアというデバイスを通してしか行けない不思議な場所。一部の者たちはハイリンクを神聖視している。……誰かがハイリンクの力を借りて自分を助けていることはわかった。だがなんのために？無償で手助けしているとは思えない。なにか企んでいるのではないだろうか？なぜ会ったとき赤い目をしたポケモンの姿で来るのか？なぜ虚ろな目をしているのだろうか？

（ヤダよ……怖いよ……助けてよ、N……）

ノエル・ピースメーカーはこの上ない不安に襲われていた。誰か

から追われている気がする。この数日間町を転々と逃げ回っていたがだんだん逃げ場所がなくなっていく。そんな錯覚がした。夢を見るのを恐れ眠りたくなかった。かつてイツシュを救った英雄とは思えない。

Nがいなくなってからというもののノエルはときおりプラズマ団とNにゆかりのある場所を訪れていた。Nの手がかりを求めて。だが会うのは事情を知らないプラズマ団の残党ばかり。彼女が会いたいの七賢者でも下っ端でもない。愛する思い人だ。古代の城もこうつしたNに関係ありそうな場所だったかの外れだった。砂が減り前まで行けなかった地下に行けるようになったがそれだけのことだ。求めていたものはなかった。それが今ではノエルは自分の身の安全のため古代の城に籠城している。砂嵐が得体の知れぬ敵から自分を守ってくれることを願って。だがそれも昨日限りのことだ。既に荷物はまとめた。今日は別の場所で寝るようだ。ノエルはパートナーのジャローダをお供に古代の城から出ていこうとしていた。

（ゲーチスは私がピースメーカーの生き残りだと驚いていた。そしてNがハルモニアの末裔とも言っていた……）

ノエルはアロエから借りた本を出した。タイトルは『The Twin Towers』。双子の塔を意味する。自分の父親と思われるトウジ・ピースメーカーが書いた本だ。彼によるとリゾートデザートにある古代の城とサザナミタウンにある海底遺跡は対になっているというのだ。長い年月により古代の城は砂に埋もれ、海底遺跡は水に沈んだ。どちらがハルモニアの城でどちらがピースメーカーの城かはわからない。海底遺跡には所々に古代文字で書かれたメッセージがあった。だが当然解読できない。Nとノエルの先祖について書かれてあるかもしれないのだが……。一緒に海底遺跡を調べたシンオウ出身の考古学者であるシロナは言った。ハルモニアの末

裔であるNなら古代文字を読める………もしくは読めなくてもその数式に秀でた天才的な頭脳で解読できるかもしれない。だがNはいない。遠い外国へ旅立ってしまった。ノエルは抗議する元気もなく俯いた。シロナはノエルを慰めるように言った。

『ヒカリちゃんならもしかして読めるかもしれないけど………』

そう言ったシロナも自信がなさげだった。ヒカリはシンオウ地方でシロナのあとにチャンピオンになった少女だ。凶鑑所有者で2年前に起こった四大神話ポケモンの争いを止めた英雄の1人。今はモデルのHIKARIとして働いている。なぜそこでヒカリの名前が出てきたのかノエルにはわからなかった。

「えっ」

ノエルは突如顔を上げた。彼女にしか感じられないものを感じたのだ。誰かがやってくる。砂嵐のせいで前は見えないし足音もかき消されている。だがノエルにはわかった。誰かがやってくる。ノエルの心に感情の波が押し寄せてきた。

懐かしい……懐かしい……！でも覚えてない。

会いたい！とても会いたい！いや、会いたくない！

愛しい……抱きしめたい！でも怖い……。

アナタハ誰デスカ？

相反する感情が湧き上がる。ノエルの体がこれ以上にないくらい震えた。遊園地でNの正体を知ったときやリユウセンの塔でのゼ

クロムとの遭遇、Nの城でのレシラムとの出会いにゼクロムとレシラムの死闘……それらを凌駕する恐怖が彼女を支配した。彼女の視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・第六感が警報を鳴らしている。彼女の細胞まで逃げると訴えているようだった。

「シャーーーーーッ！」

ジャローダの声でノエルは我に返った。まだ相手を視認できないのにジャローダはもう威嚇を始めていた。50m先に人影らしきものが見えてくる。恐がっている場合ではない。ジャローダに釣られノエルも気を引き締めた。

（来る……！）

敵はゆっくりこちらへ向かっている。舐めているのか。油断させようとしているのか。ノエルは自らも戦えるようにファイティングポーズを取る。だがその闘争心も適を見たとたん消えてしまった。

（うそ……）

目の前の人物は彼女と同じ顔をしていた。赤い目は砂嵐の中際立っていた。

5話 拒絶（前書き）

『ブラックホワイト』1周年。みなさまありがとうございます。

5話 拒絶

ぼくにはおとうさんもおかあさんもいなかった。
おじいちゃんとおばあちゃんもいないとおもう。
でもぼくはしあわせだった。
ぼくにはお姉ちゃんがいたから。

ドッペルゲンガー。ノエルが目の前の人物を見て最初に思い浮かべた言葉がそれだった。自分と同じ姿をした人と会うと死ぬ。だがすぐにノエルはその現象を否定する。目の前の人物は顔と髪の色こそ同じだがそれ以外は異なる。髪は相手のほうが短い。帽子は赤と黒。ジャンパーは水色。ズボンはこげ茶。スニーカーは赤と黒。そう。違うと言えば違う。だが不気味なくらい似ていた。色と形がノエルの着ている服と対照的だった。もしノエルが男の子だったらこうなっていたと言わんばかりに似ている。

「お姉ちゃん……」

「えっ……?」

先にしゃべったのは相手のほうだった。声が低い。男か女か区別がつかなかったが男のようだ。

「ああ、お姉ちゃん……やっとあえた。お姉ちゃん……こんなにきれいになって……!」

少年は腕を伸ばして近寄ろうとする。だがノエルは後ずさった。

「シャーーーーーッ！」
「！」

ジャローダが牙を向いた。少年は仕方なく立ち止まる。だが大蛇に睨まれたというのに少年は動じていない。異常だ。

「ちょっと待つて……あなた誰！？」

「え……？」

ノエルはジャローダを抱き寄せた。ドアの後ろに隠れる小さな女の子のように。ノエルは少年の言動が理解できなかった。少年はなぜノエルがそのような行動を取るのか理解できなかった。

「お姉ちゃん……ぼくのことわすれちゃったの……？ぼくだよ……エスターだよ……」

ノエルは走馬灯のように今までの記憶を辿った。走馬灯と違う点は生まれたときから遡るのではなく現在から過去へ遡っていることだ。ベルとチェレンと出会い同じ幼稚園に通うことになっていや、もつと前のことだ。アラギ博士に引き取られカノコタウンで暮らすことになり 違う。それよりもつと前の出来事。彼女は自問自答した。自分はどこで生まれどこで育ったか？なぜアラギ博士に引き取られる前の記憶が曖昧だ。

（確かあたしは孤児院で育って……）

どの町かは思い出せない。否。思い当たる節はあった。イッシュを旅しているとき一つだけ初めて行ったのに懐かしく感じた町があった。カゴを編むように積まれたレンガの建物。昔からの風習を守る町。孤児院の先生がよく言っていた。夜になったら怪物が出てく

るから外へ出てはいけない。

『おねえちゃん』

ふと脳裏に映る記憶の欠片。小さい男の子がノエルを見て微笑んだ。小さいノエルは喜んで男の子に手を差し出した。

「エス……ター……？」

ノエルは一瞬目を丸くし焦点の定まらない目で少年を見る。無意識に右手がピクリと動く。

「そうだよ……エスターだよ……。お姉ちゃん、ぼくがわからないの？あのおんなになにかされたの……？」

「あの女って誰よ……？」

虚ろな赤い目。怯える青い目。ノエルは震える声で聞き返した。唇は笑っているように見えるが瞳は揺れている。エスターと名乗った少年は気だるそうに答えた。

「はかせのことだよ……。アララギはかせ。あいつがぼくからおねえちゃんをうばったんだ……」

「え……？」

少年の瞳に憎しみの炎が灯った。ノエルはそれに気づかず戸惑う。ノエルは情報を整理しようとした。目の前にいる少年は彼女の弟なのだろう。こんなに彼女に似ていてしきりにお姉ちゃんと呼ぶのだから。少年はアララギ博士が彼女を少年から奪ったと言う。それは博士が彼女だけを引き取り少年は引き取らなかったからか？生き別れの弟は10年以上かけてようやく姉である彼女を見つけた。それ

が今起きていることなのだろうか？

（ちょっと待って！なんかおかしいわ……）

なぜノエルは今まで自分に弟がいたことを忘れていたのか？なぜ博士は彼も引き取らなかったのか？……そもそもカゴメタウンから古代の城までたどり着くのに10年もかかるものだろうか？10年間もイツシュをぐるぐる回っていた？だとしたらイツシュを旅するとき一人くらい彼女に訊ねたはずだ。君に兄弟はいないかと。考えても考えても答えは出ない。むしろ考えれば考えるほどノエルは恐くなった。再び恐怖が体を支配し始めた。今度は脳にまで恐怖が達している。ノエルは口をパクパクした。

「知らない……知らない知らない知らない！あんななんて知らないっ！」

初めて少年の表情が大きく変わった。虚ろな目はさらに絶望した。少年は泣きそうな声で姉を呼んだ。

「お……お姉ちゃ……！」

「ジャー……ッ……！」

ジャローダがものすごいスピードで動いた。だが動いたのは少年に向かってではなくノエルの真後ろだった。振り返ったノエルが見たのは空を切るジャローダだった。だがおかしい。ジャローダは口を開けたまま閉じようとしなない。まるでなにか見えないものを加えているように。

『チチチッ。いったいな。どうしてボクがここにすることがわかったのさ？』

直接頭に響くような声。それは徐々に姿を現した。立体映像のように足元から色が投影された。ジャローダに噛まれていたのは背中と足に翼が生えたクリーム色のポケモンだった。ノエルは息を飲んだ。

「なっ……！？」

見たこともないポケモンだった。それもポケモンなのにしゃべっている。レシラムとゼクロムがしゃべっているのは見たことあるがあの2頭とは違う。宙を浮いて透明になっているのでエスパークプだろうか。テレパシーで話しかけられているのかもしれない。ノエルは反射的に図鑑を取り出した。

<ビクティニ Lv.66>

少年はぼそとつぶやいた。

「あれ……バレちゃったの……？ いままでバレたことなかったのに……つまんない」

『せつかく気絶させて優しく運ぼうとしたのに』

蛇には唇の辺りにピット器官というものがある。赤外線で感知するので暗闇でも獲物を発見でき、例え獲物が擬態していてもわかる。そのおかげでジャローダはビクティニを捕らえることができた。ビクティニは痛みに顔を歪めつつも笑っていた。

『ティニティニティニ でも負けないよ。勝つのはボクたち！』

次の瞬間ノエルはおぞましい光景を目にすることになった。ビク

ティニとジャローダが炎に飲まれた。凶鑑は技名を<火炎弾>と表示していたがノエルの目に入らなかった。代わりに写ったのは黒焦げになってスローモーションで倒れていくジャローダだった。ノエルは叫ぶことしかできなかった。パートナーを受け止めたくて手を伸ばすが間に合わない。

「ジャローダあああああああああああああああ！！」

これはまだ悪夢の始まりにすぎなかった。

6話 双子 <前編>

ノエルがエスターと出会う同時期、マコモはムンナとアララギ博士の研究所にいた。アララギ博士に大事な話があると呼び出されたのだ。ところがいざ研究所についてみれば研究所のドアは開けっ放し。中に入ってもアララギ博士の姿が見当たらない。洗い物が溜まったキッチンの流し。ファッション雑誌と学会の雑誌で散らかったリビングの床。アララギ博士の部屋の机も資料が乱雑していた。机にも床にも本棚にもあげくにはベッドにも書類と書籍がごちゃごちゃに置いてある。マコモは深い息をついた。

「もう！人を呼んでおいていないとは何？ドアに鍵はかかってないし無用心！あいかわらず先輩は整理整頓が苦手なんだから！」

「ムウ〜？」

マコモのムンナは「そうなの？」と聞いているようだ。マコモは足元に気をつけながら答えた。

「学生時代もよく片付けの手伝いをさせられたものだわ。わたしもたまにサボるけどここまでひどくならないってば！机がこんなのでよくまともな研究なんてできるわね」

「ム〜」

文句を言いつつマコモは机の上を片付け始めた。使われていない本を重ねて机の端に寄せ、バラバラになった紙をそろえてクリップで止める。すると紙の下から写真立てが出てきた。

「ほら！写真立てまで倒れて……えっ！？」

危うくマコモは写真立てを落としそうになった。そこには幼いノエルと彼女と同じ顔をした子どもが写っていたからだ。

「なにこれ……？双子……！？」

「ムウ！？」

マコモとムンナは目を丸くした。ノエルが髪の毛が結べるほど長いのに対してもう1人の子どもは髪の毛が短かった。肩まで届きそうな髪は左右に跳ねている。男の子か女の子かわからない。その子どもはノエルの後ろに隠れるように立っている。大人しくて内気な子のようなのだ。

「どういうこと……？ノエルには兄弟がいたの？でも先輩はそんなこと一言も……」

マコモは動揺していたがとりあえず写真立てを置いた。目を泳がせていたら今度は別のものを見つけてしまう。開いたままの引き出しにノートがあった。ノート自体は何の変哲もないノートだが表紙に書かれた文字が気になった。

「Operation Black White」

大きく雑に書かれた文字はアララギ博士らしくなかった。整理整頓が苦手で家事ができなくても文字は綺麗だったからだ。

「オペレーション・ブラックホワイト……？」

「ム？」

マコモはノートを手に取った。見てはいけない気がした。見たら何かが壊れてしまう気がした。だがマコモも一研究者だ。好奇心に

は勝てない。マコモは周囲に自分とムンナしかいないことを確かめるとノートを開いた。

「ポケモンのルーツを知ることが昔から私の夢だった。ベトベターとヤブクロンは人間の出した廃棄物から生まれた。ビリリダマはある日突然モンスターボール工場で発見された。ギアルは100年前までイッシュ地方に存在しなかった。時代が進むにつれ新種のポケモンが生まれてくる。比較的最近発見されたポケモンを研究するのは容易い。そのポケモンの抗生物質と生まれた環境をすぐ調べられるのだから。だが私が知りたいのはもつと昔のポケモンのルーツ

ポケモンという存在がいつどうやって生まれたのかが知りたい。特に私が気になるのはゼクロムとレシラム。元は一つのポケモンだったのに二つのポケモンに分かれたとは興味深い。私はぜひとも二匹が分かれる前の姿を拝みたい！あの二匹を分裂する前の状態に戻せばポケモンのルーツがわかるかもしれない！！　　運良く私はそのルーツを解明するきっかけを掴んだ。そしてこの計画を思いついた。このノートには私がきっかけを掴んだ日から野望を果たすその日までの出来事を記録していこうと思う。」

「は……」

マコモは声を漏らした。アララギ博士も大胆なことを書いたと感心していた。今のところノエルとノエルの兄弟について書かれてない。最初のページ以降は日記になっていた。

「19XX年　　月　？日

その日私は事情聴取のため警察に呼ばれた。もちろん私は何もしていない。たまたまトウジ・ピースメーカーが会った最後の人物が私だったのだ。私とトウジは特に親しい間柄ではない。学会でたま

に顔を合わせる程度だった。

考古学者のトウジは 月 日にリバイガーデン島の灯台で遺体となって発見された。解剖結果によると死因は打撲傷。複数の人間とポケモンに殴られたのだと言う。まだ30代だったのに亡くなるとは気の毒だ。警察はその遺体が本当にトウジ・ピースメーカーか確認するため私に死体を見せた。私のアリバイが確認され容疑者リストから私は外された。そのまま家へ帰ろうとしたら警察が愚痴をこぼしているのを聞こえた。トウジの遺体の引き取り手がいらないらしい。

トウジの両親は10年以上前に他界している。妻はつい先日出産で子どもを生んだあとまもなく亡くなっただけ。その妻の両親も既に他界している。親戚もいない。残された子どもはなんて不幸なのだろう。同情したが私はまだ研究者になっただけ。人としても研究者としても経験が不足している。こんな私に子どもを引き取ることなんてできない。かわいそうだが養育費すら出せない。そもそもお金が無い。あるといえばあるがそれは父の金だ。自立したばかりなのに他人の子を引取り親に金銭面で頼ることなんてできない。子どもを引き取ることはできないがトウジの遺体は引き取ることにした。供養して墓を建てようと思ったのだ。せめてそれくらいはやってやろうと思った。

19XX年 月 日

トウジ・ピースメーカーの遺体を引きとった。トウジも私も日系なので日本式に遺体を燃やして遺骨だけ墓に入れることにした。トウジが務めていた研究所からトウジの家がカゴメタウンにあることを聞いた。仕事が一段落したら休みを取ってカゴメタウンへ行こう。

トウジの妻の遺体を遺骨にしたり、墓を建てたりするのに時間がかりそうなので宿を予約しなければ。」

マコモはノートから顔を離した。

「まあ……。トウジ・ピースメーカーってきつとノエルのお父さまのことね」

「ム？」

ポケモンであるムナは文字は読めない。いきなり知らない名前の人物が出てきても首を傾げるのは当然である。マコモはノートに夢中でムナに説明する余裕はなかった。

「博士も優しいじゃない。知り合いを供養をするだなんて……。結局ノエルも引き取ったしお人好しのね」

マコモは続きを読み始めた。

「19XX年 月 日

休暇を取れたのでカゴメタウンを訪れた。小さな町なので道端にいる人に尋ねたらすぐにトウジの家とトウジの妻が入院していた病院がわかった。病院で事情を説明すると霊安室へ通してくれた。ユリコ・ピースメーカーが造花に囲まれて横たわっていた。まるで眠り姫のようだった。遺体を運ぶ手続きをしたら看護婦にトウジの子どもを引き取ってくれそうな人に心当たりがないか訊かれた。私はトウジの交流関係を知らなかったので答えられなかった。すると看護婦はため息をついた。

『かわいいそうに。かわいい双子の赤ちゃんなのに……』

双子。その言葉を聞いて私の心臓が大きく鳴った。今までの研究やトウジが言っていたことを思い出した。まだ世間には公表されていないが今年の1月11日にある文献が発見された。その文献にはハルモニアとピースメーカーという名前が載っていた。おそらく双子の英雄の名前だろう。トウジはラストネームがピースメーカーであることから自分の先祖が英雄かもしれないと笑っていた。自分の先祖のことをもっと知りたいと。もし もしトウジ・ピースメーカーの言う通り彼の先祖が双子の英雄の一人なら彼の子どもたちも英雄の子孫ということになる。レシラムとゼクロムは元は一つのポケモンだった。だが双子が仲違いをすると二つのポケモンに分かれ正しいと思う方の味方についた。ピースメーカーに双子が生まれるなんてまるで英雄の再来だ。この二人なら英雄の戦いを再現できるかもしれない！私はぜひ赤ちゃんにお目にかかりたいと言った。

廊下を歩きながら看護婦はトウジの子どもが双子の男女ということとを教えてくれた。女の子が先に生まれたので後に生まれた男の子は弟となった。」

「あ。じゃあ写真の子は弟なんだ」

マコモは改めて写真立てを見る。やんちゃに笑うノエルにぎこちなく笑う弟。弟はノエルよりも女の子らしい。

「男女と聞いて私は少しガツカリした。男女ということは二卵性双生児なのだろう。双子の英雄は伝説によると男で顔がそっくりだった。双子の英雄は一卵性双生児の可能性が高い。それでもピースメーカーの双子に私は期待していた。乳児室に入るとベッドに双子の赤ちゃんがいた。かわいかった。二人ともトウジとユリコを足して二で割ったような顔だった。私は念のため医者と看護婦に本当に二

卵性双生児が訊ねた。医者は体の検査は一通りしたが遺伝子までは調べていないと答えた。私の熱意に負けたのか医者は双子の遺伝子を調べた。その結果奇跡が判明した。なんと二人は半一卵性双生児だったのだ。今まで卓上の理論でしかなかった半一卵性双生児の存在が立証されたのだ。医者も看護婦も奇跡だと喜んだ。医者たちはさっそく大学病院に連絡して双子をもっとよく調べようと提案した。」

マコモは目を丸くした。

「半……一卵性……！」

双子には二種類ある。一卵性双生児と二卵性双生児だ。一卵性双生児は元々一つだった命が二つに分かれたので遺伝子の情報が同じだ。それゆえ一卵性双生児は通常同性しか生まれない。二卵性双生児は異なる精子から個別に生まれたので同性とは限らない。同じ親から生まれたとはいえ遺伝子の配合は異なる。一卵性双生児とも二卵性双生児とも異なるのが半一卵性双生児だ。半一卵性双生児は遺伝子を75%共有している。性別が異なることもありうる。理論上ではありえない半一卵性双生児が約15年前に生まれていたのだ。しかもその半一卵性双生児の片方がノエルということにマコモは動揺した。

「ポケモンみたいに怪力で……レシラムにも英雄として認められたから特別とは思っていたけど……まさかノエルが双子の英雄の子孫だなんて……。しかも半一卵性双生児……！」

とんでもないことを知ってしまったとマコモは思った。だが後悔はしていなかった。ノエルが一体どんな星の下生まれたのか気になった。ノートから手を放せない。目が文章を追ってしまう。

「ムウ？」

ムンナは物音が聞こえた気がした。だがマコモは物音にもムンナの反応にも気づかなかった。マコモは取り憑かれたようにノートを読み続けた。

6話 双子 <後編>

「だが私は反対だった。双子を自分の研究のため独占したかった。双子には両親も親戚もない。悪魔が私に囁いた。私は医者たちにトウジ・ピースメーカーの謎の死を伝えた。トウジは何者かに殺害された。犯人はまだ捕まっていない。もしトウジに子どもがいると知ったら双子は殺されるかもしれないと。医者たちの表情が変わった。私は双子の存在を秘密にするため思いついたことはなんでも話した。トウジの両親もユリコの両親も亡くなっているなんておかしい。誰かの陰謀かもしれない。ピースメーカーは双子の英雄の一人と同じ名前だ。ピースメーカーなんて名前はイッシュにはトウジの家族しかない。トウジが死んだ日リバイガーデン島には水色の服を着た集団が目撃された。トウジを殺したのは彼らかもしれない。ピースメーカー家の者が狙われている。もし双子が生まれたことを知ったら次に狙われるのは双子だ。私は新聞を見せて力説した。多少強引だったがピースメーカー家の不幸な生い立ちのおかげで信憑性があった。事実トウジ・ピースメーカーの死は謎が多い。トウジとユリコの両親が亡くなったのは偶然かもしれないが医者たちに危機感を抱かせるには十分だった。医者たちを完全に説き伏せるまであと一歩というところで私は言った。

『私がこの子たちを守ります！』

幸い双子の出生届はまだ出されてなかった。ユリコ・ピースメーカーには悪いが母親の欄には私の名前を書かせてもらった。父親の名前は空欄。私は子どもを産んでもいないのに戸籍上シングルマザーになった。双子にはとっさにトウコとトウヤという名前をつけた。出生届にユリコとトウジの名前を書かなかったせめてもの償いだ。こうして戸籍上双子の親になることに成功したが現時点では私に双

子の面倒を見ることは無理だった。双子の成長過程も気になるがやるべきことがたくさんあった。双子の英雄を再現する計画を練るために調べなければいけないことがやまほどあった。そこで私は双子を守るためと医者たちと相談しトウコとトウヤをカゴメタウンの孤児院に預けることになった。5年後には研究も落ち着き双子を引き取れると思ったのだ。その間孤児院には多額な寄付を条件に双子の面倒を見てもらうことにした。双子の観察日記も書かせ毎週私の家へ送らせよう。金銭面はしかたなく父に頼ることにした。子ども好きの父のことだから喜んで金を出してくれるだろう。トウコとトウヤが半一卵性双生児だということはトウジを殺した犯人が捕まったあと公表すると医者たちに約束した。こうして私は形だけの契約書も書いた。だがあの双子を誰にも譲る気はない。関係者はいずれ消してやる。

19XX年 月 日

双子を確実に守るため病院にユリコ・ピースメーカーの診察歴を偽装してもらった。ユリコは男児を出産したあと死亡。生まれた男児も生後亡くなったということにした。残酷だが仕方がない。トウジを殺した犯人はまだ見つかっていない。水色の集団もあれつきり目撃情報がない。油断はできない。調べてみたらトウジの父親はトウジが14のときに遺跡探検中に死亡、母親は18の時に病死したことがわかった。ユリコは16で交通事故で両親を失っていた。二人とも若いときから苦勞をしていたようだ。二人の子どもは死んだことにしたためピースメーカー夫妻の遺品と保険金は政府が回収してしまった。双子が財産を相続した上で引き取ってもよかったが念のため。誰かに双子を嗅ぎつけられたら困る。遺品はあらかじめ目を通して見たが研究に使えるものはほとんどなかった。

19XX年 月 日

カノコタウンに帰ったから私は研究に没頭した。双子の英雄の資料を片っ端から漁った。レシラムとゼクロムの情報も集めた。伝説の双子と英雄のポケモンたちをもっと知るために実際に遺跡へ赴いたり本を書いた人たちに会いに行ったりした。ノエルとエスターを育てるため双生児に関する文献も読んだ。レシラムは女性的なポケモンなのでトウコに、ゼクロムは男性的なポケモンなのでトウヤにふさわしいだろう。白いレシラムに黒いレシラム。伝説の双子の争いを再現し、レシラムとゼクロムを掛け合わせる計画を私はオペレーション・ブラックホワイと名付けた。レシラムとゼクロムが融合した完全体を研究すればポケモンのルーツを解明できるはずだ。

19XX年 月 日

レシラムとゼクロムを融合させる方法が思いつかない。そもそもレシラムとゼクロムは戦いのあとどこへ行ってしまったのだろうか？まだ生きているのだろうか？封印されているのか？手掛かりは全くない。だが私は諦めない。仮に死んでいても蘇らせてみせる。細胞の一つでも手に入ればクローン技術で培養してやる。

19XX年 月 日

トウジ・ピースメーカーが亡くなったリバイガーデン島の灯台へ行ってみた。灯台は警察によって徹底的に調べられたはずだ。目新しい発見は期待していなかったものの一応調べてみた。部屋を調べていたらおかしな箇所を見つけた。暖炉の一部がでっばっている。レンガを外したらパズルみたいなものが見つかった。床のくぼみに嵌めこむようだ。パズルを解いたらプレシヤスポールがあった。研究所に帰って開けてみるとさざりんごみたいなポケモンが現れた。見たことのないポケモンだった。私は慌ててポケモンをボールに閉

まった。羽を動かさず飛び回りテレパシーで話しかけてきたことから伝説のポケモンでエスパークタイプなのだろう。道理でトウジが殺されたわけだ。おそらくトウジと謎の集団はこのポケモンを巡って戦ったのだろう。このポケモンについても調べよう。オペレーション・ブラックホワイต์に使えそうだ。

19XX年　　月　　日

カゴメタウンを去ってから3週間が過ぎた。双子は戸籍ではトウコ・アララギとトウヤ・アララギになっているがもつとふさわしい名前をつけなければ。私は女の子にはフランス語で生誕祭を意味する“N o ? 1”、男の子には英語で復活祭を意味する“E a s t e r”と名付けた。だがノエルはともかくイースターだと語呂が悪い。E a s t e rと書いてエスターと呼ばせることにした。双子が孤児院に引き取られる寸前に新たな名前を伝えておいた。トウコとトウヤだとトウジを連想させると思ったからだ。苗字は引き取ったあとに与えると伝えた。」

そのあと数ページノエルとトウヤの成長について書かれていた。どうやら毎日ノートをつけていたわけではなくノエルとトウヤやゼクロムとレシラムについて新しい情報を得るたびに記録していたらしい。マコモはノエルとエスターの成長記録を読んでクスッと笑った。赤ん坊のときからノエルは好奇心旺盛で活発だったらしい。孤児院の大人たちもノエルには相当振り回されたようだ。エスターは大人しくいい子であり手のかからない赤ん坊だったようだ。ノエルにオモチャを取られてもケンカをしなかったと書いてある。二人は赤ん坊のときから二人で行動することが多かったらしい。お風呂も一緒に入らないと二人とも泣き喚いたそうだ。

「へえ」。双子ってかわいいわね」

写真を見ているわけでもないのにマコモはノエルとエスターが愛おしく思えた。それほど二人の成長記録は姉弟愛を感じさせたのだ。ときどきぶつそうなことが書いてあるがノエルとエスターの成長過程を読んでホツとしている自分にマコモは気がついた。

「20XX年 月 日

ノエルとエスターは4歳になったが性格は変わらない。ノエルは外交的でエスターは内向的だった。レシラムは真実を求めた英雄の味方しゼクロムは理想を求めた英雄の味方についた。このまま行くとやはりレシラムはノエルを選びゼクロムはエスターを選ぶのだろうか？ レシラムとゼクロムがどちらを選ぶのか計画に支障はない。ただ少し気になったのはエスターがノエルに依存していることだ。今までの成長記録を呼んでいるとどうもエスターは英雄の資質に欠けている気がする。ノエルなしでは生きられないようだ。常にノエルの後ろを歩いている。15歳になる頃には自立しているといいが。ノエルは孤児院の子どもたちのリーダー的存在らしい。彼女の英雄の資質は申し分ない。」

「うーん……」

マコモは目を閉じた。現時点ではノエルとエスターの両方について書かれている。だが今ではエスターの存在など欠片も感じない。もしかして死んでしまったのだろうか？だからアラギ博士もノエルもエスターについて話さなかったのだろうか。エスターを思い出すと辛いので誰にも話してなかったのかもしれない。マコモは次のページをめくった。

「20XX年 月 日

私は信頼できる助手と籍を入れた。彼は私に心底惚れている。オペレーション・ブラックホワイトも全力で手伝うと承知してくれた。これで父親役は確保した。ノエルも喜ぶだろう。

20XX年　？月？日

ようやく準備が整った。ノエルとエスターを迎える準備ができた。私は助手と双子を迎えに行った。私は孤児院と病院の人たちに秘密を守ってくれたことを感謝した。ノエルは自分に両親ができることを嬉しがっていた。エスターは人見知りなので不安そうだった。ヘリコプターで移動する際はランクルスをボールから放った。ランクルスにカゴメタウンに住んでいた全ての住民にノエルとエスターについての記憶を消してもらった。これで誰もノエルとエスターを覚えてない。ピースメーカーも半一卵性双生児であることも守られた。

研究所についたあと助手とランクルスにノエルの記憶をいじらせた。エスターの存在を彼女の記憶から消すためだ。ノエルは私の娘として引き取り幸せな人生を遅らせる。エスターは遠くの地へ捨ててホームレスとして生かせる。性別・性格が正反対の二人を正反対の環境に置くことによって対照的な存在にしようとしたのだ。正反対の環境で育てばいずれ二人は対立することになる。それが私の狙いだった。エスターの記憶はあえて消さなかった。彼を苦しませ、生かせるためには姉の記憶が必要だったからだ。ランクルスの催眠術でエスターを眠らせ私は彼をハウエン地方で捨てた。ビクティニの入ったボールを置いて。」

「なにこれ……？」

マコモの手は震えていた。ゼクロム、レシラム、双子の英雄、ピースメーカー、半一卵性双生児、融合、記憶操作……………ノートに散りばめられた言葉からアララギ博士の狂気を感じる。女子高からアララギ博士と知り合ったマコモでもなぜアララギ博士がそこまで伝説を再現することに執着するのか理解できなかった。

「どうしよう……………ムンナ……………わたしとんでもないことを知ってしまったわ……………！」

マコモの頬がヒクヒク動いていた。笑ってみるが恐怖は消えない。マコモがムンナを見るとムンナは飛ばされているところだった。ムンナは床に重なってあった本にぶつかって本に埋もれた。

ぐふ……………ぐふぐふぐふ……………。

笑い声が聞こえた。ムンナが飛んできた方向にはアララギ博士のチラーミイがいた。チラーミイはかわいい姿に似つかず低い声でぐふぐふと笑っていた。

7話 長髪の美少女（前書き）

メリークリスマス！そして今回登場しないけどノエルとエスターに
ハッピーバースデー！

7話 長髪の美少女

“Attention all passengers. We have now reached Mistralton City, Unova. Thank you for using All Nihon Airway.”

機内で英語のアナウンスが流れる。乗客たちが棚から荷物を取ろうと動く中1人だけ微動だにせず座り続けている少女がいた。紺色のジャケットスーツを着た黒髪の少女はスーツケースを膝に置いたまま動かない。

（そろそろかしら）

乗客が荷物を取り終えたところ彼女は列に加わった。列はゆっくりと進んでいく。飛行機から出た彼女は遅くも早くもない速度で歩いた。急ぎたいが足取りが重く普通速度になってしまふのだ。

「Welcome to Unova! Bienvenue? Unys! イッシュへようこそ!」

電光掲示板では各言語で乗客を歓迎している。だがあちこちにいる警官の姿が目立つ。少女は一瞬警官の拳銃に目を奪われるがすぐ気を取り直す。1週間前より警備が厳重になったフキヨセ空港を少女は1人で歩いていた。

1時間半後、ボディチェックと荷物チェックと入国手続きを終えた少女はようやく空港を出られた。それでも荷物を預けていないぶん早く出られたのだ。風で美しい漆黒の長髪がなびく。

風に運ばれた英会話を聞きながら彼女はため息をついた。英語は理解できる。会話も練習したので問題ない。ただ彼女はある人物の言ったことを思い出しただけだ。

『いつか2人で外国へ行きましょうね！そのためにも英語をマスターしないと』

あのととき同じ黒髪の少年は教科書を見せながら笑っていた。彼女は二度目のため息をついた。ため息は白くなりやがて消えた。

（コウキさんと英語を勉強したのに……まさかこんな形で私だけ行くことになるだなんて……）

初めての海外旅行だというのに彼女は一人で来てしまった。大切な人を巻き込まないためとはいえ心細かった。彼女はボールからポケモンを出した。皇帝ポケモンのエンペルトだ。イッシュではお目にかからない。威厳がありながら優雅なペンギンは周囲を警戒した。

「15時間もボールの中に閉じ込めてごめんね。ナポレオン」
「クエー！」

エンペルトは彼女を抱きよせたがすぐ離れる。

「クエツ、クエクエクエクエー！クエクエクエクエエエツ！」

ヒカリはエンペルトの言葉を聞いて口元を隠すように笑った。エンペルトは『か、勘違いしないでよね！ただ単に寒かっただけなん

だから！』と言ったのだ。進化して3年も経つのにパートナーはツンデレのままだった。生まれつきツンデレのなのかもしれない。寂しさが紛れたところでヒカリの背後から腕が伸びた。その腕はヒカリにからみつきヒカリは思わず悲鳴を上げた。

「キヤーーーーーッ!?」

「ヒカリちゃ~~~~ん! ひさしぶり~~~~?」

背後からヒカリに抱きついてきたのは全身真っ黒の金髪の美女だった。黒髪のヒカリより周囲に溶け込んでいるが美人なので目立つ。美女は周囲の目を気にせずヒカリに絡み続けた。

「お、おひさしぶりですシロナさ……」

「あいかわらずかわいいわね? パパとママは元気? ボーイフレンドは? その服ゲンさんとおそろいでしょ?」

「クエエエエッ!」

ヒカリは顔を赤らめ美女の腕から逃れようとした。エンペルトが翼を振り回したためシロナさんはやむを得ずヒカリを離れた。

「からかわないでください! 私がなんのためにイツシュへ来たか知っているでしょう?」

少女の真剣な表情ともっともな言葉。シロナはキョトンとしたがすぐ顔がキリツとなる。

「そうね……。ふざけてる場合じゃなかったわ」

冷たい風が彼女たちを叩いた。ヒカリは体を温めようと腕を組んだ。シロナは腕時計を見て歩きだした。

「外は寒いわね。イツシュへ来たばかりで悪いけどやることたくさんあるわ。喫茶店で休んだあと病院へ行くわよ」

「はい」

2人と1匹は無言で歩いた。そのあと2人は喫茶店で紅茶を飲むまで一言も話さなかった。

シロナの言う通り1時間後には2人は病院へ行った。喫茶店でヒカリは事件だけでなくイツシュ地方の知識まで叩きこまれた。2人がフキヨセ病院へ行った理由は一つ。正体不明の敵に襲われたフウロに会うためだ。エンペルトはボールに戻している。日本の病院と比べながら歩くヒカリにシロナは忠告した。

「フウロはあたしよりおっぱい大きいけど浮気しないでね」

「なんの心配してるんですか……？」

ヒカリは目を細めつつ頬を叩いた。暗い顔をしていたらフウロと他のジムリーダーに頼りないと思われる。活を入れると大きく深呼吸をした。シロナはヒカリの心の準備が出来たのを確認するとドアをノックした。

「どうぞ」

落ち着いた声がした。フウロの声だろうか。シロナがドアを開けると病室には2人の女性がいた。ベッドに横たわっているお団子頭の少女がフウロなのだろう。椅子には金髪ショートの美女が座っていた。シロナとは違うタイプのブอนด์美女だ。シロナは元気よく

2人に挨拶した。

「ヤッホー フウロ！カミツレ！ひさしぶり！」

「あ。シロナさんだ。ひさしぶりー！」

お団子頭の少女は明るく挨拶を返した。包帯が巻かれていなければ病人とは思えないくらいだ。ノックをしたとき「どうぞ」と言った声とは違う。あのときは金髪ショート的美女が返事をしたのだろう。感情の起伏があまりない金髪ショートの美女はシロナに質問した。

「ひさしぶりじゃないわ。3日前もここで会ったでしょう」

「あ。そうだったっけ？」

「そうよ。……後ろのアジア人は誰？」

注目がヒカリへ移った。今までヒカリが黙っていたのは彼女が部外者であるのと英語を聞きとるのに精一杯で話す余裕がないからだった。ヒカリは自己紹介しようとするがシロナが割って入る。

「あたしのガールフ……」

「ヒカリ・ハナゾノです。シンオウの元ポケモンチャンピオンです。イツシュのジムリーダーたちと会えて嬉しいです」

やや堅苦しい英語でヒカリは話す。ヒカリの名前を聞いたとたんフウロとカミツレの表情が変わった。

「すっごーい！シロナを倒した子でしょ！」

「あなたが噂の……」

ヒカリがシンオウで活躍した話はイツシュでも知れ渡っているよ

うだ。おそらく2年前起きた四大神話ポケモン戦争の話もシロナから詳しく聞いたのだろう。英会話に不慣れなヒカリの代わりにシロナはここへ来た要件を説明した。

「あのね。ヒカリには特別な力があつて……英語ではなんて言うんだっけ？波？念？とにかく物質から発するオーラみたいなものを読みとる力で……」

「御託並べてないで実際にやってみればいいでしょう。いい？フウ口」

「いいよー」

シロナとカミツレのやりとりを見てヒカリはカミツレに苦手意識を抱いた。シンオウではノリのいいジムリーダーが多いせいかカミツレを冷めていると感じた。失礼かもしれないがギンガ団のジュピターに似ているとヒカリは思ってしまった。それにしてもカミツレがヒカリの能力をすんなり受け入れたことは意外だ。ヒカリは恐る恐る訊ねた。

「信じてくれるんですか……？」

「ごく稀だけど世の中には特別な力を持つ人間がいるのでしょうか？Nとノエルのように」

「はい……」

Nとノエル。ヒカリも聞いたことがある。イッシュで争った2人の英雄はイッシュ以外の地方でも話題になった。2人がどんな能力を持っているかは喫茶店でシロナから聞いていた。カミツレが理解を示したことはありがたいがヒカリはカミツレが苦手なままだった。カミツレはクールすぎる。フウ口へ近づく前にヒカリはシロナを見た。シロナは両手を合わせて謝罪を示していた。ヒカリは気にしていませんと笑うとフウ口のとなりに座った。カミツレとは反対の位

置だ。

「さわつてもよろしいでしょうか？」

「そんなかしこまらなくてもいいって！」

「失礼します」

2人の手が触れた。フウロに触れた瞬間ヒカリの目にビジョンが流れる。今まで起こった出来事が逆の順で起こっていく。お見舞い、入院、治療の場面がぼんやりと浮かびやがて目的の事件へと移る。フウロが飛行機を着地させた。ストレッチをしている。スキップしながら歩いていたら人影が見えた。ポケモンがやられ次はフウロが襲われる……………！

「同じだわ！！」

「……！？」

シロナとフウロとカミツレは驚いた。ヒカリが立ちあがると同時に日本語で話したからだ。フウロは瞬きするとヒカリに頼んだ。

「……英語でお願い」

「コウキくんを襲ったのと同じオーラ……犯人は人間だわ！人間とは思えないほどすごい力の持ち主！」

「ええ……っ！？」

「なんですって！？」

ヒカリが英語で説明するとフウロとカミツレは同時に叫んだ。フウロは肩をそわそわさせた。

「で、でもアタシが蹴られたとき100mは余裕で吹っ飛んだよ？ほんとに人間がやったの？」

「ノエルと同じ力……！　そういえばノエルはまだお見舞いに来ていない。……いいえ！　まさか！　ノエルがそんなことするはずが……！」
「みんな落ち着いてってば！」

シロナは興奮した少女たちを鎮めた。彼女は冷蔵庫を開けるとミックスオレを取り出し3人に配った。シロナも喉が渴いていたのでミックスオレを飲む。病室は飲み物を飲む音が聞こえなくなった。会話を再開したのはカミツレだった。彼女はヒカリにいくつか質問をした。

「犯人の顔は見たの？」

「いいえ。残念ながら……」

「あなたの力で声は聞こえる？」

「私の能力はオーラを読みとるので声は聞こえません。わかるのは感情と輪郭と記憶です」

カミツレは顔を下げた。　なにか考えたあと顔を上げた。

「背はどれくらい？　体格は？」

「背はフウロさんと同じかな……。　コウキくんより低い。　体格は普通です」

「男か女かわかる？」

「そこまではちょっと……。　あつ！　髪の毛は肩までの長さで跳ねていました。　コウキくんがとても優しく話しかけてたから女の子かも！」

「そこまでわかるの？」

カミツレは目を細めた。　シロナは顎に手を添えて呟いた。

「少なくともコウキくんは女の子だと思ったのね」

「はい！」

フウロはしゃべるカミツレとヒカリを交互に見ていた。自分を襲った犯人のことを話しているとはいえ彼女は犯人を一切見ていない。会話に加わりたくても加われない。彼女が思いついた質問はカミツレが全て口にする。ヒカリはコウキとフウロの記憶を照らし合わせようと集中した。

「コウキくんは犯人の顔を見て驚いていたわ。誰かと勘違いしたのかしら？それで揉めてバトルしたみたい……」

病室にいる4人は考え込んだ。

「少女かと思ったら少年で喧嘩したとか……？」

シロナはアキラを思い出した。アキラは女にしておくのがもったいないくらいかっこいい。だが女だ。男性の恋人だっている。

「もしかして……。ノエルと見間違え……た？」

カミツレの発言にヒカリとシロナとフウロははっとした。もしカミツレの言った通りならつじつまが合う。フウロは高い声を上げた。

「犯人はノエル似の少年ってこと！？」

「少年かどうかわからないけどノエルに似ていることは確かね」

カミツレはフウロをフォローした。シロナがそれに付け加える。

「そして犯人はノエルと血縁関係がある可能性は高いわ。だって顔が似ていて同じ怪力なんですよ。ノエルの生き別れの兄弟かしら？」

「ノエルは孤児だもの。いてもおかしくないわね」

今度はヒカリが会話についていけない番だった。ノエルと会ったことがないし彼女のことをよく知らないので推測できない。シロナは背筋をピンと伸ばした。

「そうとわかったら対策が打てる！ポケモン協会への連絡はカミツレに任せるわ」

「ええ。アタシは？」

「フウロはお留守番。その怪我じゃ戦えないでしょう？」

「ぶう」

「どこへ行くつもり？」

フウロはへそを曲げ、カミツレは眉をひそめた。シロナはヒカリを引っぱりながら答えた。

「海底遺跡！ヒカリちゃんの力でノエルのルーツを探るわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8605o/>

ブラックホワイ

2011年12月25日21時53分発行